伊勢遺跡確認調査報告書Ⅶ

伊勢遺跡確認調査概要

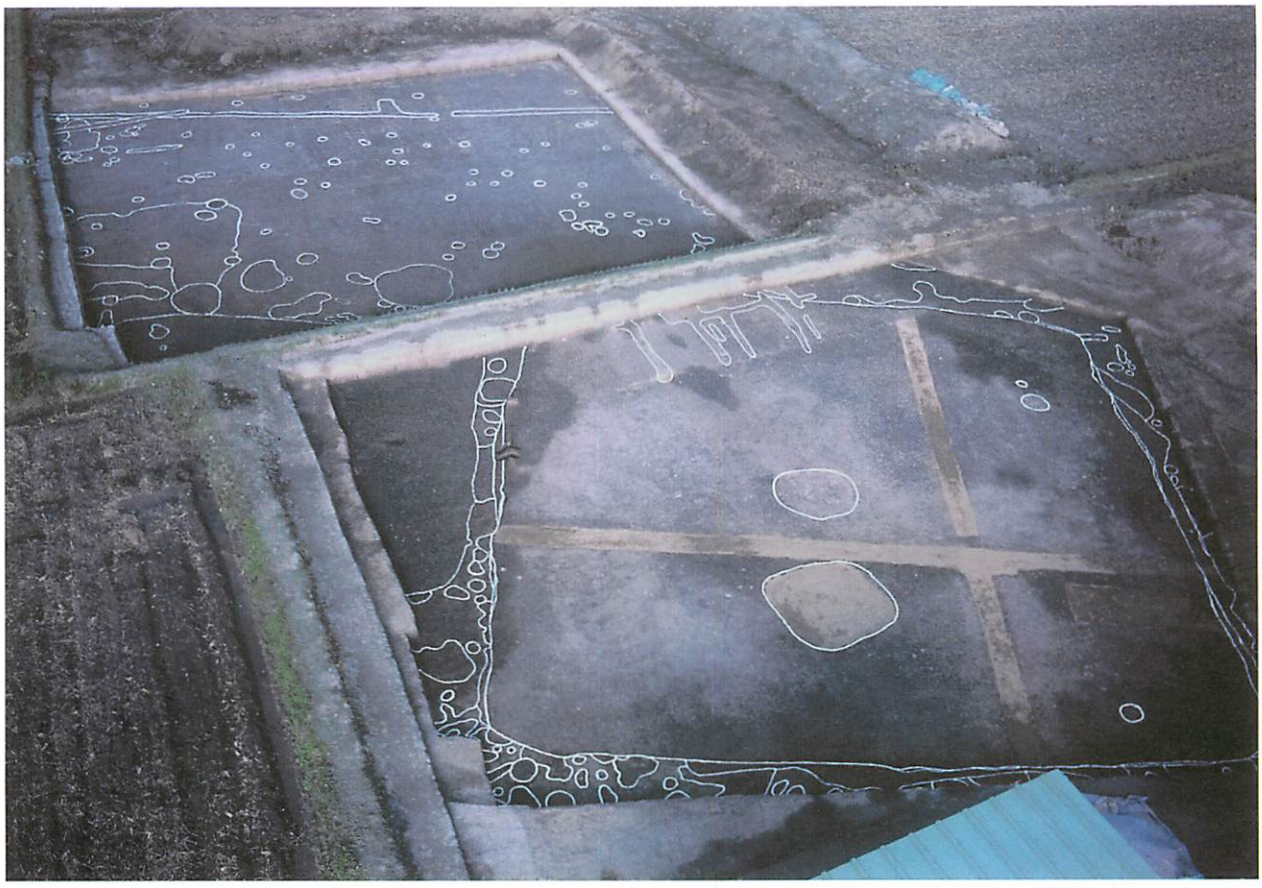
守山市文化財調査報告書

平成２１年(2009)３月

滋賀県守山市教育委員会

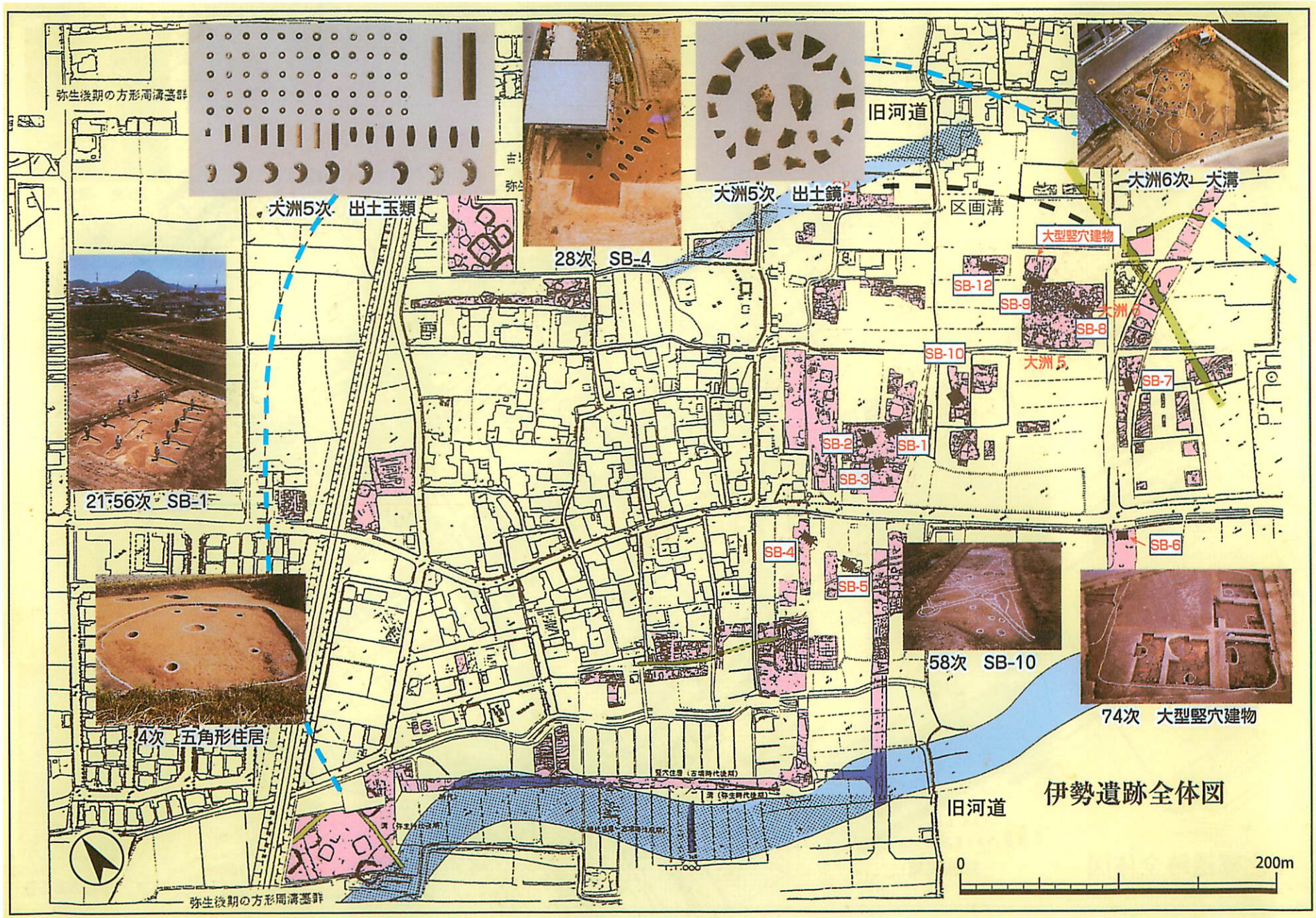
伊勢遺跡ＳＢ－１　全景（南西から）

伊勢遺跡ＳＢ－10　全景（南から）



大型竪穴建物検出状況（南東から）

ＳＢ－12　検出状況（南西から）


弥生後期の方形周溝墓群
大洲5次　出土玉類
28次　SB-4
大洲5次　出土鏡
旧河道
区画溝
大洲6次　大溝
大型竪穴建物
SB-12
SB-9
SB-8
大洲7
大洲5
SB-10
SB-7
SB-2
SB-1
SB-3
21・56次　SB-1
SB-4
SB-5
SB-6
58次　SB-10
74次　大型竪穴建物
4次　五角形住居
旧河道
伊勢遺跡全体図
0
200m
弥生後期の方形周溝墓群

伊勢遺跡全体図

伊勢遺跡航空写真

序　　文

滋賀県の南部地域に所在する守山市は、京阪神のベッドタウンとして発展してきました。また、工場建設が進み地域に産業が定着するとともに、年々人口が増加しています。近年では大型商業施設も建設され、多くの市民が利用しています。

守山市は全国的にみても、住みよさランキングで湖南地域の市町とともに上位に位置しており、人口の増加はそれを物語っているといえます。工場建設や商業施設の建設、そして宅地造成やマンション等の建設、道路や教育施設など公共施設の整備など、各種の開発によって「のどかな田園都市　守山」の景観や住環境が大きく変化しているのも事実であります。このような開発によって、地下に埋もれていた貴重な文化財が発見され、私達祖先の足跡が明らかになってきました。

私達は、豊かで住みよい町づくりを目指しながらも、祖先から受け継いだ文化遺産を大切に保護し、子孫に引き継ぐとともに文化的な環境をつくる義務があります。

伊勢遺跡はこのような開発の進展の中で発見された弥生時代後期の遺跡です。調査が進むにしたがって、ムラからクニへ移り変わる様子がわかる貴重な遺跡であることが明確となり、全国的に注目されるようになりました。

伊勢遺跡が国の成立を探る重要な遺跡と考えられることから、守山市ではその保存を図るため確認調査を実施してきました。本書は伊勢遺跡の重要性を物語る確認調査の成果についてまとめたものです。

最後になりましたが、伊勢遺跡の調査に携わって頂いた方々、協力頂いた地権者並びに地元の方々にお礼申し上げるとともに、今後とも本市の文化財保護行政に御理解・協力頂きますようお願いいたします。

平成21年3月

守山市教育委員会
教育長　山川　芳志郎

例　　言

1．本書は、平成10年度から平成19年度にかけて実施した伊勢遺跡の範囲確認調査成果の概要報告書である。調査は国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。整理業務は平成20年度国宝重要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。

2．本調査は、守山市(伊勢町字中東浦80番地)阿村町字下大洲166－1番地他の水田地で行った。本書には確認調書の主要な成果と伊勢遺跡を理解する上で重要な調書成果について収録している。

3．本調査は、守山市教育委員会が実施した。

4．調査整理業務は平成20年4月1日より平成21年3月31日まで実施した。

5．整理調査業務にかかる教育委員会事務局は以下の体制で実施した。

平成20年度整理調査

教育長	山川芳志郎
教育部長	三品　長治
教育次長	田中　良信
文化財保護課長	岩崎　　茂
調査担当者	伴野　幸一

7．本確認調査・整理業務及び本報告書作成については伴野が担当した。

8．本報告書では標高は東京湾ポイントを使用し、北方位は日本平面国家座標六系のＸ座標を用い磁北を併記している。

9．本調査にかかる遺物・図面・写真資料は、市立埋蔵文化財センターに保管している。

伊勢遺跡確認調査調査報告Ⅶ

序　　文

例　　言

目　　次
挿 図 目 次
図 版 目 次

第１章　確認調査に至る経緯と伊勢遺跡の歴史的環境……1
第１節　確認調査に至る経緯……1
第２節　伊勢遺跡の地理的環境……3
第３節　伊勢遺跡の歴史的環境……5
第４節　伊勢遺跡の既往調査と調査報告一覧……9

第２章　伊勢遺跡中心部の調査成果……14
第１節　方形区画（ＳＢ－1、ＳＢ－2、ＳＢ－3、ＳＢ-(4)）……14
第２節　楼観（ＳＢ－10）……17

第３章　南代地区の大型建物……19
第１節　独立棟持柱付建物（ＳＢ－5）……19
第２節　独立棟持柱付建物（ＳＢ－6）……19

第４章　大洲地区の大型建物……22
第１節　独立棟持柱付建物（ＳＢ－7）……22
第２節　独立棟持柱付建物（ＳＢ－8）……22
第３節　独立棟持柱付建物（ＳＢ－9）……22
第４節　独立棟持柱付建物（ＳＢ－12）……24

第５章　大型竪穴建物と焼土塊遺構……27
第１節　大型竪穴建物……27
第２節　北東浦地区焼土塊遺構……27

第６章　五角形住居と出土土器……31
第１節　伊勢遺跡内の五角形住居……31
第２節　五角形住居出土土器……33

第７章　伊勢遺跡内の区画施設……37
第１節　大洲地区の大溝……37
第２節　大洲地区の弧状溝……37
第３節　南代地区の区画溝と導水施設……41

第８章　伊勢遺跡の墓域……43

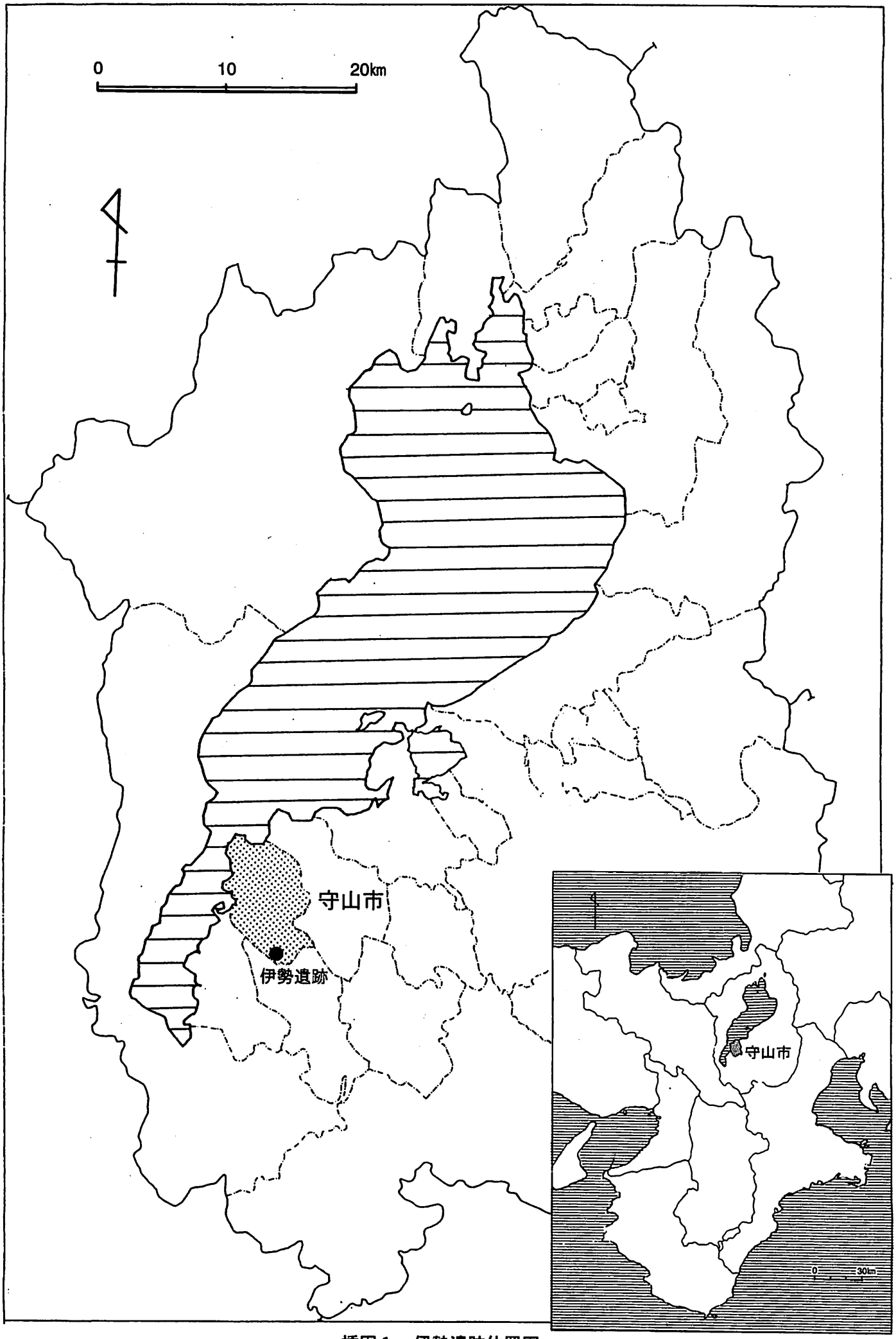
第９章　伊勢遺跡の歴史的位置……44

挿　図　目　次

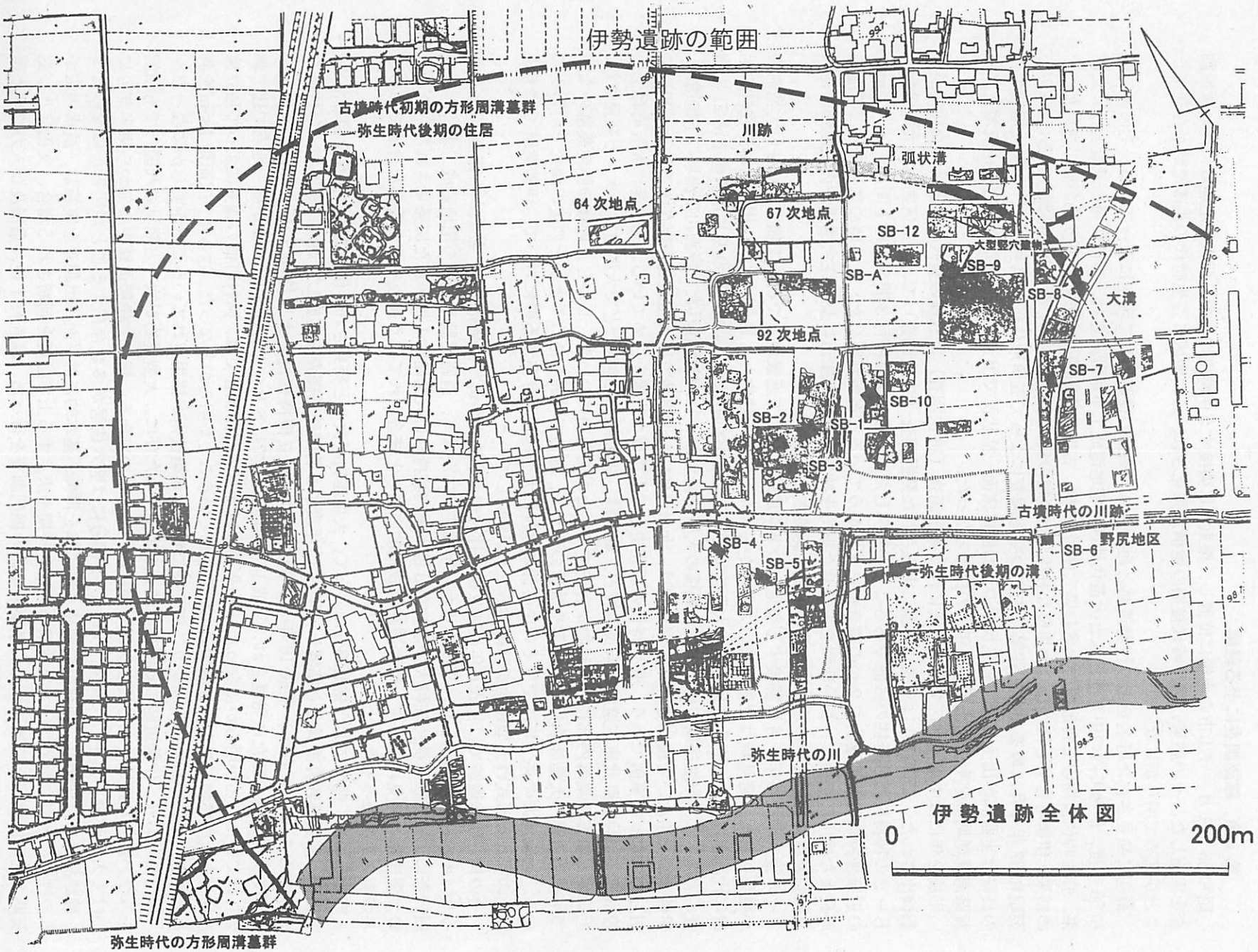
挿図１　伊勢遺跡位置図
挿図２　伊勢遺跡全体図
挿図３　野洲川流域の遺跡群
挿図４　伊勢遺跡周辺の微地形
挿図５　伊勢遺跡周辺の遺跡分布図
挿図６　伊勢遺跡周辺の小字名図
挿図７　方形区画周辺大型建物配置図
挿図８　方形区画内大型建物配置図
挿図９　ＳＢ－１・ＳＢ－11 平面図
挿図 10　ＳＢ－10 平面図
挿図 11　伊勢遺跡 52 次調査全体図・断面図
挿図 12　ＳＢ－４平面図・断面図
挿図 13　ＳＢ－５平面図・断面図
挿図 14　ＳＢ－７・ＳＢ－８・ＳＢ－９平面図
挿図 15　大洲地区遺構検出状況
挿図 16　伊勢遺跡 74 次調査全体図
挿図 17　伊勢遺跡 74 次調査Ｔ－２平面図
挿図 18　伊勢遺跡大型竪穴建物平面図・断面図
挿図 19　第 62 次調査全体図・調査位置図
挿図 20　焼土塊遺構平面図
挿図 21　伊勢遺跡内出土五角形住居出土位置図
挿図 22　伊勢遺跡内出土五角形住居
挿図 23　伊勢遺跡第４次調査平面図
挿図 24　伊勢遺跡第４次調査検出五角形住居出土土器１
挿図 25　伊勢遺跡第４次調査検出五角形住居出土土器２
挿図 26　伊勢遺跡第４次調査検出五角形住居出土土器３
挿図 27　伊勢遺跡東半部遺構図
挿図 28　大洲地区大溝検出状況・断面図
挿図 29　伊勢遺跡 96・98 次調査全体図
挿図 30　伊勢遺跡内部の区画溝
挿図 31　伊勢遺跡・服部遺跡の導水施設
挿図 32　伊勢遺跡方形周溝墓群平面図

図　版　目　次

		上	下
巻頭カラー1	伊勢遺跡ＳＢ-1 全景（南西から）		伊勢遺跡ＳＢ-10 全景（南から）
巻頭カラー2	大型竪穴建物検出状況（南東から）		ＳＢ-12 検出状況（南東から）
巻頭カラー3	伊勢遺跡全体図		
巻頭カラー4	伊勢遺跡航空写真		
図版1	伊勢遺跡 21 次調査	調査地全景（西から）	SB-1 全景（南西から）
		左	右
図版2	伊勢遺跡 21 次調査	SB-1　P-1	SB-1　P-1
		SB-1　P-2	SB-1　P-3
		SB-1　P-4	SB-1　P-5
		SB-1　P-6	SB-1　P-6
図版3	伊勢遺跡 21 次調査	SB-1　P-7	SB-1　P-7
		SB-1　P-8	SB-1　P-9
		SB-1　P-10	SB-1　P-11
		SB-1　P-10	SB-1　P-11
		上	下
図版4	伊勢遺跡 56 次調査	56 次調査区全景（西から）	56 次調査区全景（南西から）
図版5	伊勢遺跡 52・53 次調査	52・53 次調査区全景（東から）	SB-10 検出状況（北から）
		左	右
図版6	伊勢遺跡 28 次調査	独立棟持柱付大型建物（SB-1）	P-1 柱根出土状況
		P-2　柱根出土状況	P-3　柱根出土状況
		P-4　柱根出土状況	P-5　柱根出土状況
		P-6　柱根出土状況	P-7　柱根（棟持柱）出土状況
図版7	伊勢遺跡 28 次調査	P-8　柱根出土状況	P-9　柱根出土状況
		P-10　柱根出土状況	P-11　柱根出土状況
		P-12　柱根出土状況	P-13　柱根出土状況
		P-14　柱根出土状況	P-15　柱根（棟持柱）出土状況
図版8	伊勢遺跡 28 次調査	P-1　柱根	P-2　柱根　P-3　柱根
		P-4　柱根	P-5　柱根　P-6　柱根
		P-7　柱根（棟持柱）	P-8　（柱根）　P-9　柱根
図版9	伊勢遺跡 28 次調査	P-10　柱根　P-11　柱根　P-12　柱根	
		P-13　柱根　P-14　柱根　P-15	
		SB-1　出土柱根法量表	
		上	下
図版10	伊勢遺跡 48 次調査	SB-5　全景（南東から）	SB-5　P-2 検出状況（北から）
図版11	伊勢遺跡 74 次調査	大型竪穴建物検出状況（南西から）	大型竪穴建物検出状況（南西から）
図版12	伊勢遺跡 74 次調査	Ｔ－１調査地全景（西から）	焼壁材出土状況（北から）
図版13	伊勢遺跡 74 次調査	ＳＢ－12 検出状況（東から）	ＳＨ－３検出状況（北西から）
図版14	伊勢遺跡 67 次調査	67 次調査ＳＸ－１調査風景（西から）	ＳＸ－1 全景
図版15	伊勢遺跡大洲地区調査	ＳＢ－８検出状況（北から）	大洲地区大溝（東から）
図版16	伊勢遺跡 96 次調査	遺構検出状況（西から）	区画溝掘削状況（東から）
図版17	伊勢遺跡 2・4 次調査	第２次調査五角形住居（東から）	第４次調査（南東から）
図版18	伊勢遺跡大洲地区出土遺物	破砕鏡	玉類



挿図1　伊勢遺跡位置図


伊勢遺跡の範囲
古墳時代初期の方形周溝墓群
弥生時代後期の住居
川跡
弧状溝
64 次地点
67 次地点
SB-12
大型竪穴建物
SB-9
SB-A
SB-8
大溝
92 次地点
SB-7
SB-10
SB-2
SB-1
SB-3
古墳時代の川跡
SB-4
SB-5
SB-6
野尻地区
弥生時代後期の溝
弥生時代の川
弥生時代の方形周溝墓群
伊勢遺跡全体図
0
200m

挿図２　伊勢遺跡全体図

第１章　確認調査に至る経過と伊勢遺跡の歴史的環境

第１節　確認調査に至る経緯

昭和56年１月、守山市の南端に位置し、栗東市に隣接する伊勢町地先で、個人住宅建設に伴い試掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期の遺構が発見され、この地域に弥生時代の集落遺跡が存在することが初めて明らかになった。

最初に発見された町名をとり伊勢遺跡と命名され、周知の遺跡として現在に至っている。その後、昭和56年度、伊勢町内の中東浦地区と大苗代地区で宅地造成工事が計画され、事前に発掘調査を行った結果、弥生時代後期の五角形住居を含む竪穴住居19棟、古墳時代前期の方形周溝墓８基が検出された。その結果、伊勢町を中心にかなり大規模な弥生時代後期の集落遺跡が存在することが推測されるに至った。翌昭和57年４月に農業用倉庫建築に先立つ発掘調査によって五角形住居が発見され、弥生後期前半代の良好な土器群が出土した。弥生後期の土器群は床面一括状況で出土したことから、野洲川流域及び滋賀県南部地域の弥生後期土器の編年上の指標となった。

平成２年には中東浦地区で倉庫建築に伴う発掘調査（18次調査）で９棟の竪穴住居と長大な柱穴が４個検出された。この柱穴は平成４年度に実施された発掘調査（21次調査）で、方形区画内の大型建物ＳＢ－２の棟持柱及び桁柱の一部であることが判明した。ＳＢ－２は桁行３間×梁行１間（７ｍ×７ｍ）の近接棟持柱付大型建物で２つの調査地にまたがっていることが判明した。この時の調査では、平面形が長大な楕円形を呈し、長い傾斜をもたせた掘方を持ち、深さ1.4ｍに及ぶ柱穴遺構が大型建物の柱穴とは判断されず、大型の珍しい形状の土坑と認識された。

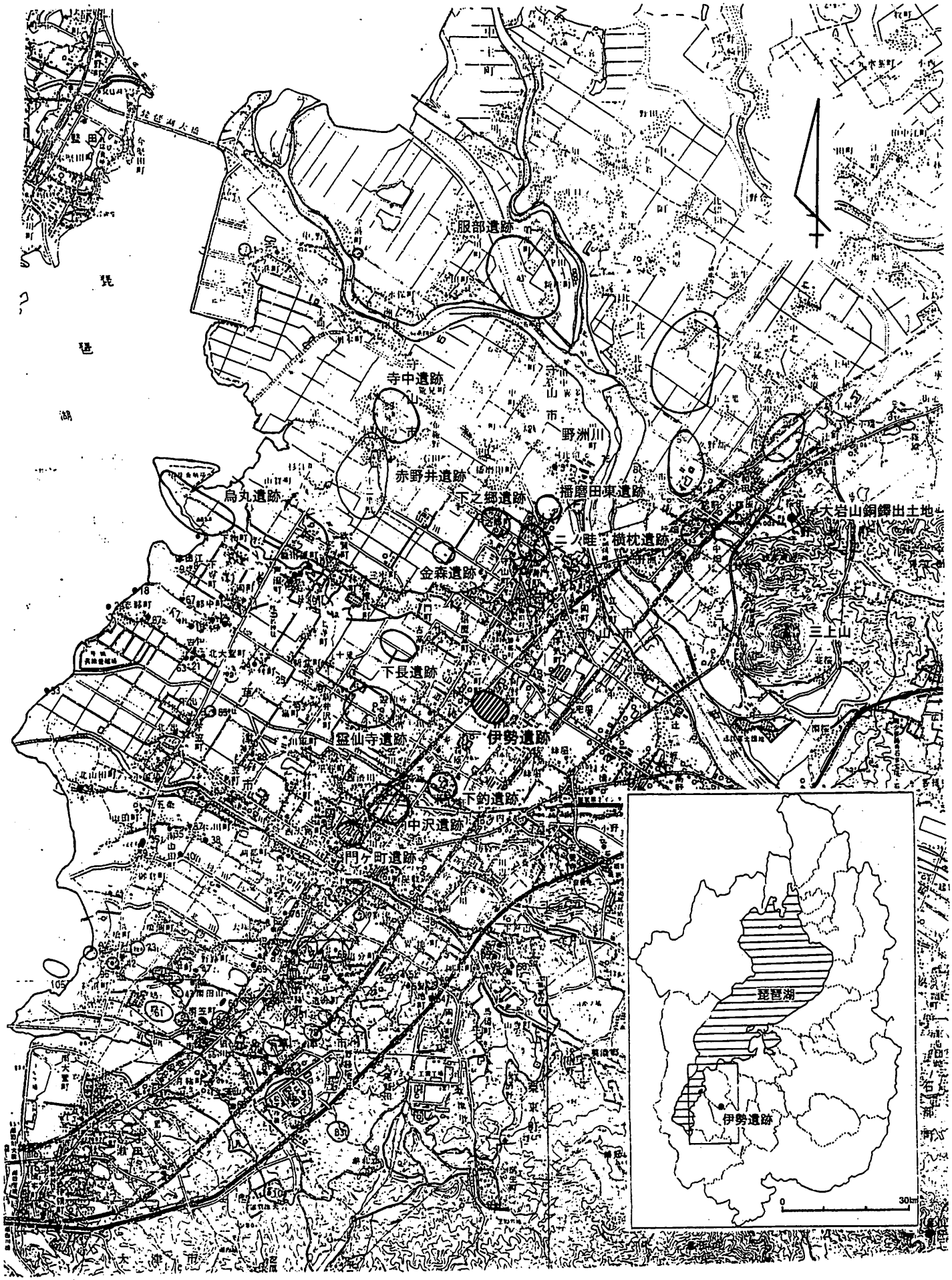
その後、平成４年７月に隣接する栗東市の下鈎遺跡において近畿地方で初めて独立棟持柱付大型建物が発見された。発見時はその規模の大きさから、奈良時代の建物とも見られたが、出土土器や柱材の年輪年代測定によって弥生時代後期の大型建物であることが判明した。平成４年９月には伊勢遺跡21次調査が実施され、弥生後期では全国最大規模の大型建物ＳＢ－１が検出された。野洲川下流域の下鈎遺跡、伊勢遺跡で相次いで検出された大型建物は、九州以外にも近畿地方に大型建物が存在することが初めて明らかになった事例であり、弥生時代の研究史上でも重要な位置を占めている。その後、大阪府池上・曽根遺跡や兵庫県武庫庄遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、京都府大薮遺跡などで大型建物が次々と発見され、近畿地方の弥生集落内部に大型建物が存在することが明らかになった。しかし、近畿の弥生集落のなかでも伊勢遺跡の大型建物はその内容や数量のうえで、極めて特異であることがその後の調査で明らかになる。近畿地方の弥生集落ではその中心部に数棟の大型建物が存在するのに対して、伊勢遺跡では十棟以上の異なる形式の大型建物が存在することが判明していった。

その後、伊勢遺跡では平成６年に独立棟持柱付き大型建物が新たに発見され、柱穴から直径40㎝を測るヒノキの柱根が出土した。平成６年から平成７年にかけて、道路建設や民間の宅地造成工事に伴う発掘調査によって独立棟持柱付大型建物が３棟、屋内棟持柱付大型建物１棟が新たに発見された。これらの大型建物の発見によって、伊勢遺跡は政治的に国へと統合されていく過程を探る重要な遺跡であることが明らかになってきた。

守山市では、開発に伴う発掘調査によって、大型建物が次々と発見される伊勢遺跡の保存を図るため、文化庁、滋賀県教育委員会と協議し、平成10年度より範囲確認調査を実施し、遺跡の範囲および性格を把握することに努めた。平成10年度の調査では、独立棟持柱付き大型建物ＳＢ－５や楼観ＳＢ－10等の大型建物が新たに発見され、平成11年度の調査ではＳＢ－１及びＳＢ－11が同一地点で建て替えられていたことが明らかになった。平成13・14年度の確認調査では、阿村町側の調査によって独立棟持柱付き大型建物が弧を描き等間隔に配置されていることが明らかとなった。さらに、床面積185㎡を測る大型竪穴建物が新たにみつかり、床や壁に特殊な建築技術が採用されていることが明らかになった。

以上のとおり、伊勢遺跡の範囲確認調査を実施するたびに、大型建物が次々と発見され国内でも類例をみない特異な遺跡であることが明らかになってきたのである。特に、伊勢遺跡中心部から東半部分にかけて大型建物が集中して発見され、西半部分には竪穴住居が多数存在することが明らかになった。

確認調査では伊勢町、阿村町の地権者の了解を得て、基本的には平面検出調査を実施し、遺構の広がりや性格の把握に努めた。また遺構の性格や時期を決定する上で必要と判断される場合、文化庁及び滋賀県文化財保護課と協議のうえ、必要最小限の掘削調査を行った。調査終了後、重機及び人力で埋め戻し原状復帰に努めた。なお、掘削調査を行った場合、シートおよび山砂で遺構を埋め戻し、地下遺構が傷まないように地下保存を図った。



挿図３　野洲川流域の遺跡群

第２節　伊勢遺跡の地理的環境

伊勢遺跡が所在する滋賀県は、東西日本の接点として古くから重要な役割を担ってきた地域である。文化的にも東西日本の地域色が流入しており、隣接する他地域との交流が活発であったことが窺われる。滋賀県には湖西地域を抜け、若狭・北陸へ向かう北陸道や湖北地域から北陸へつながる北国街道などがあり、山陰・丹後・北陸など日本海沿岸地域との文化的交流も深い。さらに、湖東平野を北上し中部高地へ抜ける中山道、野洲川を遡上し、伊賀・伊勢へ抜ける東海道などの主要な街道が通っており、東西日本の結節点として地勢的に重要な役割を担ってきた地域といえる。また、奈良・京都に近く木材や鉄の供給地でもあった。東西日本、あるいは日本海沿岸地域と瀬戸内・太平洋沿岸地域間の物資の輸送においても、琵琶湖と瀬田川・淀川は、物流の大動脈として機能していたと考えられている。伊勢遺跡は琵琶湖の南側に広がる湖南地域に所在するが、この地域は東海道と中山道が交差する地点であり、地理的にも京都に近く、交通の要衝として重要な役割を担っていたとみられる。

守山市は、琵琶湖南部に位置し、京都・大阪のベッドタウンとして近年人口が増加している地域である。宅地開発やマンション建設などの開発の他、工業団地造成などの開発が進み、のどかな田園風景が急激に失われ、都市化が進行しているが、現代においても交通や物流の拠点、結節点として重要な役割を果たしている地域である。守山市の全体は、野洲川が形成した沖積平野上にあり、湖岸線の標高85.6ｍから市内最高所の立入町地先の標高103.4ｍとの比高差は17.8ｍしかない。市内各所の微高地も野洲川が形成した自然堤防上にあり、市内全体が野洲川の沖積活動によって形成されたと考えられている。

野洲川が鈴鹿山系から発して、琵琶湖に至るまでの距離は64kmを測り、その流域面積は387㎢に及ぶ。三重県と滋賀県の境に所在する御在所岳に源を発する野洲川は、中流域にあたる野洲市三上山と栗東市上砥山の間を抜け、下流域において半径約５kmを測る扇状地を形成している。扇状地は緩やかに広がり、標高96ｍ前後で氾濫原へ移行し、標高87ｍあたりまで続く。さらに湖岸に向かって広大な三角州が広がっている。

現在の野洲川下流域平野は殆ど起伏がなく、水平に堆積しているように思われるが、細かくみると微妙に凹凸があることがわかる。野洲川の左岸では石部から栗東を経て草津市を流れる葉山川へ伸びる旧河道が存在する。さらに守山市立入町からJR守山駅北側から大門、欲賀町にかけて旧境川沿いには比較的大規模な窪みが見られるが、旧野洲川（旧境川）の支流とみられる。このほか、沖積平野の地下には埋没した小規模な旧河道が網の目状に広がっているとみられ、かつては起伏に富んだ地形であったと考えられる。市内において発掘調査を行うと、幅10～30ｍ程の旧河道が多数みつかるが、原始・古代の集落はそのような小河川沿いに営まれている場合が多い。このような小河川は農業用水の取水源ばかりではなく、船で物資を輸送する運河のような役割を果たしていたと見られる。古墳時代初頭から前期にかけて発達する下長遺跡では、準構造船の部材や櫂が出土しているほか、瀬戸内・山陰・北陸・東海など全国各地の土器が出土している。琵琶湖や平野部に埋没している中・小河川を利用して船による交易を行っていたと考えられる。

伊勢遺跡は、標高98ｍから100ｍを測る扇状地上に形成された弥生後期の集落遺跡である。東西方向に伸びる舌状の微高地上に広がっており、現在の湖岸からは約８km内陸部に入る。古墳時代前期の下長遺跡よりもさらに２km上流部に位置している。現在の地表面の標高を拾うと、伊勢遺跡の南側には東西方向に伸びる谷地形があることがわかる。北西方向に伸びる旧河道が、伊勢遺跡の南側で西方向に流れを変え、栗東市大宝神社南側へと谷地形が伸びるものと推定される。実際、発掘調査を行うと、幅約30ｍを測る旧河道が埋没していることがわかる。この旧河道は最下層で縄文晩期から弥生時代前期の土器が出土し、肩部や下・中層では弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物が出土する。この河川は縄文時代末から弥生時代後期にかけて水流があったと推測されるが、伊勢遺跡が衰退する弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて急速に埋没したものとみられる。古墳時代前期の下長遺跡でも旧河道の埋没時期と集落の衰退期が一致する傾向がみられるが、弥生・古墳時代の集落にとって河川は交易や物流の基幹として極めて重要な位置をしめていたことが推測されるのである。

伊勢遺跡はこの河川の北側に、東西方向に長く伸びる微高地上に所在しており、最高所は阿村町大洲地区から伊勢町日吉神社にかけて尾根状の高まりがみられる。この尾根の南傾斜面を中心に、大型建物12棟を含む大規模な弥生後期の集落が営まれているのである。扇状地上の高燥地に伊勢遺跡が形成されており、野洲川下流域の平野部や琵琶湖を見下ろす位置にあったといえる。

挿図４　伊勢遺跡周辺の微地形

第3節　伊勢遺跡の歴史的環境

琵琶湖周辺の平野部には縄文時代から古墳時代にかけて多数の集落遺跡が分布している。安土町大中湖南遺跡や守山市服部遺跡などでは弥生時代の水田跡が発見されているほか、大規模な集落や墓域が検出されている。琵琶湖沿岸の低湿地を利用し、古くから水田が開かれ、水稲農耕が定着していった様子を窺うことができる。野洲川流域では赤野井湾遺跡で縄文時代前期の集落が発見されているほか、栗東市狐塚遺跡や守山市下長遺跡・塚之越遺跡など扇状地上や扇状地末端で、縄文時代中期後半の集落跡が発見されており、古くから人間が住んでいたことがわかっている。縄文時代晩期になると、守山市内でも遺跡数が増加するとともに、服部遺跡や赤野井遺跡・寺中遺跡・横江遺跡など氾濫原や三角州上の低地部に集落が進出するようになる。そのような遺跡では、弥生時代前期から中期前半にかけての遺構が検出され土器が出土するなど、継続して集落が営まれていると見られる。弥生時代中期後半になると扇状地末端に下之郷遺跡や播磨田東遺跡、二ノ畦・横枕遺跡などの大集落が進出するようになる。そして、弥生時代後期になり扇状地の上に伊勢遺跡が出現し、大規模に発展するのである。さらに、古墳時代前期には標高110mを測る栗東市辻遺跡・岩畑遺跡・高野遺跡などで集落が営まれており、野洲川流域では農耕開始以降、次第に内陸部へと集落が進出する様子を窺うことができる。

伊勢遺跡は縄文時代から室町時代にかけて営まれた集落遺跡である。縄文時代後期の住居跡が伊勢町日吉神社の東側の水田地で発見されている。また、栗東市との境界を流れる幅約30mを測る旧河道からは縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が多数出土しており、古くから周辺部に人が居住していたと考えることができる。弥生時代中期後半にも北東浦地区で竪穴住居が発見されているほか、大洲地区では環状石斧が出土している。しかし、弥生時代後期以前の集落は極めて小規模であったとみられ、特定の地域に限られている。弥生時代後期半葉から末にかけて集落規模は巨大化しており、南北450m・東西700mの範囲内において遺構が営まれている。しかし、弥生時代後期末には集落は急激に衰退しはじめる。ただ、古墳時代初頭から前期末にかけて小規模ながら竪穴住居が営まれ、大苗代地区では方形周溝墓が造営されている。その後、古墳時代中期から奈良時代にかけて明確な集落遺構は検出されていない。

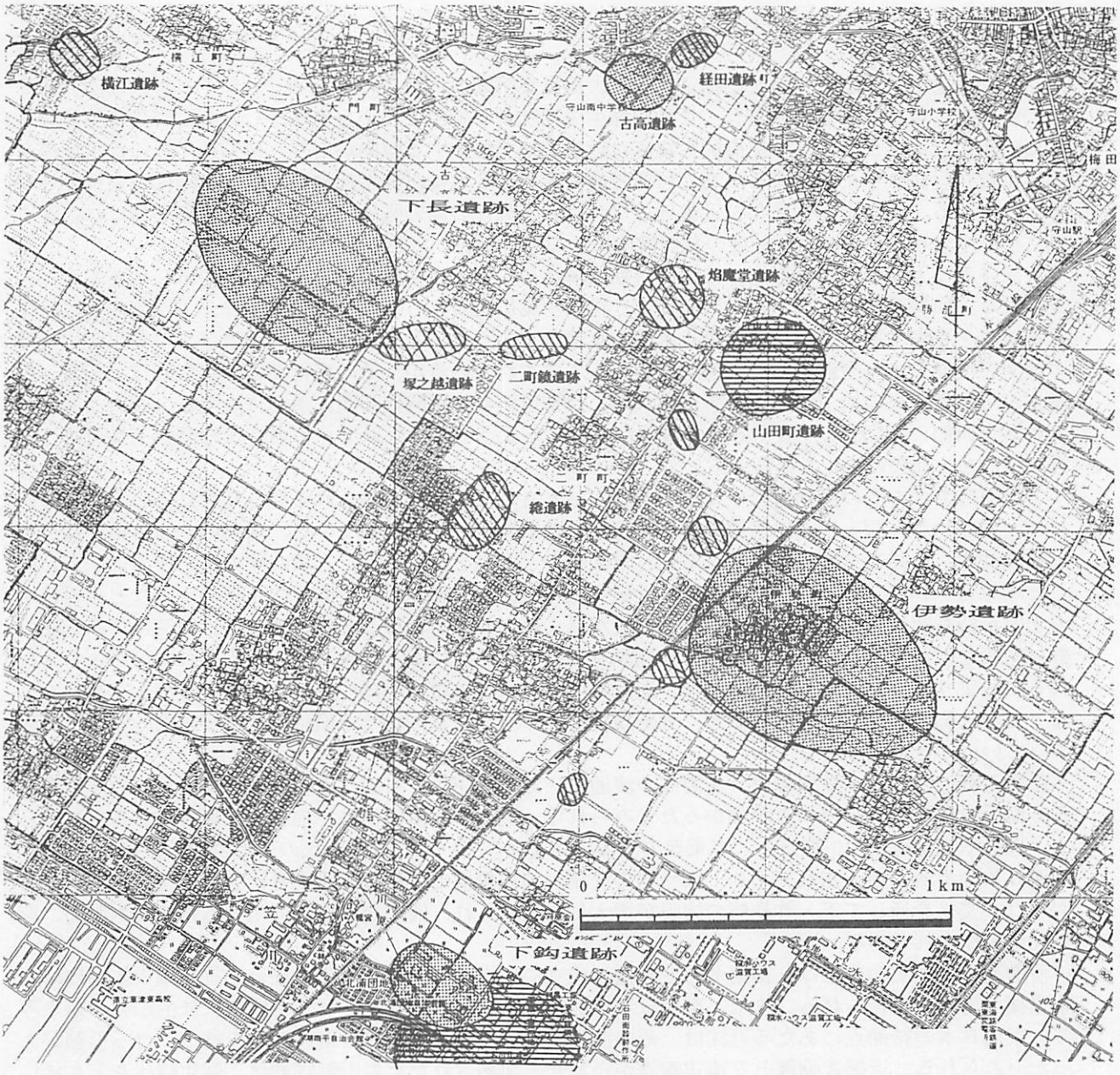
集落が再び営まれるのは、奈良時代末から平安時代とみられ、栗東市大宝神社に隣接する伊勢町中東浦地区や森ヶ下地区では総柱建物跡が見つかっている。さらに墨書土器なども見つかっており、官衙関連施設があった可能性がある。また、伊勢町字南代地区では、平安時代後期から室町時代にかけての掘立柱建物や井戸が多数検出されているほか、建物の周囲には区画溝が掘られていることがわかっている。溝で区画された屋敷地がいくつも連結し集落を形成していたと考えられ、現在の伊勢村につながっていく古代末から中世末期の村落の姿を復元することができる。その後、南代地区から栗東駅にかけて大規模な土取り跡が検出されているが、昭和初期に操業していた江州煉瓦工場の粘土採掘跡とみられる。

いずれにしても、伊勢遺跡が最も巨大化するのは弥生時代後期半ばであり、遺跡の東半部では大型建物が集中して造営され、西半部では五角形住居を含む竪穴住居が多数営まれており、多くの人がそこに居住していたと推測される。そのピークは弥生時代後期中葉から末にかけてであり、実年代では紀元1世紀後葉から2世紀末と推測される。

伊勢遺跡が出現する時期は、後漢書によれば倭国は百余国に分かれていた時代であり、北九州の奴国王が紀元57年に漢帝国より金印を授けられて暫くして後と推測される。そして、伊勢遺跡の衰退期は、魏志倭人伝に記された30余国を代表する邪馬台国の出現という歴史的な転換期であったと推測される。伊勢遺跡が発達する時代は、国へと統合される激動期と考えられ、邪馬台国前夜の国の姿を探る特異な遺跡と考えてよい。伊勢遺跡は、地域的にまとまりをもつ小さな国々が、倭国王を擁立する連合政権を形成するまでの特殊具体的な歴史過程を探る貴重な遺跡と考えることができる。伊勢遺跡で集中的に発見される大型建物は、国の政治や祭祀を執り行う中枢施設とみられるが以下、伊勢遺跡発達の前後でどのような歴史的・社会的変化が地域社会内部で起こっているのか概観する。

湖南地域でも農耕が開始された弥生前期の集落は琵琶湖沿岸や野洲川支流沿いの自然堤防上に集落が営まれ、水田が開かれたとみられる。自然地形を利用し集落が営まれ、次第に農業が定着していったと考えられる。弥生時代前期の集落の具体像は明らかではないが、服部遺跡では約18,700㎡以上の前期小区画水田が検出されている。木製農具からみても完成された農業技術体系として稲作農耕が移入されていたことが推測される。長浜市川崎遺跡では3条の環濠が巡る集落が検出されており、弥生時代前期より、環濠をもつ拠点的集落が滋賀県内でも成立していることがわかる。

弥生中期前半の野洲川流域の集落様相は明らかではないが、弥生前期より継続する守山市寺中遺跡で



挿図５　伊勢遺跡周辺の遺跡分布図

は多数の柱穴が検出されており、掘立柱建物を中心とする集落が営まれていたと推定される。さらに草津市中沢遺跡や宮前遺跡などで中期前半の弥生土器が多数出土しており、野洲川支流沿いに集落が営まれていたと考えてよい。

弥生時代前期から中期前半の集落の具体的な様相は判然としないが、弥生時代中期後半になると集落の動態が明確になってくる。中期後半は凹線文と呼ばれる回転運動による施紋が盛行する時代であるが、この時期には野洲川が形成した扇状地末端から先端にかけて巨大な環濠集落がいくつも形成されている。守山市下之郷遺跡は凹線文受容期の最初の集落遺跡であるが、集落の周りに３重の環濠が巡っている。かつて集落が営まれなかった標高92ｍ前後の内陸部に巨大な環濠集落が幾つも展開するのがこの時期の特徴である。下之郷遺跡に続いて守山市播磨田東遺跡、二ノ畦・横枕遺跡、山田町遺跡、栗東市下鉤遺跡で環濠を持つ、あるいは持つ可能性の高い集落遺跡が出現している。これらの集落遺跡の特徴は弥生時代中期後半代でも中葉から後葉に盛行すること、直径が300ｍ程の巨大集落であること、扇状地末端に平野部を横断するように数キロごとに間隔をおいて分布することなどがあげられる。

長浜市鴨田遺跡では紀元１世紀に鋳造された五珠銭が出土しており、近江内部だけではなく、日本海沿岸地域や瀬戸内地域など遠隔地との結びつきがあったことが想定される。この時期には大阪湾岸、瀬戸内や東海地方の土器が搬入されるほか、鉄器なども広く流通しており、拠点集落間のネットワークを

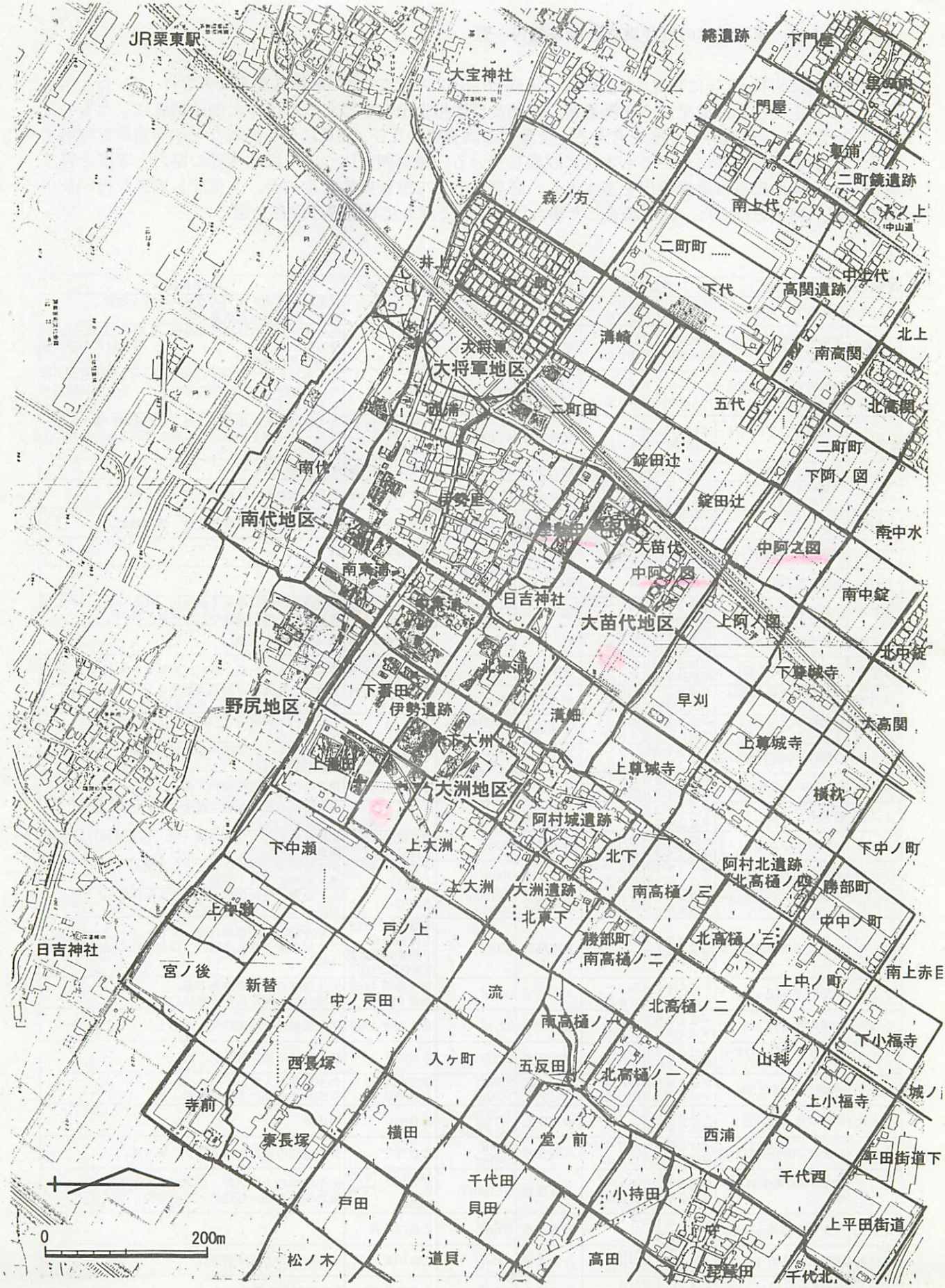
通して人や物が行き交っていたと推定される。拠点集落間の広域にわたるネットワークが列島内の物や人の流通を実現していたとみられ、これが弥生中期社会の特徴と考えられる。しかし、弥生中期末から後期初頭になるとこのような拠点的大集落は近畿各地で解体する傾向があり、後期前半代には小規模な集落が散在居住するようになる。この居住景観の大きな変化は、弥生社会の大きな構造変革を推測させるものである。弥生土器もまた、近畿地方における装飾性の高い弥生中期の土器が後期初頭には急速に無文化しており、その変化は社会の基礎構造に及ぶものであったと考えられる。

近畿各地で大規模な集居形態はほぼ同時期に解体し、弥生後期には小規模な集落が散在居住すると考えられる。伊勢遺跡はそのプロセスを経て、後期中葉に出現する特異な遺跡であり、より大きな政治組織の形成を希求する近畿弥生社会が生み出した遺跡であったと考えられる。伊勢遺跡では弥生時代後期中葉から後期末に大型建物や竪穴住居が集中して営まれているが、その盛行期の実年代観は、紀元1世紀末から2世紀末の約100年間と想定される。伊勢遺跡は古墳時代初頭に急速に衰退し、替わって伊勢遺跡から西側に1.7kmに位置する下長遺跡が盛行するようになる。以下、古墳時代初頭の下長遺跡の内容を検討し、社会の変化を概観する。

下長遺跡では方形の区画溝の中に大型建物が造営された居館跡が見られる他、祭祀に係わる独立棟持柱付大型建物が、同一地点に何度も建て替えられた祭祀域が発見されている。遺跡内からは組帯文を施した儀仗や、直弧文を施した柄頭、石釧、素文鏡などが出土しており、古墳時代の王が住まいしていたことが想定される。さらに、遺跡内には近畿各地や東海、北陸、山陰、瀬戸内、東部四国など東西日本の土器が持ち運ばれており、遠隔地との交流が盛んに行われていることが窺われる。同時に準構造船の部材や櫂などが出土しており、河川や琵琶湖を利用した船舶による交易が盛んに行われていたと考えられる。つまり、伊勢遺跡出現前後では、拠点集落が網目状に緩やかにつながりをもち交流・交易をおこなっていた弥生中期社会の様相から、列島規模で人や物が大量に動く古墳時代社会へ画期的な変化が起こっていることが窺われる。

伊勢遺跡の時代は、鉄器やガラス製品の流通や、五角形住居、布掘り建物の分布などからみて特に、日本海沿岸地域との結びつきが強かったとみられる。近江の土器様相は、地域的な独自性を保ちながらも、近畿や東海地域の中間点として東西の土器様相を保っている。古墳時代の下長遺跡の時代になると、東西日本の土器が搬入されており、人や物の交流が列島規模で多量に流通する社会へと変化している。さらに、交易を通して王・首長層の権限が増大したとみられ、儀仗など祭祀に用いる精巧な木製品、石製品が製作されている。

伊勢遺跡の歴史的位置は、初期ヤマト政権の成立に先立ち、地域の政治的統合や首長権の創出に係わる重要な遺跡と考えられる。また、東西日本が活発に交流し、融合していく古墳時代社会の動きからみて、東西日本の結節点にあたる近江は、その前段階として近畿と東海、東西日本を結びつける役割があったとみられる。近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が合わせて埋納された大岩山銅鐸群は、弥生時代をともに終える姿が窺われ、伊勢遺跡はそのような歴史的役割を担っていたと推測されるのである。巨大な前方後円墳に代表される初期ヤマト政権が突如出現するのではなく、歴史的過程を経て成立するものとみられるが、伊勢遺跡はその前史を物語る遺跡と考えられる。



挿図６　伊勢遺跡周辺の小字名図及び調査地区呼称

第4節　伊勢遺跡の既往調査と調査報告一覧

伊勢遺跡は昭和56年に発見されて以来、平成20年12月末までに108次に及ぶ調査を行っている。本書に収録した主要な調査成果は、伊勢遺跡の範囲及び性格を把握するために行った確認調査によるものである。ただし、伊勢遺跡の性格を考える上で重要な調査成果及び、発見に至る経緯など伊勢遺跡を理解する上で必要な調査成果についても本書に収録している。確認調査については地権者の協力と理解を得て実施した。現地調査は遺構検出を基本とし、必要に応じて滋賀県教育委員会、文化庁と協議を行い最小限度の掘削調査を行った。掘削調査した場合は、山砂で埋め戻し遺構の保存を図った。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
1次	伊勢町字中東浦75	昭和56年1月16日～ 昭和56年1月22日迄	個人住宅	約50㎡	乙貞1号	試掘により弥生後期の遺跡の存在を確認。 柱穴・溝（方形周溝墓か）
2次	伊勢町字中東浦76・77・82-1	昭和56年4月13日～ 昭和56年7月10日迄	宅地造成	約3,000㎡	滋賀文化財だより67号 乙貞4・5号	弥生後期の竪穴住居9棟検出。内1棟は五角形住居。柵の検出。　鎌倉時代の掘立柱建物・井戸等検出。
3次	伊勢町字大苗代309-9・311-1	昭和56年7月10日～ 昭和56年9月30日迄	宅地造成	約3,000㎡	乙貞5号	弥生後期の竪穴住居10棟検出。内1棟は五角形住居。古墳時代初頭から前期にかけての方形周溝墓8基を検出。
4次	伊勢町字二丁田344・343	昭和57年4月12日～ 昭和57年4月26日迄	農業倉庫	約400㎡/580	守文報第12冊 乙貞6.7	弥生後期の五角形住居1棟。平安後期の溝・土壙・柱列・井戸等を検出。五角形住居から弥生後期の土器群が出土。
5次	伊勢町字西浦537	昭和57年5月	個人住宅	約100㎡	守文報第12冊	弥生後期の溝。
6次	伊勢町451-1 二町町30-1	昭和58年9月　2日～ 昭和58年9月30日迄	宅地造成	約2,000㎡	守文報第15冊	奈良時代の掘立柱建物1棟・溝を検出。
7次	伊勢町451-8 二町町30-1	昭和59年5月30日～ 昭和59年6月17日迄	宅地造成	約1,000㎡	守文報第15冊	奈良時代の掘立柱建物1棟・溝を検出。
8次	伊勢町字西浦537・538	昭和59年11月9日～ 昭和59年11月30日迄	個人住宅	70㎡/174㎡	守文報第20冊	溝
9次	阿村町字下番田151-3	昭和59年4月5日	資材置き場	約300㎡ /476㎡		旧河道
10次	伊勢町字二丁田327-3	昭和59年11月10日～ 昭和59年12月1日迄	個人住宅	約700㎡ /1,269㎡	守文報第20冊	弥生後期の竪穴住居1棟検出。奈良・平安時代の掘建柱建物・溝、鎌倉時代の建物・井戸
11次	伊勢町字西浦540	昭和59年12月10日～ 昭和59年12月14日迄	個人住宅	200㎡	守文報第26冊	溝（しがらみ遺構）
12次	伊勢町字伊勢里177-1	昭和63年12月19日～ 昭和63年12月26日迄	農業倉庫	405㎡	守文報第33冊	溝4条、土壙6基、柱穴、中世とみられる。
13次	伊勢町字大苗代303-12	平成元年1月13日～ 平成元年2月8日迄	個人住宅	300㎡	守文報第33冊 乙貞43号	古墳時代初頭の方形周溝墓2基、 溝・柱穴　奈良時代（8世紀前半）
14次	伊勢町字上阿ノ図 19－1　外4筆	平成2年4月20日～ 平成2年6月4日迄	宅地造成	2,000㎡ /12,464㎡	乙貞51号	古墳時代・鎌倉時代の溝、奈良時代の溝2条。 江戸時代の井戸。
15次	伊勢町字伊勢里322-3	平成2年12月13日～ 平成2年12月14日迄	個人住宅	60㎡ /149㎡	守文報第43冊	弥生後期から古墳後期の遺物包含層。 鎌倉時代の柱穴
16次	伊勢町字二丁田347-1	平成2年2月4日～ 平成2年2月23日迄	個人住宅	978㎡	守文報第43冊	鎌倉時代の掘建柱建物・溝・土壙
17次	伊勢町二丁田	平成2年2月～ 平成2年4月	宅地造成	450㎡	乙貞55号	鎌倉時代の溝・掘建柱建物6棟、土壙7基 江戸時代の井戸
18次	伊勢町字中東浦81-1	平成2年6月28日～ 平成2年8月8日迄	倉庫建設	888㎡	守文報第42冊 乙貞51号	弥生後期の竪穴住居9棟・溝・独立棟持柱付建物。 鎌倉時代の掘立柱建物・旧河道
19次	伊勢町字井上125	平成4年1月28日～ 平成4年1月30日迄	個人住宅	330㎡	守文報第44冊 乙貞61号	弥生後期末の竪穴住居・方形周溝墓・溝。 縄文晩期の深鉢・石鏃
20次	伊勢町字大将軍513-1・513-2	平成4年6月8日～ 平成4年6月10日迄	倉庫建設	約100㎡ /948㎡	乙貞63号	弥生後期の竪穴住居1棟（五角形住居か） 旧河道
21次	伊勢町字中東浦80	平成4年6月25日～ 平成4年9月25日迄	倉庫建設	870㎡	現説資料92.9.19 乙貞64・65 伊勢遺跡確認調査報告書2003-3	弥生後期の大型建物3棟（SB－1・2・3）竪穴住居7棟・柱穴多数。　鎌倉時代の掘立柱建物4棟
22次	伊勢町字高開459	平成4年7月29日～ 平成4年9月5日迄	共同住宅	600㎡	守文報第48冊 乙貞64号	弥生後期の方形周溝墓3基。 古墳時代後期から平安時代の溝。
23次	伊勢町字西浦553	平成4年9月1日～ 平成4年9月15日迄	個人住宅	227㎡	守文報第47冊	弥生後期の自然流路（土器出土）。
24次	伊勢町字溝崎　411-1 412-1	平成5年4月23日～ 平成5年6月30日迄	共同住宅	2,279㎡	乙貞69号	鎌倉時代の掘立柱建物・溝。
25次	伊勢町字大苗代308-2	平成5年5月15日～ 平成5年5月29日迄	個人住宅	240㎡ /500㎡	守文報第53冊 乙貞69号	弥生後期の大溝。 古墳時代前期の方形周溝墓1基。
26次	伊勢町字溝崎409	平成5年6月7日～ 平成5年6月12日迄	共同住宅	1,292㎡ /1,308㎡	乙貞69号	耕作跡
27次	伊勢町字伊勢里323-3	平成5年9月21日～ 平成5年10月15日迄	共同住宅	500㎡ /998㎡	乙貞71号	弥生後期の竪穴住居2棟・土壙6基。
28次	伊勢町字南東浦84-1 他	平成5年10月26日～ 平成7年5月31日迄	区画整理	10,000㎡	乙貞72.73.74.75号　守文報第63冊	弥生後期の大型建物・区画溝・方形周溝墓。 鎌倉時代の掘立柱建物・区画溝他
29次	伊勢町字西浦531他	平成5年10月 ～平成6年1月	公共下水	606㎡	乙貞73号表	
30次	伊勢町字高崎460	平成6年5月23日～ 平成6年5月27日迄	共同住宅	400㎡	乙貞79表	弥生中期の方形周溝墓。
31次	伊勢町字伊勢里322	平成7年1月24日～ 平成7年2月17日迄	公共下水	200㎡	乙貞85号表	弥生後期から鎌倉。
32次	伊勢町字伊勢里257	平成7年9月15日	個人住宅	396㎡	守文報第61冊	井戸（近世）

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
33次	伊勢町字大苗代302 304－7	平成7年12月20日～平成8年1月31日迄	共同住宅	500㎡/1,312.9㎡	乙貞84号	縄文時代の土壙・柱穴。
34次	伊勢町字伊勢里525	平成8年3月4日～平成8年3月22日迄	個人住宅	346㎡	乙貞85号 守文報第61冊	鎌倉時代の掘立柱建物・溝・土壙
35次	二町町字北上代7－5・9－2	平成8年7月22日～平成8年8月26日迄	宅地造成	336㎡/2094	乙貞88号	弥生後期の方形周溝墓・竪穴住居。
36次	伊勢町字大将軍516－1	平成8年11月13日～平成8年11月26日迄	個人住宅	120㎡/218㎡	乙貞90号 守文報第61冊1997・3	弥生後期の周壁溝が巡る五角形住居。中世の溝。
37次	伊勢町字西浦520・521	平成8年11月13日～平成8年11月21日迄	共同住宅	117㎡/368㎡	乙貞90号	溝3条・土壙2基・柱穴。
38次	伊勢町字南代104	平成8年11月20日～平成8年12月7日迄	共同住宅	117㎡/316㎡	乙貞90号	溝5条・土壙1基。
39次	伊勢町字伊勢里	平成9年1月31日～平成9年2月14日迄	個人住宅	80㎡/368㎡	乙貞91号 守文報第66冊1998・3	溝3条・土壙2基・柱穴。
40次	伊勢町字南代3街区9	平成9年4月24日～平成9年6月13日迄	共同住宅	323㎡/1,148㎡	乙貞93号	旧河道。
41次	伊勢町字西浦548－2	平成9年5月16日	個人住宅	25㎡	守文報第66冊1998・3	中世の土壙。
42次	伊勢町字西浦548－1	平成9年6月26日	個人住宅	25㎡	守文報第66冊1998・3	古墳時代前期の溝。中世の土壙。
43次	伊勢町字南代14街区4	平成9年8月4日～平成9年8月26日迄	個人住宅	374㎡/745㎡	乙貞94号 守文報第66冊1998・3	掘立柱建物4棟、中世の井戸1基。
44次	伊勢町字南代14街区7	平成9年10月8日～平成9年11月6日迄	共同住宅	220㎡/768	乙貞95号	弥生竪穴住居1棟・土壙2基・柱穴多数。中世の溝。
45次	伊勢町字伊勢里10街区4	平成9年11月22日～平成9年12月24日迄	個人住宅	433㎡/500㎡	乙貞96号 守文報第66冊1998・3	弥生溝1条。中世区画溝・掘立柱建物1棟、井戸1基　柱穴多数
46次	伊勢町字中東浦80	平成10年1月22日～平成10年3月4日迄	確認調査	100㎡	乙貞97号 伊勢遺跡確認調査報告書2003・3	弥生後期の竪穴住居7棟・柱穴多数・土壙。
47次	伊勢町字稗田396	平成10年3月13日～平成10年3月14日迄	宅地造成	60㎡/2,200	乙貞97号	溝1条、古墳時代後期柱穴1個。
48次	伊勢町字南東浦91	平成10年5月21日～平成10年6月19日迄	確認調査	150㎡	乙貞97号 現説資料1998.6.14 伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	独立棟持柱付大型建物1棟ＳＢ－5柱根2出土・柱穴多数。中世の溝1条。
49次	阿村町字上番田143－1	平成10年9月16日～平成10年10月23日	工場建設	1,856㎡	伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	竪穴住居・溝。
50次	伊勢町字南東浦92・93	平成10年10月12日～平成10年11月12日迄	共同住宅	800㎡/1,246㎡	伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	溝・土壙・柱穴。　中世の掘立柱建物群。
51次	伊勢町字中東浦79－1	平成10年11月2日～平成10年11月20日	確認調査	500㎡	伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	弥生後期の旧河道。
52次	阿村町156	平成10年11月20日～平成10年12月25日迄	確認調査	500㎡	乙貞102号 現説資料1998.12 伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	竪穴住居5棟・大型建物ＳＢ－10・溝・柱穴。
53次	阿村町157－1	平成10年12月4日～平成10年12月18日迄	確認調査	500㎡	乙貞102号 伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	竪穴住居2棟・柱穴・溝。
54次	伊勢町字南代589	平成11年2月8日～平成11年2月18日迄	共同住宅	500㎡	乙貞103号 伊勢遺跡確認調査報告書2003.3	竪穴住居1棟・溝・柱穴。
55次	伊勢町字南代254	平成11年5月13日～平成11年5月17日迄	共同住宅	200㎡	乙貞109号表	旧河道。
56次	伊勢町字中東浦78	平成11年5月10日～平成11年7月8日迄	確認調査	800㎡	乙貞105号 現説資料1999.7.3伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	ＳＢ－1とＳＢ－11の柱穴の切り合いを確認。竪穴住居3棟・溝・柱穴多数。
57次	阿村町字上番田143－1	平成11年5月10日～平成11年8月25日迄	工場建設	2,000㎡/3,288.99㎡	乙貞106号 伊勢遺跡第57次調査報告書2001.3	弥生後期竪穴住居1棟。古墳時代前期竪穴住居1棟・溝5条・旧河道。
58次	阿村町155・158－1	平成11年8月27日～平成11年9月14日迄	確認調査	400㎡	乙貞106号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	大型建物ＳＢ－10・竪穴住居の再調査。
59次	阿村町163	平成11年9月16日～平成11年9月30日迄	確認調査	200㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	溝・竪穴住居1棟。
60次	阿村町155・158－1	平成11年9月27日～平成11年12月14日	確認調査	700㎡	乙貞107号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	竪穴住居11棟・溝3条・土壙・柱穴。
61次	阿村町158－1	平成12年1月4日～平成12年1月18日迄	里道改良工事	100㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ2004.3	竪穴住居3棟・溝・柱穴。
62次	伊勢町56	平成12年2月1日～平成12年3月21日迄	確認調査	400㎡	乙貞109号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ2005.3	竪穴住居1棟・焼土塊道構・旧河道。
63次	伊勢町62	平成12年2月21日～平成12年3月21日迄	確認調査	500㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ2005.3	竪穴住居・柱穴・土壙。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
６４次	伊勢町 56・59－1	平成12年６月26日～平成12年７月６日迄	確認調査	400㎡	乙貞113号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ 2004.3	旧河道・土壙。
６５次	伊勢町字南代 646・647	平成12年８月22日～平成12年８月30日迄	共同住宅	250㎡	守埋文平成12年度年報	旧河道・撹乱土壙。
６６次	阿村町 142－1	平成12年９月11日～平成12年９月29日迄	確認調査	400㎡	乙貞113号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ 2004.3	大溝１条・溝３条・土壙・柱穴。
６７次	伊勢町 171－1	平成12年10月30日～平成12年12月９日	確認調査	400㎡	乙貞114号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ 2005.3	竪穴住居１棟・焼土塊再調査。
６８次	伊勢町 284	平成12年11月21日～平成12年12月４日	確認調査	500㎡	乙貞114号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ 2004.3	旧河道・大溝。
６９次	伊勢町 75	平成13年１月15日～平成13年１月31日迄	確認調査	200㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ 2005.3	遺物包含層・溝。
７０次	伊勢町字南代 607	平成13年２月２日～平成13年２月15日迄	個人住宅	150㎡	守文報平成13年度国庫補助	旧河道。
７１次	伊勢町字森ケ下 426・427	平成13年５月23日～平成13年７月19日迄	宅地造成	500㎡/2701.95	乙貞117号 現説資料2001・7.14	古墳時代前期～奈良の掘立柱建物７棟・溝。
７２次	伊勢町 259	平成13年７月２日～平成13年７月６日迄	共同住宅	250㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ 2005.3	旧河道・溝。
７３次	伊勢町 613・　614	平成13年８月20日～平成13年８月29日迄	共同住宅	250㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ2005.3	旧河道・柱穴。
７４次	阿村町 166－1・167	平成13年９月５日～平成13年12月21日迄	確認調査	800㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ 2008.3 乙貞 120 号	大型竪穴住居１棟・棟持柱付大型建物２棟ＳＢ－９・12 竪穴住居２棟、柱穴・土壙多数。
７５次	伊勢町字伊勢里 315－1・316－1	平成14年１月７日～平成14年３月29日迄	宅地造成	700㎡/2,118㎡	乙貞121号 現説資料 2002.3.30 伊勢遺跡75次調査報告書2003.3	五角形住居を含む竪穴住居１７棟・溝・柱穴。
７６次	伊勢町字南東浦 602－1	平成14年２月７日～平成14年２月８日迄	個人住宅	376㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ 2005.3	掘立柱建物・中世の柱穴。
７７次	伊勢町字南代 633	平成14年６月18日～平成14年６月24日迄	事務所建築	723㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ 2006.3	旧河道・溝・撹乱
７８次	伊勢町南代 606	平成14年７月９日～平成14年７月16日	共同住宅	150㎡	乙貞 124 号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ 2006.3	弥生後期の竪穴住居
７９次	阿村町 184・185	平成14年７月29日～平成14年８月３日迄	共同住宅	150 / 446㎡	乙貞 124 号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ2006.3	弥生後期の竪穴住居。
８０次	阿村町字 168・170	平成14年９月18日～平成14年10月31日迄	確認調査	500㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ 2008.3	弥生後期の竪穴住居・区画溝、柱穴等。
８１次	阿村町 166－1	平成14年10月１日～平成15年３月15日迄	確認調査	400㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ 2008.3	弥生後期の大型竪穴建物、独立棟持柱付き建物。
８２次	伊勢町字大将軍 516－2	平成14年11月11日～平成14年11月14日迄	個人住宅	410㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ 2006.3	弥生後期の竪穴住居、近世の溝・柱穴等。
８３次	伊勢町字森ヶ下	平成14年11月18日～平成14年12月６日迄	宅地造成	200/1,336㎡	乙貞１２６号	古墳時代の溝、柱穴等。
８４次	伊勢町字井上 677	平成15年２月12日～平成15年３月７日迄	共同住宅	390㎡	乙貞１２７号 伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ 2006.3	弥生後期の溝。
８５次	伊勢町字南代 648・649	平成15年　２月28日	分譲住宅	885㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ 2006.3	撹乱。
８６次	伊勢町字南代 615・616	平成15年３月12日～平成15年３月14日迄	共同住宅	666㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ 2006.3	旧河道・溝・撹乱。
８７次	伊勢町字南代 624・625	平成15年３月18日～平成15年３月19日迄	共同住宅	836.78㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ 2006.3	旧河道
８８次	伊勢町字南代 624・625	平成15年８月４日～平成15年８月20日迄	共同住宅	200/836.78㎡	乙貞 133 号	旧河道・溝。87 次調査の再調査。
８９次	伊勢町字南代 642・643	平成15年８月25日～平成15年８月29日	分譲住宅	250/805㎡	乙貞 133 号	撹乱坑が全体に広がる。
９０次	伊勢町二町田 324・325	平成15年９月26日～平成15年10月15日	共同住宅	300/835.78㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ 2006.3	中世の溝・柱穴。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	参考文献
９１次	伊勢町字南代 663－2	平成15年11月23日～平成16年２月21日迄	個人住宅	90/231㎡	伊勢遺跡確認査報告書Ⅳ2006.3 乙貞132・133号	旧河道・掘乱坑
９２次	伊勢町字中東浦 62	平成16年２月26日～平成16年３月１日	確認調査	400㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3	竪穴住居・柱穴・土壙・中世の掘立柱建物
９３次	伊勢町字伊勢里 320－3	平成16年２月26日～平成16年３月１日	個人住宅	101.27/465㎡	平成15年度文化財報告書2005.3	方形周溝墓と見られる溝。
９４次	伊勢町字南代 608	平成16年５月26日～平成16年５月31日迄	共同住宅	170/427.2㎡	伊勢遺跡確認査報告書Ⅴ2007.3	掘乱坑
９５次	伊勢町字森ヶ下 423	平成16年８月20日～平成16年９月17日	共同住宅	50/1,199.4㎡	乙貞 139 号	溝
９６次	阿村町字下大洲 168・170	平成16年10月～平成16年11月	宅地造成	600㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3乙貞136	区画溝・竪穴住居
９７次	伊勢町字伊勢里 567	平成17年５月25日～平成17年５月30日	個人住宅	200/461㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3	溝・掘乱
９８次	阿村町字下大洲 168－2	平成17年５月26日～平成17年５月30日迄	分譲住宅	500/628.09㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3乙貞142号	区画溝　竪穴住居
９９次	伊勢町字二町田 327－1	平成17年12月19日～平成18年１月25日	共同住宅	200/598㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3乙貞144号	五角形住居　掘立柱建物　井戸
100 次	伊勢町字二町田 327－1	平成18年５月10日～平成18年６月７日	共同住宅	250/598㎡	乙貞 147号	竪穴住居
101 次	伊勢町字大将軍 508	平成18年６月６～平成18年６月７日	個人住宅	50/289.14㎡	伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ2007.3乙貞136号	区画溝・竪穴住居
102 次	伊勢町字伊勢里 204、205、569	平成18年８月29日	個人住宅	60/64.01㎡	平成18年度文化財報告書2008.3	溝・掘乱
103 次	伊勢町字伊勢里 221、571	平成18年８月30日～平成18年８月31日迄	個人住宅	65/93.06㎡	平成18年度文化財報告書2008.3	区画溝　竪穴住居
104 次	伊勢町字大苗代 313	平成18年10月27日～平成19年１月31日	宅地造成	600/1,047.13㎡	現説資料 2006・12 乙貞150号	五角形住居　掘立柱建物　井戸
105 次	伊勢町字大苗代 313	平成18年11月１日～平成18年11月24日	個人住宅	160/441.1㎡	平成18年度文化財報告書2008.3	竪穴住居
106 次	伊勢町字南代 627	平成19年11月８日～平成19年11月10日	事務所建築	220/617.2㎡	乙貞 157号	溝・土坑
107 次	伊勢町字北東浦 56－2外	平成20年１月15日～平成20年３月21日迄	確認調査	250㎡	乙貞 157号	溝・旧河道・土坑
108 次	伊勢町字北東浦 56－2外	平成20年８月21日～平成20年９月12日迄	確認調査	200㎡		旧河道・溝

伊勢遺跡発掘調査報告書一覧

「伊勢遺跡発掘調査報告書」『守山市文化財調査報告書12冊』守山市教育委員会刊1983・3
「伊勢遺跡発掘調査概報」『守山市文化財調査報告書第15冊』守山市教育委員会刊1984・3
「伊勢遺跡発掘調査」『守山市文化財調査報告書20冊』守山市教育委員会刊1986・2
「伊勢遺跡の調査」『守山市文化財調査報告書26冊』守山市教育委員会刊1987・3
「伊勢遺跡の調査」『守山市文化財調査報告書27冊』守山市教育委員会刊1988・3
「伊勢遺跡発掘調査」『守山市文化財調査報告書33冊』守山市教育委員会刊1989・3
「伊勢遺跡発掘調査報告書」『守山市文化財調査報告書42冊』守山市教育委員会刊1991・3
「伊勢遺跡の調査」『守山市文化財調査報告書43冊』守山市教育委員会刊1991・3
「伊勢遺跡の調査」『守山市文化財調査報告書44冊』守山市教育委員会刊1992・3
「伊勢遺跡の調査」『守山市文化財調査報告書47冊』守山市教育委員会刊1993・3
「伊勢遺跡第22次発掘調査報告」『守山市文化財調査報告書48冊』守山市教育委員会刊1993・3
「伊勢遺跡の調査」『守山市文化財調査報告書53冊』守山市教育委員会刊1994・3
「伊勢遺跡の調査」『守山市文化財調査報告書61冊』守山市教育委員会刊1997・3
「伊勢遺跡第28次発掘調査概要」『守山市文化財調査報告書63冊』守山市教育委員会刊1997・3
「伊勢遺跡39次調査」『守山市文化財調査報告書66冊』守山市教育委員会刊1998・3
「伊勢遺跡の調査」『平成10・11年度国庫補助対象遺跡調査報告書』守山市教育委員会刊2000・3
「伊勢遺跡の調査『平成12・13年度国庫補助対象遺跡調査報告書』守山市教育委員会刊2002・3
「伊勢遺跡（65次調査）『守山市埋蔵文化財発掘調査　平成12年度年報』守山市教育委員会刊2003・3
「伊勢遺跡の調査」『平成15年度国庫補助対象遺跡調査報告書』守山市教育委員会刊2005・3
「伊勢遺跡75次発掘調査報告書『守山市文化財調査報告書』守山市教育委員会刊2003・3
「伊勢遺跡確認調査報告書Ⅰ」『守山市文化財調査報告書』守山市教育委員会刊2003・3
「伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ」『守山市文化財調査報告書』守山市教育委員会刊2004・3
「伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ」『守山市文化財調査報告書』守山市教育委員会刊2005・3
「伊勢遺跡確認調査報告書Ⅳ」『守山市文化財調査報告書』守山市教育委員会刊2006・3
「伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ」『守山市文化財調査報告書』守山市教育委員会刊2007・3
「伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ」『守山市文化財調査報告書』守山市教育委員会刊2008・3

第２章　伊勢遺跡中心部の調査成果

第１節　方形区画（ＳＢ-１、ＳＢ-２、ＳＢ-３、ＳＢ-（４））

平成４年６月28日から同９月25日にかけて、倉庫建築工事に先立ち伊勢遺跡21次発掘調査を実施した。同調査地点は東西方向に楕円形に広がる伊勢遺跡のほぼ中心に位置し、伊勢遺跡内部に大型建物ＳＢ－１が存在することがこの調査によって明らかになった。さらに、その南側に隣接する第18次調査成果をつきあわせて検討した結果、柵によって四角く区画した中に、４棟の掘立柱建物がＬ次状に配置されていたことがわかった。近畿地方で初めて、方形区画の中に大型建物を整然と配列した特殊な施設が存在することが判明した調査であり、学史的にも重要な位置を占めている。

ＳＢ－１　方形区画の中心部に位置する大型建物と推定され、柱穴配置は２間×４間(7.8ｍ×11.3ｍ)で床面積86㎡を測る。梁行の柱間距離は約４ｍであるが、Ｐ－６とＰ－７の間は3.8ｍと若干短くなっている。桁行の柱間距離は2.8ｍを測り、等間隔であった。建物中心部の柱Ｐ－10-１からＰ－11-１に柱穴配置はＳＢ－１の桁柱列と比較して６°のズレがあり、調査時より総柱式の建物か、二棟の建物が重複しているのか議論が分かれた。しかし、平成11年５月にＳＢ－１北側の水田地を含めて再調査（第56次調査）を実施し、二棟の大型建物が重複していたことが判明した。ＳＢ－１に先行して梁行１間×桁行２間（4.4ｍ×6.1ｍ）床面積26.8㎡を測る大型の柱穴掘方をもつ建物ＳＢ－11が存在することが明らかになった（伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ、2004・３所収）。

これらの建物の柱穴は長径２ｍ～2.7ｍ、短径約0.8ｍを測る長楕円形を呈し、残存深度は1.2～1.4ｍを測る大規模なものであった。柱穴掘方は長い斜路をもつもので、柱穴底の規模形状からみて直径50㎝を越える大きくて長い柱が使用されていたことが推測された。柱根は残存せず、地山ブロックが多量に混じっており、抜かれた後、埋めもどされたと考えられる。出土土器より弥生時代後期中葉の遺構と推測される。

ＳＢ－２　ＳＢ－１の西側約８ｍの地点において棟方向を90°変えて、南北方向に建つ棟持柱を有する建物である。梁行１間×桁行５間（７ｍ×8.1ｍ）床面積56.7㎡を測る近接棟持柱付大型建物である。柱穴は直径35㎝～60㎝の円形で深さ30㎝から60㎝を測り、ＳＢ－１の柱穴と比較して華奢である。梁行が長く、柱穴も小型であり、平地式の建物と推定される。北側の棟持柱は梁に接する位置にあり、南側はやや外側に位置している。建物中心部にも棟持柱が存在し、３つの棟持柱は直線上に位置する。ＳＢ－１の南側桁柱延長上に、ＳＢ－２南側梁行が正確に位置しており、同時に存在した可能性が高い。

ＳＢ－３　ＳＢ－２の南側約８ｍの地点に位置する大型建物である。第18・21次調査区にまたがり検出された建物で、梁行１間×桁行３間（７ｍ×７ｍ）床面積49㎡を測る正方形プランの大型建物である。梁に近い位置に棟持柱があり、近接棟持柱付建物とみられる。柱穴はＳＢ－１と同じく、長径1.5～2.5ｍを測る長大なもので、深さ1.3ｍもある。長い斜路を持つ点でもＳＢ－１と共通している。南北方向に棟が伸びるが、ＳＢ－１に先行するＳＢ－11と同じ軸線上にある。

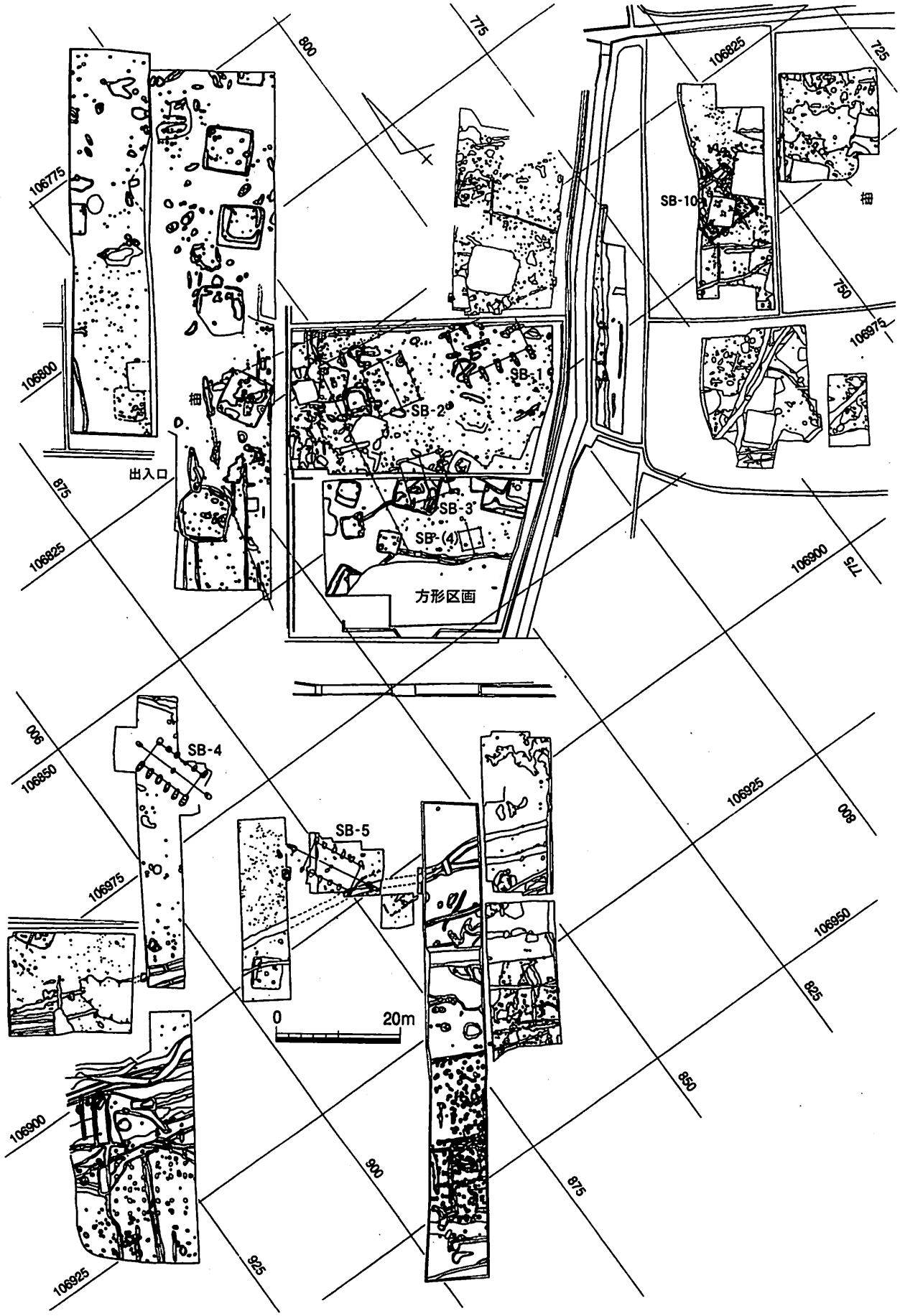
ＳＢ－（４）　ＳＢ－３の南側約７ｍに位置する独立棟持柱付建物である。梁行１間×桁行２間（3.8ｍ×3.4ｍ）床面積約13㎡を測る小型の建物である。柱穴も小さく、残存深度も浅い。ＳＢ－３の東側桁柱列の延長上に棟が伸びている。

柵１　ＳＢ－２・３の西側約５ｍの地点に南北方向に伸びる柱列がある。直径20～30㎝の小さな柱列で、２～３ｍ間隔で掘られている。ＳＢ－２の北側でＬ字状に方向を変えていると見られ、第２調査地点には伸びていない。建物群を区画する柵と考えられる。

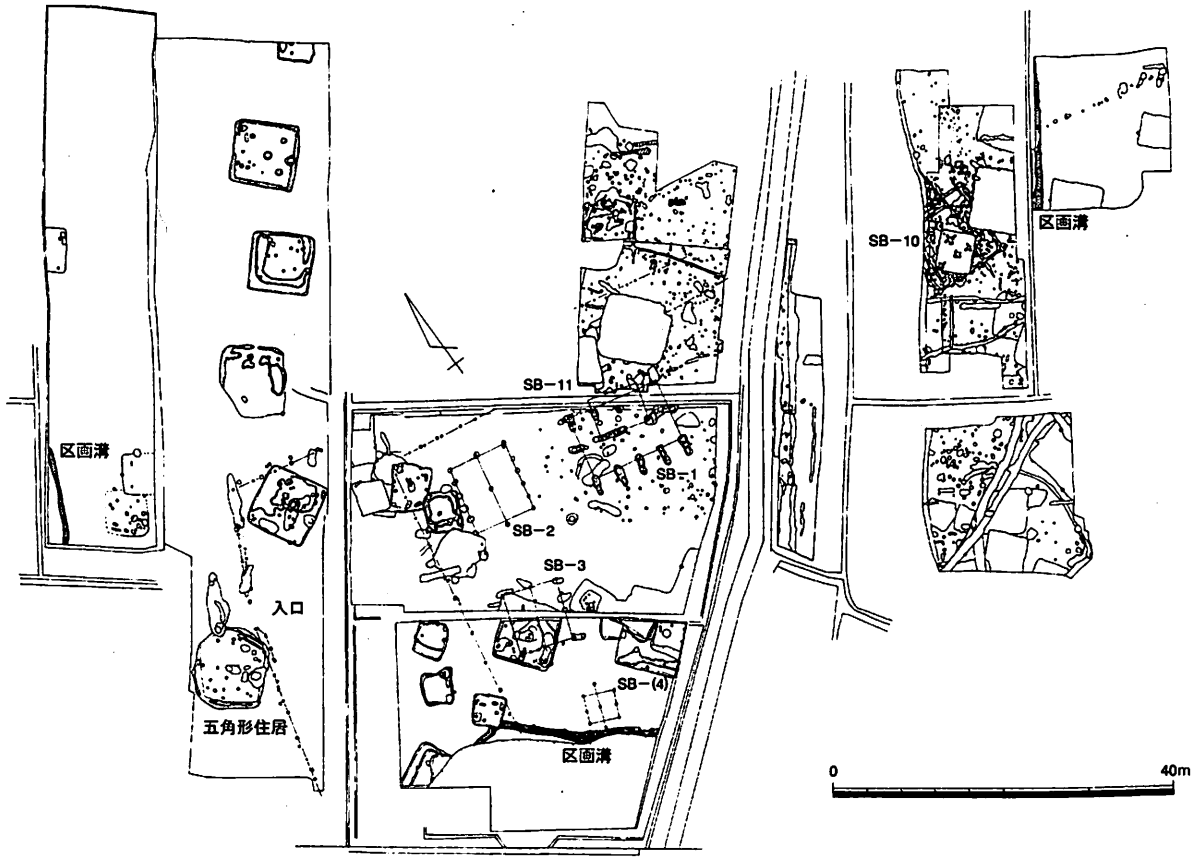
柵２　第２次調査で、ＳＢ－２から約30ｍ西側で南北方向に伸びる柱列を検出している。約40ｍ北方へ伸びたのち、東側へ屈曲するもので柵列と考えられる。ＳＢ－１・２の西側延長上には４ｍほど柵が途切れているほか、２重に柱列が打たれ補強されていることから、出入り口が想定される。

伊勢遺跡のほぼ中心に位置する中東浦地区では二重の柵で区画された特殊な空間があり、内部には大型建物群が整然と配置されていた。ＳＢ－１が主殿とみられ、その西脇には棟持柱を持つ３棟の建物が南北方向に並んでいる。ＳＢ－１とＳＢ－11は６°建物軸に差があり、切り合い関係が確認され、伊勢遺跡中心部の方形区画は二時期にわたり建て替えられたと見られる。

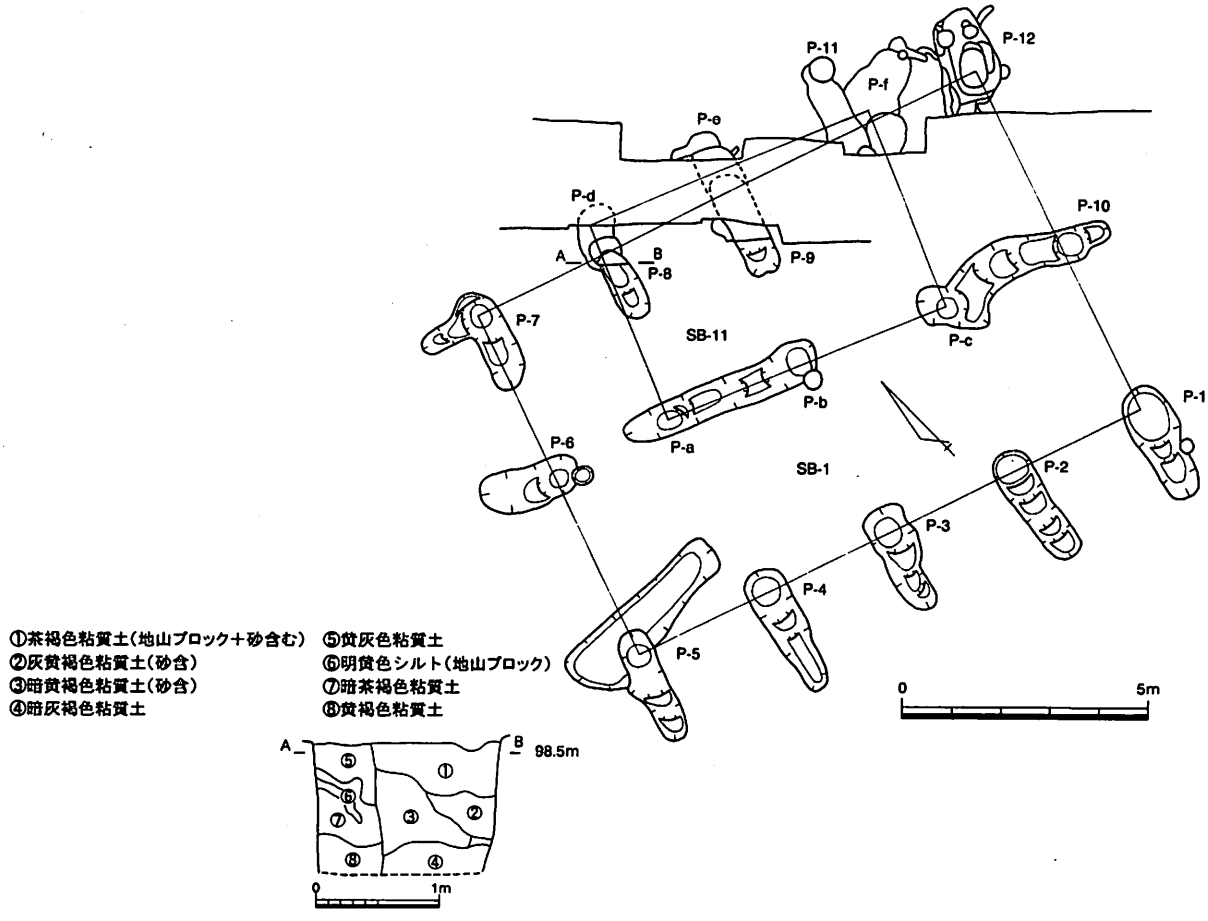
ＳＢ－１の南側及びＳＢ－３・ＳＢ－（４）の東側は、庭のような空白地であったとみられ、前庭を中心に大型建物が配置された方形区画は、政治を執り行う中心施設であったと思われる。



挿図７　方形区画周辺大型建物配置図



挿図８　方形区画内大型建物配置図



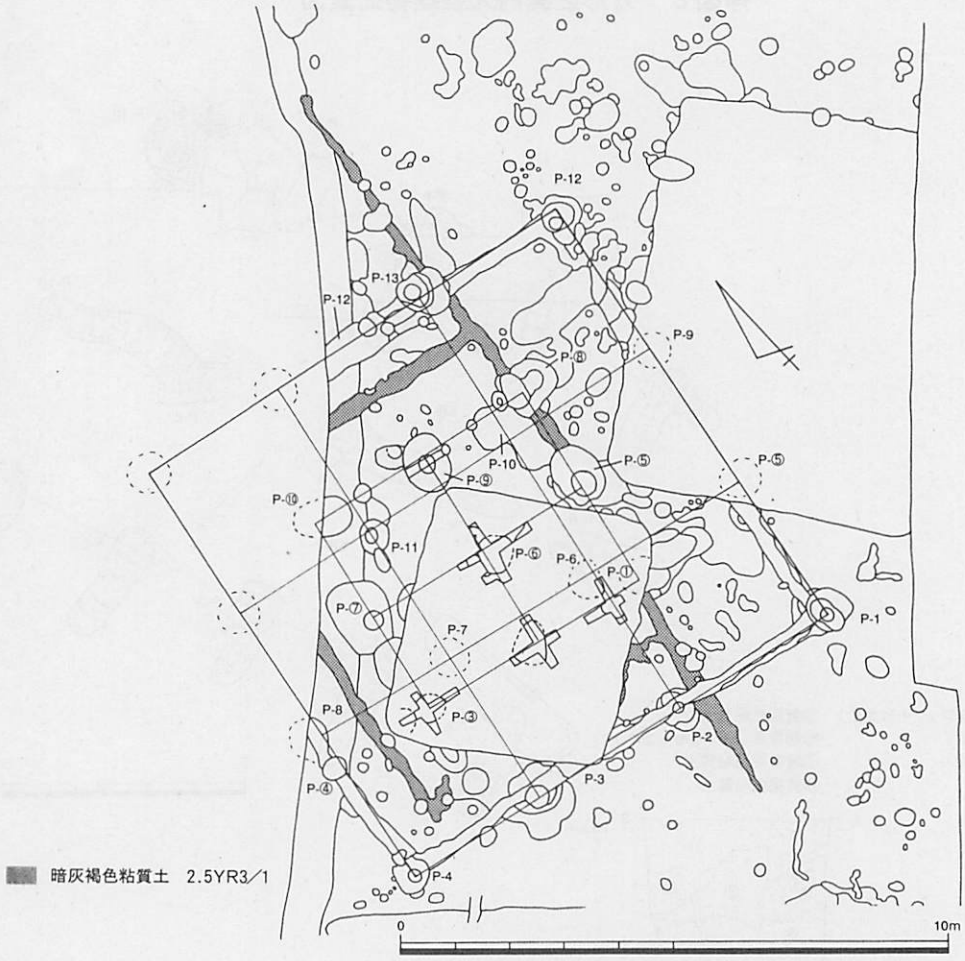
挿図９　ＳＢ－１・ＳＢ－１１平面図

第2節　楼観（ＳＢ-１０）

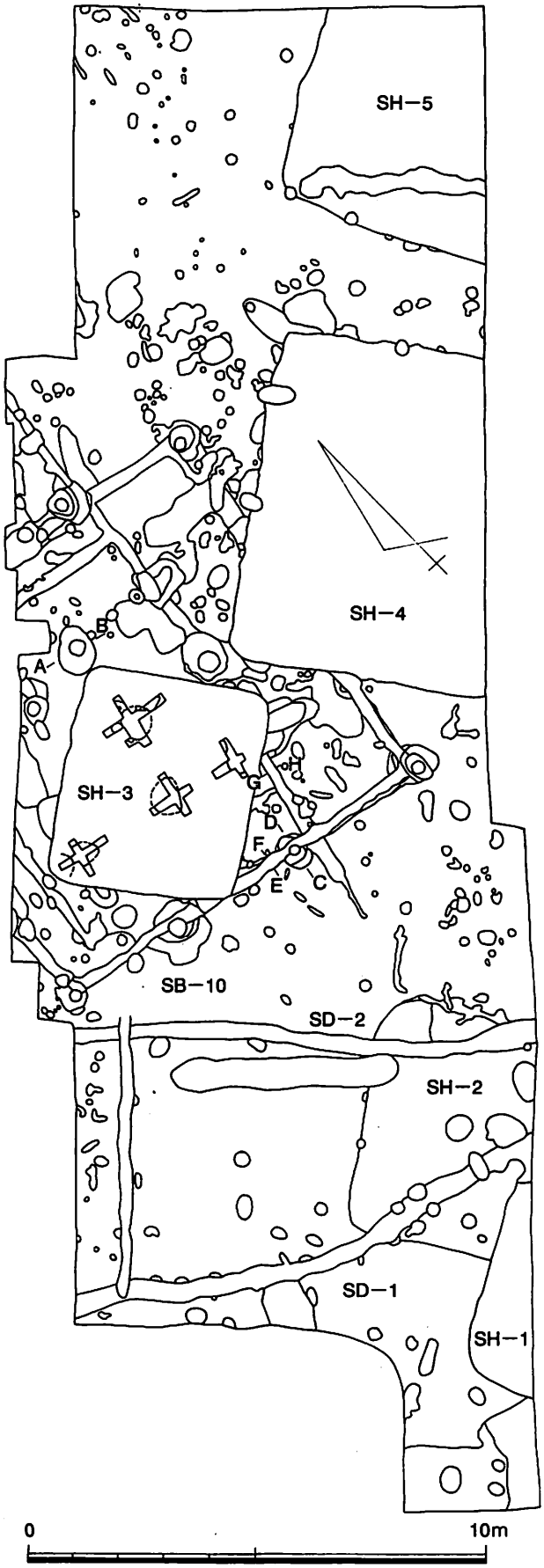
平成10年11月から12月にかけて、方形区画内の主殿とみられるＳＢ－１の東方30ｍの地点で確認調査（52次調査、伊勢遺跡確認調査報告書Ⅰ・2003・3所収）を実施した。その結果、３間×３間（９ｍ×９ｍ）床面積81㎡を測る大型建物を検出した。柱穴距離は約３ｍを測り、総柱式建物と考えられる。ほぼ現在の国家座標軸に並行しており、正しく各辺が東西南北を向いて建てられている。柱穴は円形及び楕円形で直径80㎝から120㎝を測る。この建物の特徴は建物の外側の柱穴間に布掘り溝を持つ点である。この溝は幅25㎝、深さ20㎝を測る小溝で、平面・断面観察の結果、溝の外側に杭状に板を打ち込んだ痕跡があり、板塀状の施設を柱間に施していたと考えられる。板塀が想定される溝の外側のラインは柱根痕の中心をつなぐ軸線に一致しており、目隠し塀のような施設があったとみられる。佐賀県吉野ヶ里遺跡北内郭でも３間×３間で、平面形が正方形を呈する建物が発見されているが、楼閣のような施設であったと考えられる。方形区画内の大型建物ＳＢ－１とＳＢ－２の東側延長上に配置されており、方形区画とともに伊勢遺跡の中心部を構成する建物であったとみられる。

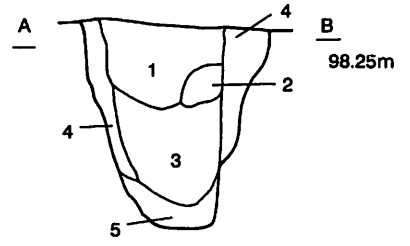
ＳＢ－10の下層にも井桁状の溝を伴う建物が存在する。ＳＢ－10に先行する建物とみられ、２間×２間（4.5ｍ×4.0ｍ）床面積18㎡を測る総柱式の建物ＳＢ－13と考えられる。井桁状を呈するＳＤ－１は南北方向に伸び南北端で小さく細い形状となり、南端部は途切れ北端部は旧河道に切られている。ＳＢ－13の南北辺に並行して２本の溝が直角に伸び、西辺部にも溝が掘られていることから、建物の周囲に長方形の浅い溝が巡っていたと考えられる。柱穴と溝が重複しない点で、ＳＢ－10の布掘り溝とは異なった性格の溝と考えることができる。

２間×２間のＳＢ－13と３間×３間のＳＢ－10は規模の点で異なるが、方位を同じくする総柱式建物であり、方形区画内の建物群とは異なる機能をもつ建物と見られる。方形区画内のＳＢ－１とＳＢ－11の重複にみられた二時期の造営に対応し、総柱式建物が建て替えられたと考えられる。伊勢遺跡の中心部を構成する方形区画及び楼閣状の建物が、二時期にわたり同一地点で建て替えられていることから一定期間、伊勢遺跡の中枢施設が機能・維持していたことがわかる。伊勢遺跡の中心部を構成する重要な機能をもつ建物と考えられる。

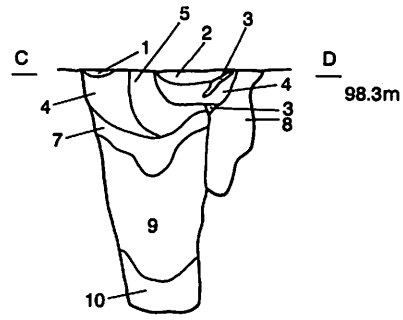


挿図10　ＳＢ－１０平面図

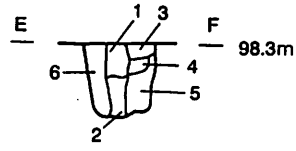




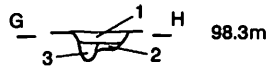
1. 灰褐色粘質土　2.5YR3/1
2. 黄褐色粘質土（地山ブロック含）　7.5YR3/2
3. 暗黒灰色粘質土　7.5YR2/1　10YR4/3
4. 黒褐色粘質土　7.5YR3/1
5. 灰褐色砂含粘質土　10YR2/2



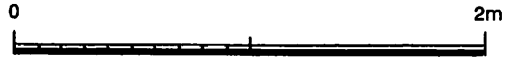
1. 地山ブロック　2.5YR3/1
2. 赤灰色粘質土（焼土粒子）　2.5YR4/1
3. 炭
4. 暗赤灰色粘質土　2.5YR3/1
5. 黒灰色粘質土　5YR3/1
6. 黄混茶黒色粘質土　2.5YR4/1
7. 黒褐色粘質土(地山ブロック＋砂含)　7.5YR2/2
8. 赤褐色粘質土（焼土粒子）　7.5YR3/1
9. 暗灰黒色粘質土　7.5YR2/1
10. 黄混黒褐色粘質土　10YR2/2



1. 黒混黄色粘質土（地山ブロック含）　7.5YR2/1
2. 暗黒色粘質土
3. 黄褐色粘質土（地山ブロック）　2.5YR5/4
4. 黒褐色粘質土　2.5YR1.7/12
5. 黒灰色粘質土　10YR2/2
6. 暗黒褐色粘質土　5YR1.7/1



1. 灰褐色粘質土　10YR2/1
2. 暗灰褐色粘質土　7.5YR3/1
3. 黒褐色粘質土　2.5YR2/1



挿図 11　伊勢遺跡 52次調査全体図・断面図

第３章　南代地区の大型建物

伊勢町南代地区では二棟の大型建物が検出されている。方形区画より約70ｍ西側にあたり、これより西側には弥生時代後期の遺構が極端に希薄になる。二棟の大型建物は独立棟持柱付建物で、ほぼ同形式・同規模であり、南北方向に棟が伸びており、並び立つように配置されている。

第１節　独立棟持柱付建物（ＳＢ-４）

平成６年、土地区画整理事業に先立つ発掘調査（第28次調査）によって、発見された大型建物である。梁行１間×桁行５間（4.6ｍ×9.1ｍ）床面積42㎡を測る。建物中心部に心柱を持ち、梁行より2.5ｍ外側に独立棟持柱が配置されている。柱穴は長径0.8ｍ～1.8ｍ、短径約0.7～0.9ｍを測る楕円形から長方形の平面形状で、建物内側に向かって斜路をもつ掘方を呈する。建物の外側から内側に向かって長く太い柱を落とし込み、立ち上げられたと考えられる。すべての柱穴にヒノキの柱根が残存しており、断面観察の結果、直径30～40cmを測る柱材が使用されていたと推定される。しかし、心柱だけは直径20cmと小型で、柱穴掘方も浅いものであった。建物西側の桁柱列は淡緑灰色粘土を貼った上に柱根を置き、その周りに直径５cmほどの礫を入れて柱をかためている。建物東側桁柱列は柱根の下に礫を敷き詰めており、柱根の設置方法が異なっていた。Ｐ－５上層からは炭化米と炭化木片が出土している。柱穴から出土した土器から弥生時代後期後半の建物と推定される。

守山市文化財調査報告書第63冊―伊勢遺跡第28次発掘調査報告書― 1997年３月　守山市教育委員会
伊勢遺跡第28次発掘調査概要報告書所収　1998年３月　守山市教育委員会

第２節　独立棟持柱付建物（ＳＢ-５）

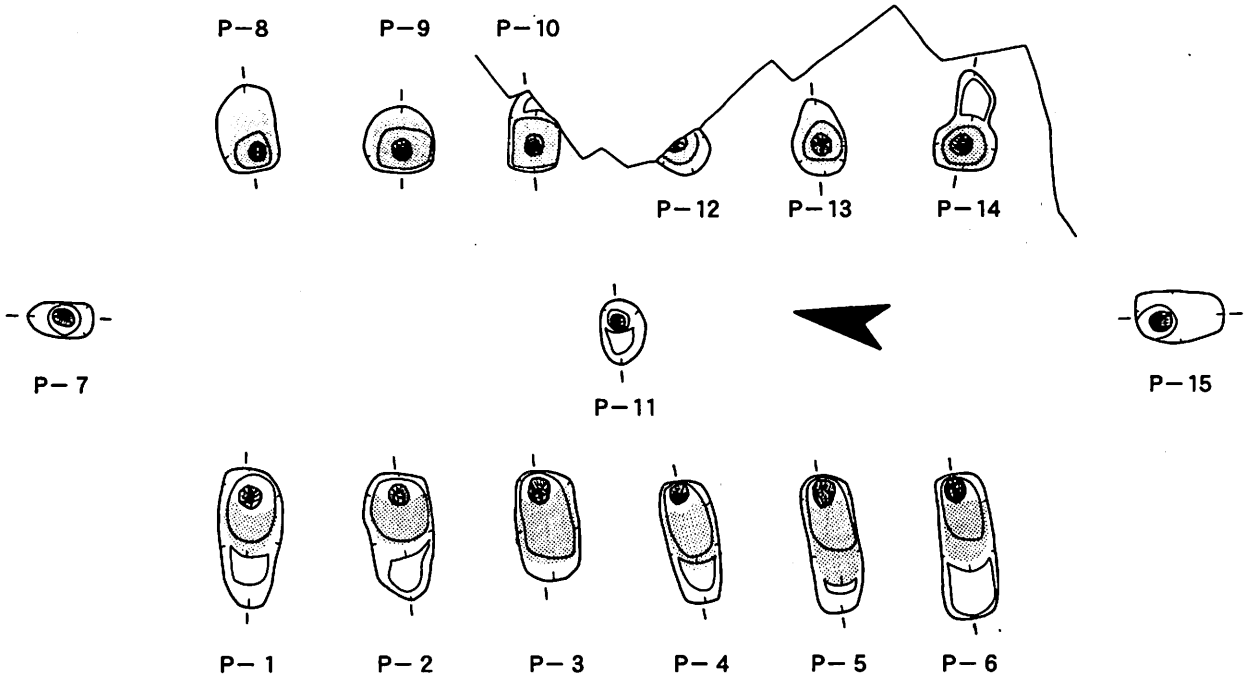
ＳＢ－４から約18ｍ南側の地点で平成10年５月から６月にかけて確認調査(第48次調査)を実施した。その結果、独立棟持柱付大型建物が新たに１棟検出された。ＳＢ－４の南側の棟持柱とＳＢ－５の北側の棟持柱は17.8ｍ離れた位置にある。梁行１間×桁行５間（4.6ｍ×8.6ｍ）床面積39.56㎡を測る大型建物である。柱穴は長楕円及び長方形を呈し、長径1.2ｍ、短径0.6ｍを測る。柱穴は建物内側に向かって斜路を持ち、外側から落とし込み立てあげられたと見られる。平面観察の結果、柱根はすべて残存しているとみられ、独立棟持柱については掘削を行い取り上げた。Ｐ－１は長径2.1ｍ、短径0.9ｍの長方形状の柱穴で、深さ1.3ｍを測る。建物に向かって斜路を持って掘削されており、梁側に柱を落とし込み、立てあげられたと推測される。棟持柱は地山に刺さるように建物内側に約８°傾いた状態で据えられていた。西側の桁柱のＰ－２は擁壁工事で基底部しか残存していなかったが柱根の下部に5cmほどの礫が敷き詰められていたと見られる。Ｐ－３については中世の溝ＳＤ－１に壊されていたが、柱根基底部に礫が敷かれていた。ＳＢ－４の東桁柱の工法に類似するものであった。
心柱はやはり小型で桁柱と比較して二周り程小さいものである。桁柱の柱間距離は1.7ｍで、ＳＢ－４と比較して約10cm短い。棟持柱は梁より外側2.5ｍの位置に据えられており共通していた。棟持柱は２つともヒノキの柱材であった。柱穴内より出土した土器から、弥生時代後期後葉の大型建物と推定される。

伊勢遺跡確認調査報告書Ⅰ所収　2003年３月刊　守山市教育委員会

ＳＢ－４とＳＢ－５は約18ｍ離れて縦位に並ぶように配置されていたことが判明した。ＳＢ－５の棟方向と比較するとＳＢ－４の棟方向は東側に約８°振っており、直列するものではなかった。しかし、この二棟の大型建物は規模・形式を同じくするほか、柱根がすべて残存する点や柱根の据え付け方法など共通点が多く、さらに出土土器からほぼ同時代に建築されたと考えられる。二つの独立棟持柱付大型建物は同時に存在した可能性が高い。大洲地区でも縦方向に並ぶ大型建物の棟方向が約８°屈曲して配置されているが、方形区画や楼観に向かって内側に僅かに屈曲させ配置している。また、棟持柱が内側に６°～８°傾斜して据えられている点でも共通している。礫で柱根を固定する方法も共通しており、建築に携わった集団が同じであったとみることもできる。

なお、ＳＢ－５の柱根には筏を組むため溝が彫られた痕跡が観察された。これはＳＢ－４には見られなかったものである。川を利用して大量の柱材を運搬していたと想定されるが、柱材の供給地や運搬方法に違いがあった可能性もある。

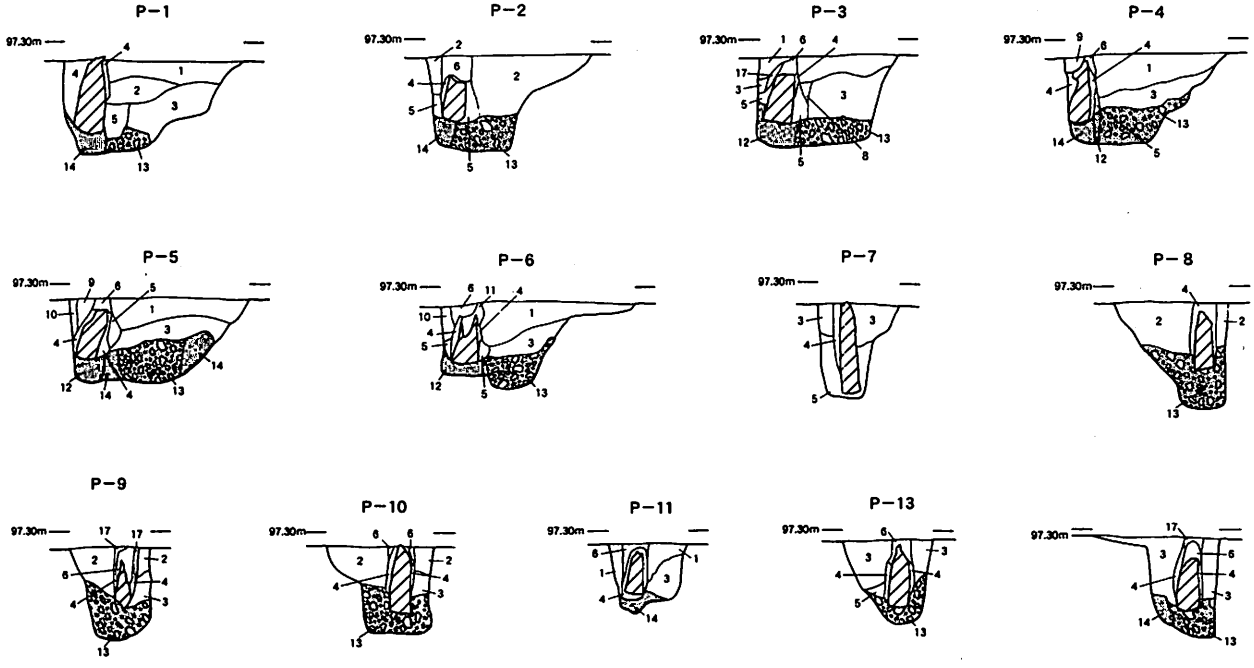
南代地区で発見された二棟の大型建物は、出土土器からみて弥生時代後期後葉の年代が想定され、伊勢遺跡の大型建物の中では、最も新しい段階の建築物であったと推測される。



※網目は礫の範囲を示す

0　4m

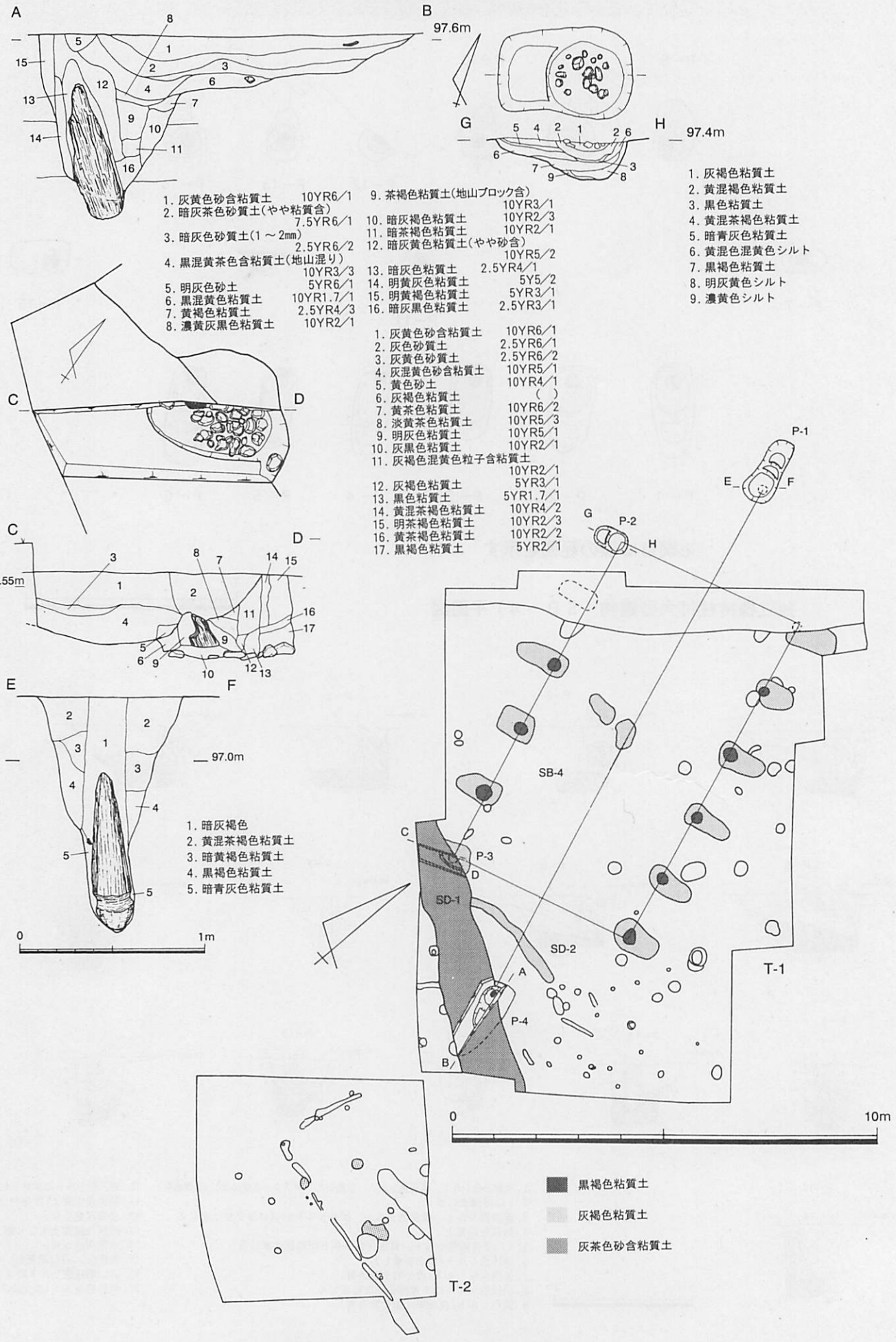
独立棟持柱付大型建物（ＳＢ－４）平面図



1. 淡黄灰色シルト、黒灰色シルト、灰色シルトがブロック状にまじる(礫含有)
2. 1に砂礫まじる
3. 黄白色シルト、黒灰色シルト、灰色シルトがブロック状にまじる
4. 暗灰色粘質土
5. 4に淡青灰色シルト、黄白灰色シルトが粒状にまじる
6. 淡灰色シルト(炭化物多し)
7. 淡緑灰色シルト(炭化物少量含有)
8. 明灰色シルトに淡黄橙色粘土粒まじる
9. 灰色シルト(炭化米、炭化物含有)
10. 暗灰色シルトに淡黄色粘土粒まじる
11. 明灰色粘質土(炭化物含有)
12. 淡青灰色シルト
13. 暗灰色粘質土まじり礫土
14. 淡緑灰色シルト
15. 黒灰色シルトに明灰色シルト粒まじる
16. 3に明灰色シルト粒まじる
17. 明灰色シルト(炭化物多し)

0　2m

挿図 12　ＳＢ－４平面図・断面図



挿図13　SB－5平面図・断面図

第４章　大洲地区の大型建物

伊勢遺跡大洲地区では四棟の大型建物が発見されている。これらはすべて独立棟持柱付大型建物で、建物形式や規格をほぼ同じくするものである。ただ、柱間距離や露台を付設するなど若干の個性がみられる。これらの大型建物は、伊勢遺跡中心部に位置する方形区画や楼観を中心に円弧を描くように配置されている点に特徴をもつ。

第１節　独立棟持柱付建物（ＳＢ－７）

ＳＢ－７は平成５年６月から９月にかけて道路新設工事に先立つ発掘調査によって発見された大型建物である。二つのトレンチにまたがって検出されたもので、中心部に農業用水路が存在したため全体は不明である。しかし、２間以上の桁柱が並行して伸びているほか、中心部に棟持柱および心柱が位置しており、さらに西側の桁柱の南端の柱が隣のトレンチで確認されていることから１間×５間の独立棟持柱付大型建物をそこに復元することができる。梁行５ｍ、桁行 8.7 ｍ、床面積 43.5㎡を測る大型建物で、方形区画内の大型建物群とほぼ並行する建物軸にある。棟持柱は梁から 2.4 ｍ外側に離れた位置に据えられている。

東西列の桁柱はともに西から東に向かって斜路を持っており、東列の桁柱を建てあげたのち、西側の桁柱を建てあげたと推測される。伊勢遺跡で検出されている独立棟持柱付大型建物は建物中心部に向かって桁柱及び棟持柱が建て上げられており、やや異なっている。一方向から柱を建てあげている点では建物形式は異なるが、方形区画内の主殿ＳＢ－１と共通するものである。柱穴内からは中空部の広い器台が出土しており（伊勢遺跡確認調査報告書Ⅰ、2003・3　守山市教育委員会）、方形区画とともに伊勢遺跡出現期にあたる弥生時代後期中葉でも古い段階に造営された大型建物と考えられる。

第２節　独立棟持柱付建物（ＳＢ－８）

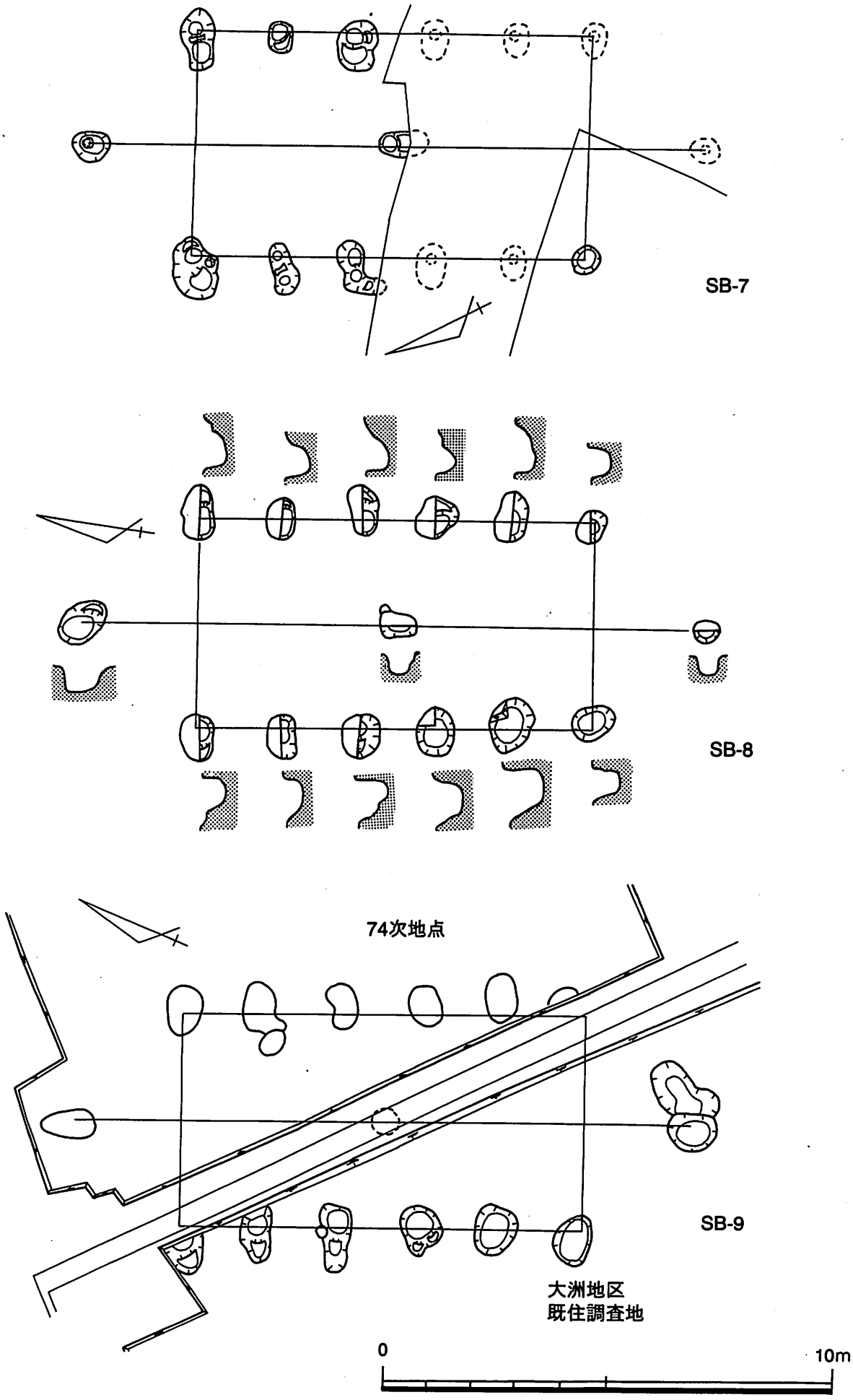
宅地造成工事に先立ち平成６年 10 月から平成７年８月にかけて実施した発掘調査で発見された大型建物である。この調査地点は伊勢遺跡でも最高所にあたり、最も遺構密度の高い地域である。約 1,800 ㎡の調査地で約3000個の柱穴が検出されたほか、２棟の大型建物（ＳＢ-８・ＳＢ-９）、竪穴住居 15 棟が重複して発見された。切り合い関係や出土土器から密集する柱穴群が先行し、その後大型建物が造営され、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて竪穴住居が営まれたものと見られる。

ＳＢ－８は１間×５間（梁行 4.6 ｍ×桁行 8.8 ｍ）床面積 40.5㎡を測る独立棟持柱付大型建物である。棟持柱は梁から 2.5 ｍ外側に離れた位置にある。桁柱は伴に建物中心部に向かって斜路をもたせており、ＳＢ－４・５と共通するものである。心柱は小型で、桁柱や棟持柱と比較して小さなものであったと考えられる。柱根は残存しておらず、断面観察からみて抜かれたとみられる。柱穴からは殆ど遺物が出土していないが、細片及び切り合い関係からみて弥生時代後期中葉の建物と推測される。

第３節　独立棟持柱付建物（ＳＢ-９）

ＳＢ－８と伴に宅地造成工事に伴う発掘調査によって平成７年に発見された大型建物である。ただし、その調査では西側の桁柱列と南側の棟持柱が検出されるにとどまった。その後、平成 13 年に実施した確認調査によって東側の桁柱列と北側の棟持柱が検出され、その全体像が明らかになったものである。（伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ　2008・3　守山市教育委員会）二つの調査成果から１間×５間（梁行 4.8 ｍ×桁行 8.9 ｍ）床面積 42.7㎡の独立棟持柱付大型建物を復元することができた。棟持柱は梁から 2.3 ｍ外側に配置されている。心柱は二つの調査区の間にあり不明であった。桁柱および棟持柱は建物中心に向かって斜路をもって掘られており、ＳＢ－４・５・８と共通している。柱根は残存せず、断面観察の結果から抜かれたのち埋め戻されたと考えられる。柱穴内からは受口状口縁甕の口縁部及び下腹部が出土しており、弥生時代後期中葉の年代を与えることができる。（伊勢遺跡確認調査報告書Ⅰ　2003・3　守山市教育委員会）

ＳＢ－８とＳＢ－９は縦方向に並んで検出されたもので、棟持柱間の距離は 18.4 ｍを測る。棟方向は概ね南北方向に伸びるが、方形区画や楼観のある中心部にむかって約８°西側に振っており、円弧状に配置されている。独立棟持柱付大型建物を縦方向にやや屈曲させて連立する配置は、ＳＢ－４とＳＢ－５にも見られ、伊勢遺跡中心部にむかって円弧を描くよう意識的に配置されていた可能性がある。



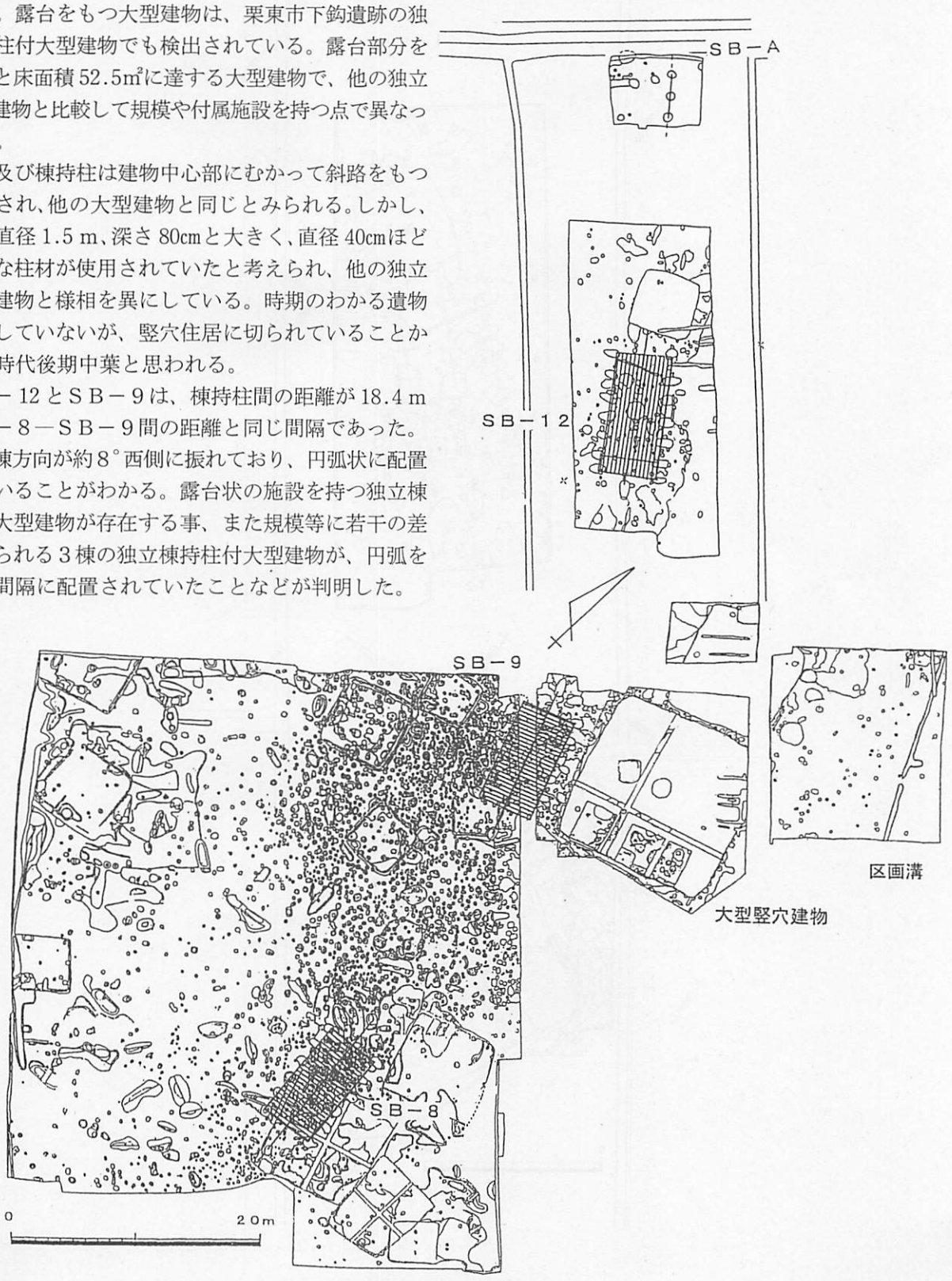
挿図14　ＳＢ－７・ＳＢ－８・ＳＢ－９平面図

第4節　独立棟持柱付建物（ＳＢ-12）

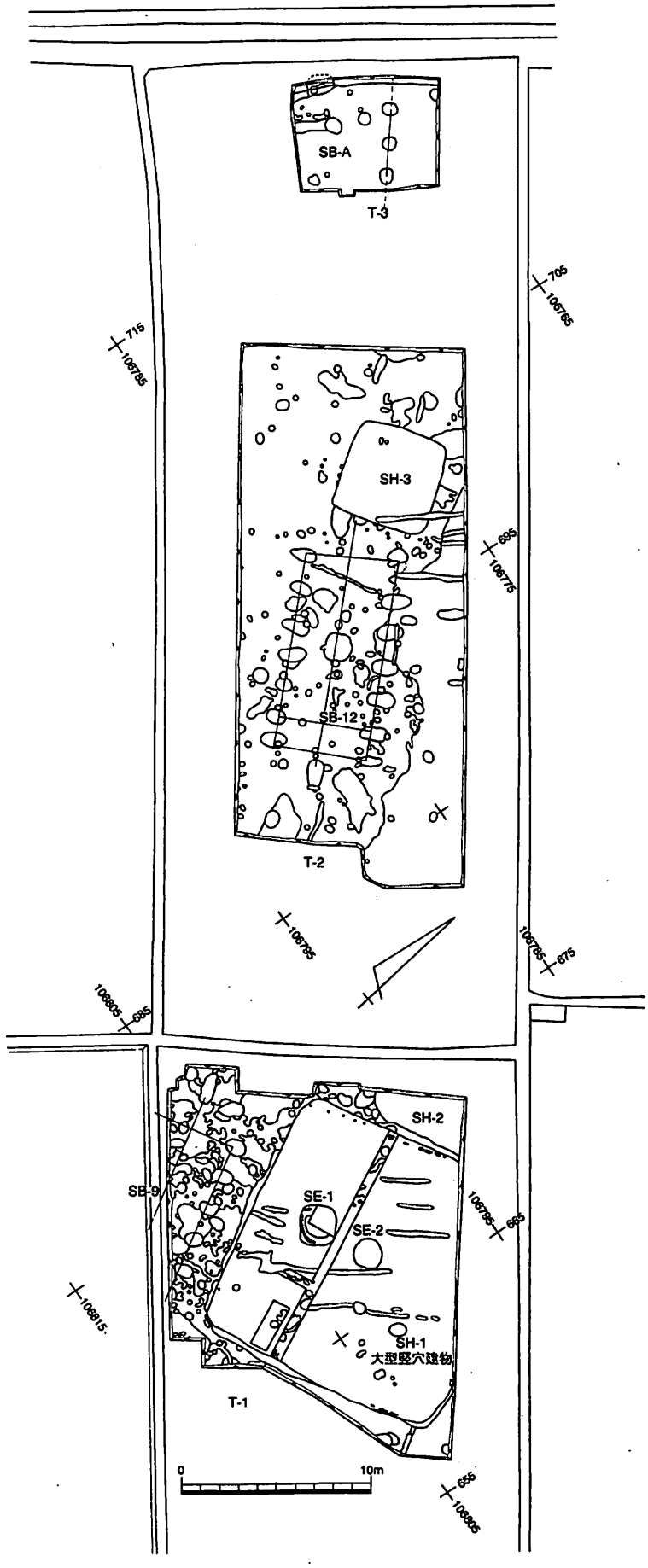
平成13年度に実施した確認調査によって検出された独立棟持柱付大型建物である（伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ　2008・3　守山市教育委員会）。柱穴配置から１間×５間（梁行５ｍ×桁行９ｍ）床面積45㎡を測る大型建物である。この建物は他の独立棟持柱建物と比較して梁行が５ｍと長く規模も大きい。さらに南側の梁から1.5ｍ外側に柱穴が配置されており、露台のような張り出し施設が付設されていたと考えられる。露台をもつ大型建物は、栗東市下鈎遺跡の独立棟持柱付大型建物でも検出されている。露台部分を含めると床面積52.5㎡に達する大型建物で、他の独立棟持柱建物と比較して規模や付属施設を持つ点で異なっている。

桁柱及び棟持柱は建物中心部にむかって斜路をもつと推定され、他の大型建物と同じとみられる。しかし、心柱は直径1.5ｍ、深さ80cmと大きく、直径40cmほどの大きな柱材が使用されていたと考えられ、他の独立棟持柱建物と様相を異にしている。時期のわかる遺物は出土していないが、竪穴住居に切られていることから弥生時代後期中葉と思われる。

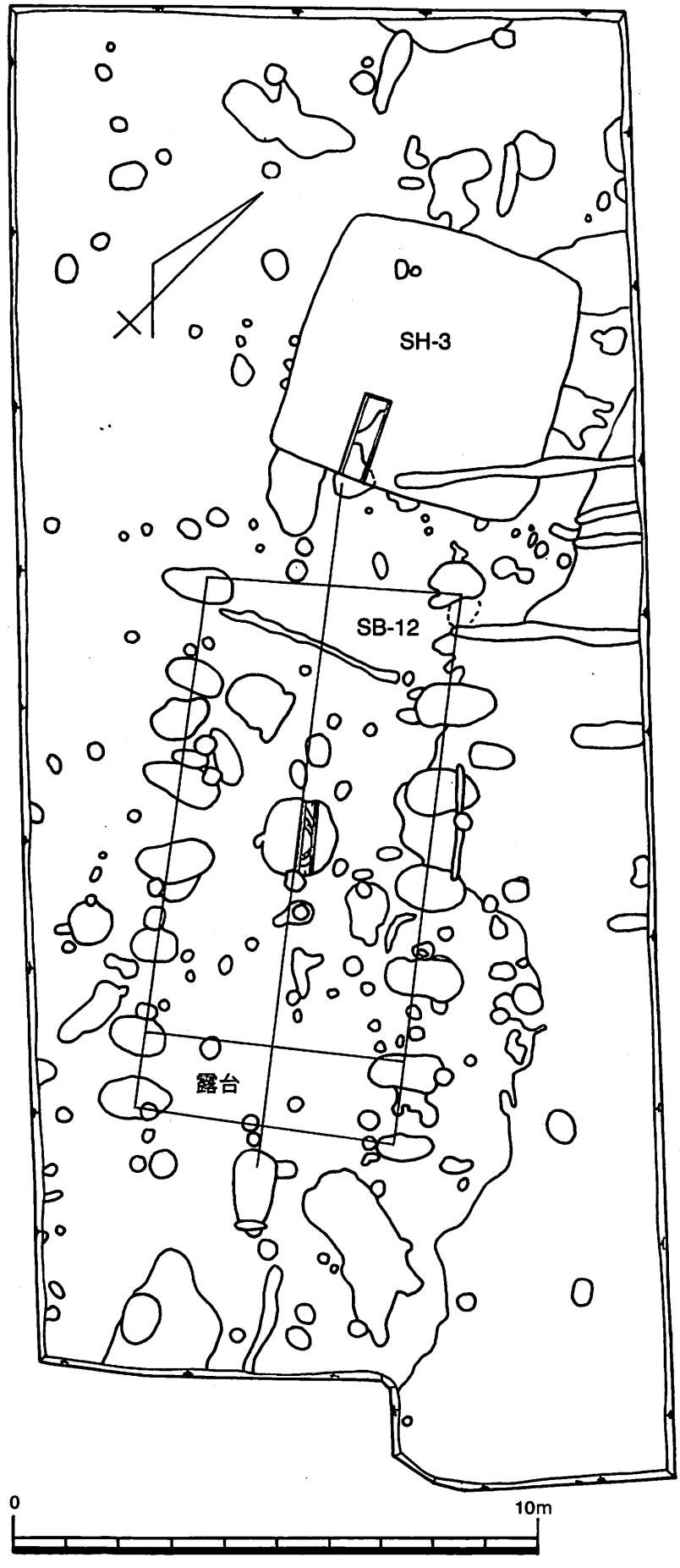
ＳＢ－12とＳＢ－９は、棟持柱間の距離が18.4ｍとＳＢ－８－ＳＢ－９間の距離と同じ間隔であった。さらに棟方向が約８°西側に振れており、円弧状に配置されていることがわかる。露台状の施設を持つ独立棟持柱付大型建物が存在する事、また規模等に若干の差異が見られる３棟の独立棟持柱付大型建物が、円弧を描き等間隔に配置されていたことなどが判明した。



挿図15　大洲地区遺構検出状況



挿図 16　伊勢遺跡 74 次調査全体図



挿図 17　伊勢遺跡 74 次調査Ｔ－２平面図

第５章　大型竪穴建物と焼土塊遺構

伊勢遺跡の中枢部とみられる方形区画や楼観などの施設を中心に、円弧状に配置された独立棟持柱付大型建物群の外側からは、大型の竪穴建物が発見されている。この大型竪穴建物には床面に精良な粘土を貼り、焼成を加えた特殊な施設が見られた。このような焼床遺構は大型建物の外側にあたる北東浦地区でも検出されている。

第１節　大型竪穴建物

平成13・14年度の確認調査によって発見された大型竪穴建物である。独立棟持柱付大型建物ＳＢ－９に隣接する位置で検出された。一辺13.5ｍを測る方形プランの建物で、床面積は185㎡に達する。残存壁高は50㎝を測る。床面調査の結果、４本の主柱穴を持ち、東西方向に棟持柱を持つことが推定された。主柱穴（Ｐ-１）は長径1.5ｍ、短径１ｍ、深さ90㎝を測り、東から西へむかって斜路を持たせていることがわかった。主柱穴間の距離は東西7.6ｍ、南北7.3ｍを測る。南北方向の主柱穴の中間にあたる3.7ｍから外側2.4ｍに棟持柱が位置している。五角形住居と同じく、東南辺中央の壁際に貯蔵穴が付設されていた。貯蔵穴は短辺1.3ｍ以上、長辺２ｍ以上の方形プランで、深さ20㎝の逆台形状の掘方であった。

床面を一部断ち割り断面観察を行った結果、砂礫を多く含む地山を掘り、約30㎝の厚みで黄色シルトを貼り、床を形成していることが判明した。黄色シルトの上面は赤く発色しており、一度上面を焼いていることが推測された。さらにその上に精良な粘土を5㎝～8㎝貼り、直径1㎝～2㎝程の孔をあけた後、上面を焼成し、床面を形成している。この焼床材の上で土器が出土していることから、この焼床面が生活面であったと考えてよい。

壁際には周壁溝が巡っており、周壁溝に沿って直径10㎝～20㎝の柱穴が0.7～1.3ｍ間隔で掘られていた。壁際には板材が縦方向に打ち込まれていたと推測され、周壁沿いの柱穴は板材を止めていたものと思われる。さらに板材と掘方の間には約40㎝×30㎝、厚さ８～13㎝を測る焼壁材が竪穴建物の壁際に縦方向に並べられていたことが想定された。

大型竪穴建物は30㎝に及ぶ厚い貼り床や焼き床施設、板状の焼き壁材など極めて特殊な施設が見られ、特別な建築物であったとみられる。また主柱穴の規模、棟持柱の配置などからみて特異な上屋構造をもつ竪穴建物であったと考えられる。出土土器は弥生時代後期中葉でも古い様相を示しており、方形区画など主要施設とほぼ同時代の建物と推定された。

伊勢遺跡確認調査報告書Ⅵ所収　守山市教育委員会　2008・３

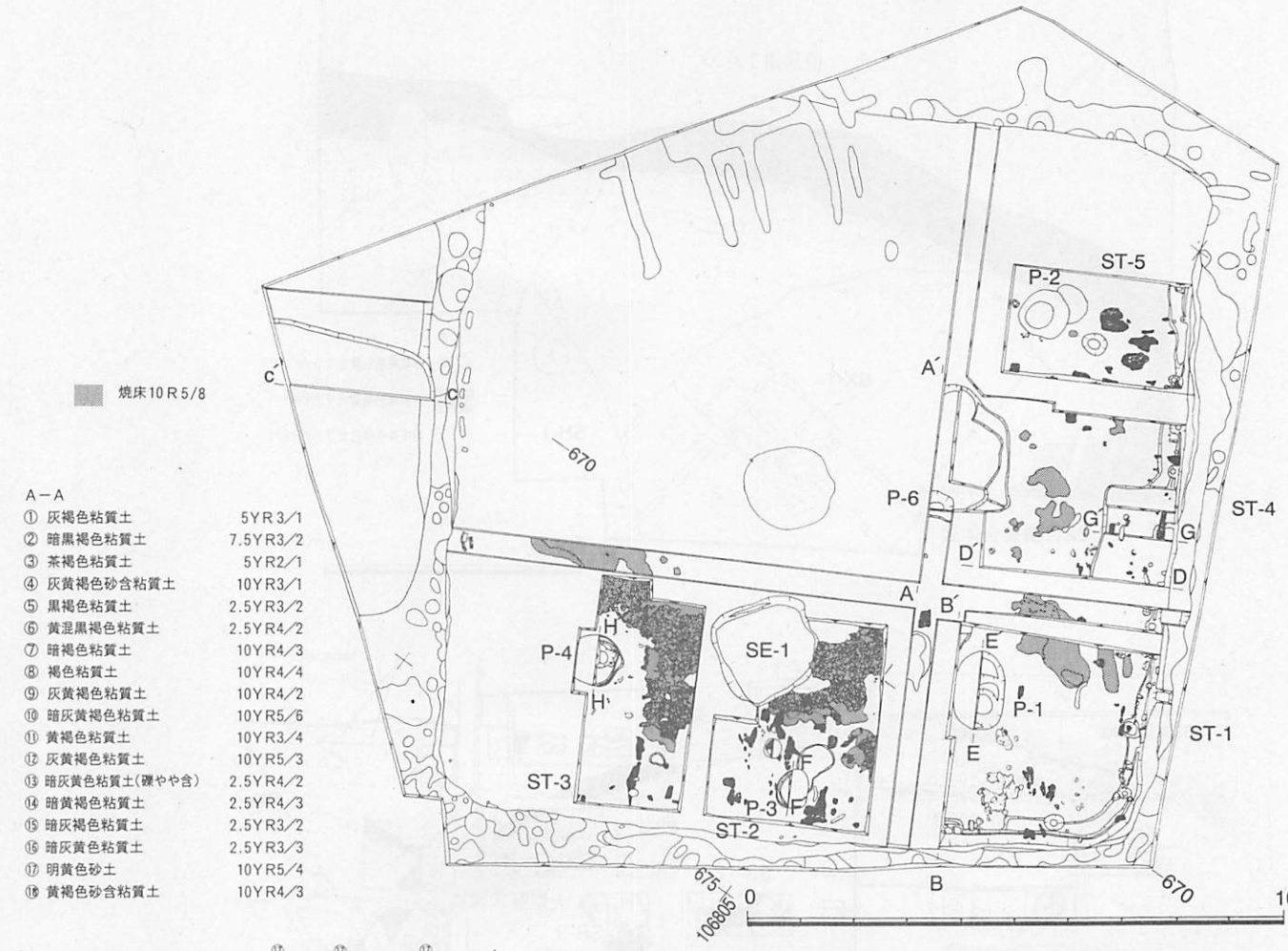
第２節　北東浦地区焼土塊遺構

平成11・12年度に実施した第62・67次確認調査によって、焼土塊遺構を検出した。旧河道及び弥生時代後期の竪穴住居に隣接する遺構で、その性格は不明であったが、平成13・14年度の調査によって大型竪穴建物の床面より同様の遺構が検出されたことから、竪穴住居あるいは平地式住居に伴う焼床遺構であったと考えられる。

焼土塊遺構に伴う遺構のプランは不明で、５ｍ×９ｍ以上の楕円形の遺物包含層（ＳＸ－１）の上で検出された。ＳＸ－１からは北白川上層式の縄文時代中期末から後期前半代の縄文土器やサヌカイトチップが出土しており、縄文時代の竪穴住居である可能性が強い。焼土塊遺構はその上に営まれた遺構とみられるが、大型竪穴建物のような明確な遺構プランは見られない。竪穴住居あるいは平地式住居に伴うものとすれば、それが削平され床遺構の一部が残存したものか、あるいは祭祀に伴う土坑とみることもできる。いずれにしても、地山である黄色シルトの上に精良な粘土が貼られ、上面から焼成されており、赤く発色している。東西2.6ｍ、南北3.1ｍの範囲に広がっており、中央部には東西1.2ｍ、南北1.5ｍ程の楕円形の空閑地があることがわかっている。焼土塊遺構はドーナツ状に広がっており、中心部にむかって低くなり、凹面状の断面形を呈している。上面のみ赤く発色しており原状を保っていると考えられる。遺構には金属反応も見られず、炭や灰を全く伴わないことから、工房や炉など常時火を使用する遺構ではなかったとみられる。

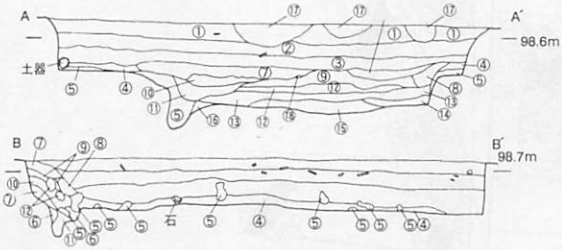
大型竪穴建物にもドーナツ状に焼床が広がっていることや、部分的に凹面状の窪みが見られること、孔が表面にあけられているなど共通点を指摘することができる。祭祀施設とみる考え方もあるが、現時点では住居に伴う床施設である蓋然性が高いと思われ、今後の資料増加を待ちたい。

伊勢遺跡確認調査報告書Ⅲ所収　守山市教育委員会　2005・３



A－A

① 灰褐色粘質土	5YR3/1
② 暗黒褐色粘質土	7.5YR3/2
③ 茶褐色粘質土	5YR2/1
④ 灰黄褐色砂含粘質土	10YR3/1
⑤ 黒褐色粘質土	2.5YR3/2
⑥ 黄混黒褐色粘質土	2.5YR4/2
⑦ 暗褐色粘質土	10YR4/3
⑧ 褐色粘質土	10YR4/4
⑨ 灰黄褐色粘質土	10YR4/2
⑩ 暗灰黄褐色粘質土	10YR5/6
⑪ 黄褐色粘質土	10YR3/4
⑫ 灰黄褐色粘質土	10YR5/3
⑬ 暗灰黄色粘質土(礫やや含)	2.5YR4/2
⑭ 暗黄褐色粘質土	2.5YR4/3
⑮ 暗灰褐色粘質土	2.5YR3/2
⑯ 暗灰黄色粘質土	2.5YR3/3
⑰ 明黄色砂土	10YR5/4
⑱ 黄褐色砂含粘質土	10YR4/3

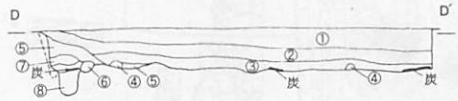


C－C

① 灰褐色粘質土(1cm～5mmの砂礫含)	5YR3/1
② 暗黒褐色粘質土(5mm～3cmの礫含)	7.5YR3/2
③ 茶褐色粘質土(1cm～20cm大の石含)	5YR2/1
④ 灰茶褐色粘質土	7.5YR2/2
⑤ 暗黄褐色粘質土	5YR2/1
⑥ 淡灰褐色砂土	2.5YR4/1
⑦ 明黒褐色粘質土	10YR2/2
⑧ 灰茶色砂土	10YR2/3

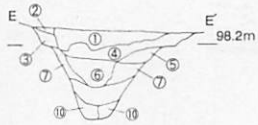
B－B

① 灰褐色粘質土(1cm～5mmの砂礫含)	5YR3/1
② 暗黒褐色粘質土(5mm～3cmの礫・土器片多く含)	7.5YR3/2
③ 黄褐色粘質土	5YR2/1
④ 灰黄褐色砂含粘質土	10YR3/1
⑤ 黄褐色砂含粘質土	10YR4/3
⑥ 暗褐色粘質土	10YR3/3
⑦ 黒褐色粘質土(砂礫・炭含)	7.5YR3/2
⑧ 暗褐色粘質土	10YR3/3
⑨ 暗褐色粘質土	7.5YR3/2
⑩ 赤褐色粘質土	5YR2/4
⑪ 暗黒褐色混赤色粘質土	10YR3/2
⑫ レンガ状焼土塊	



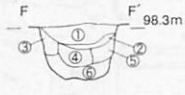
D－D

① 灰褐色粘質土(1cm～5mmの砂礫含)	5YR3/1
② 暗黒褐色粘質土(5mm～3cmの礫含)	7.5YR3/2
③ 茶褐色粘質土(1cm～20cm大の石含)	5YR2/1
④ 黄灰色シルト	2.5YR5/4
⑤ 暗褐色粘質土(砂含)	10YR3/3
⑥ 灰茶褐色砂含土(炭多含)	7.5YR2/1
⑦ 暗茶褐色砂含粘質土	10YR2/3
⑧ 暗黄褐色粘質土	2.5YR3/2



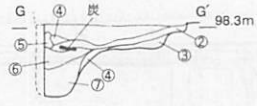
E－E

① 暗褐色粘質土(砂礫含)	10YR3/3
② 茶褐色砂含粘質土	2.5YR5/4
③ 灰茶褐色粘質土	10YR4/2
④ 黄混灰褐色粘質土	10YR4/2
⑤ 黒褐色粘質土	10YR3/2
⑥ 暗黒褐色粘質土	10YR2/2
⑦ 暗灰褐色粘質土	10YR2/3
⑧ 灰黄色粗砂含土	5YR4/1
⑨ 暗黄褐色粘質土	2.5YR3/3
⑩ 灰黄色砂土	5YR4/1



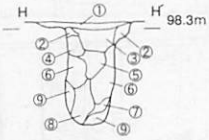
F－F

① 暗灰褐色粘質土	10YR3/2
② 暗茶褐色粘質土(炭含)	10YR3/1
③ 暗茶褐色粘質土	10YR3/1
④ 茶褐色粘質土	10YR2/2
⑤ 灰褐色粘質土(砂多く含)	2.5Y3/1
⑥ 暗灰茶色粗砂	5YR4/1



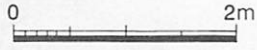
G－G

① 灰黒褐色粘質土	7.5YR3/1
② 暗黒褐色粘質土(炭含)	7.5YR2/1
③ 灰褐色粘質土	10YR3/1
④ 黄茶褐色粘質土	10YR3/3
⑤ 黄褐色砂含粘質土	10YR4/3
⑥ 暗茶褐色粘質土	10YR2/2
⑦ 茶褐色粘質土	10YR3/2

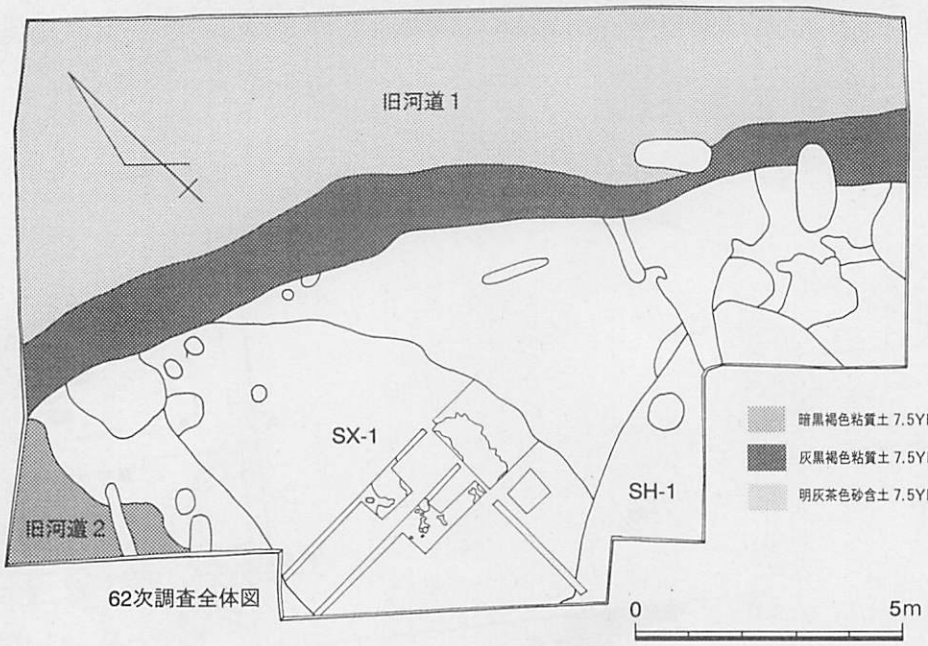


H－H

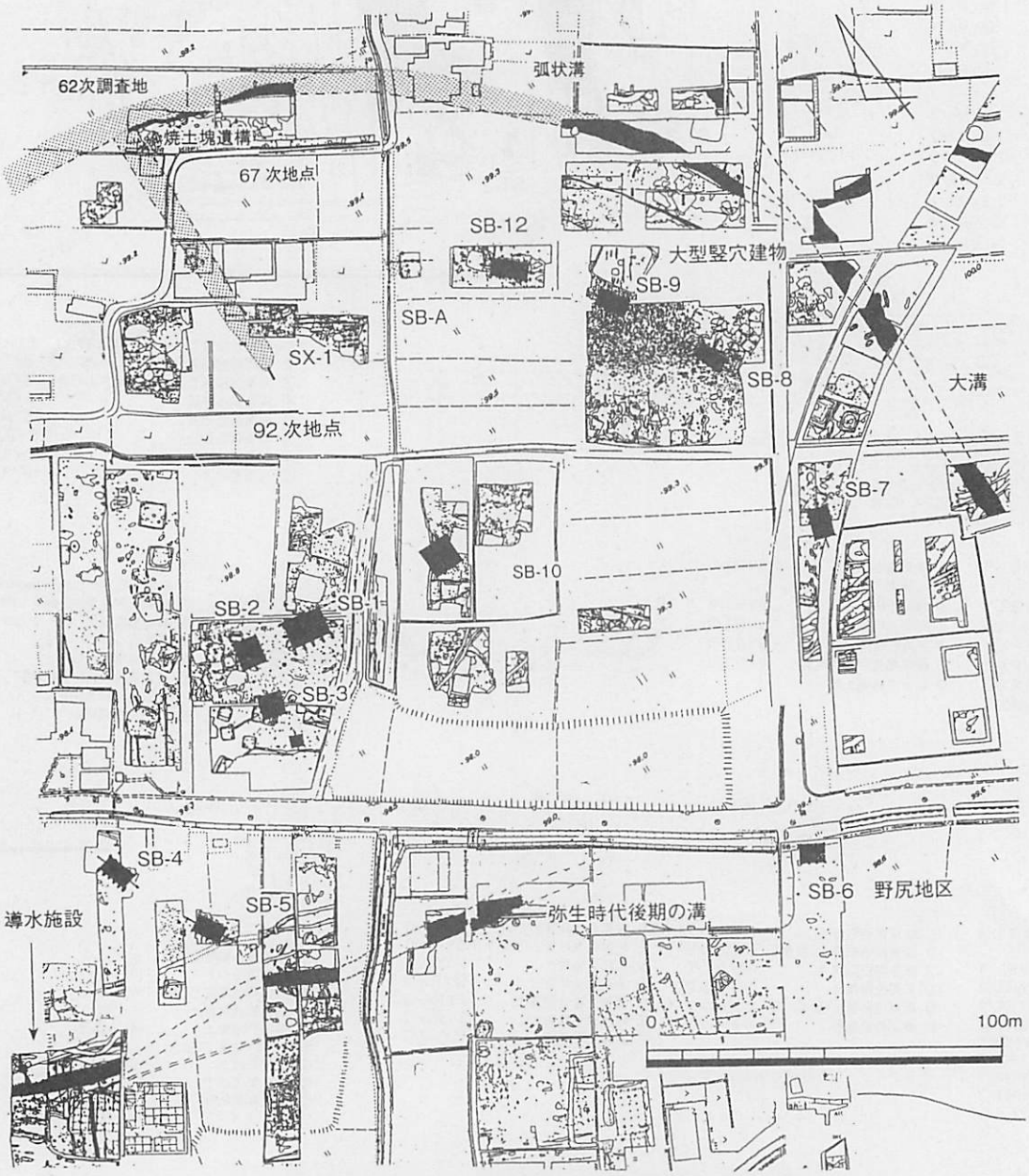
① 灰茶褐色砂含粘質土	5YR3/1
② 灰黄色シルト	10YR4/2
③ 暗灰褐色粘質土(炭含)	10YR3/2
④ 暗茶褐色粘質土	10YR3/1
⑤ 茶褐色粘質土	10YR2/2
⑥ 灰褐色粘質土(砂含)	2.5YR3/1
⑦ 黄褐色砂土	10YR3/3
⑧ 黄灰褐色砂土	2.5Y3/2
⑨ 暗灰黄色粗砂	5YR4/1



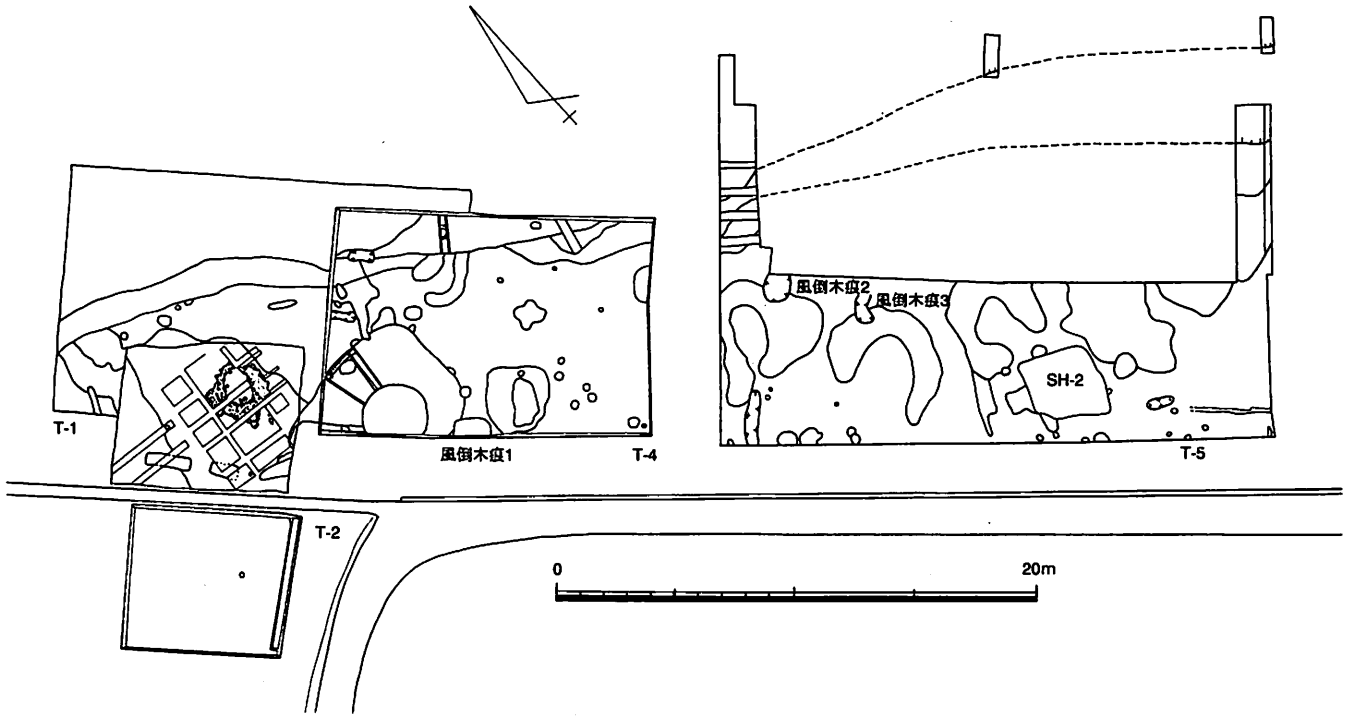
挿図 18　伊勢遺跡大型竪穴建物平面図・断面図

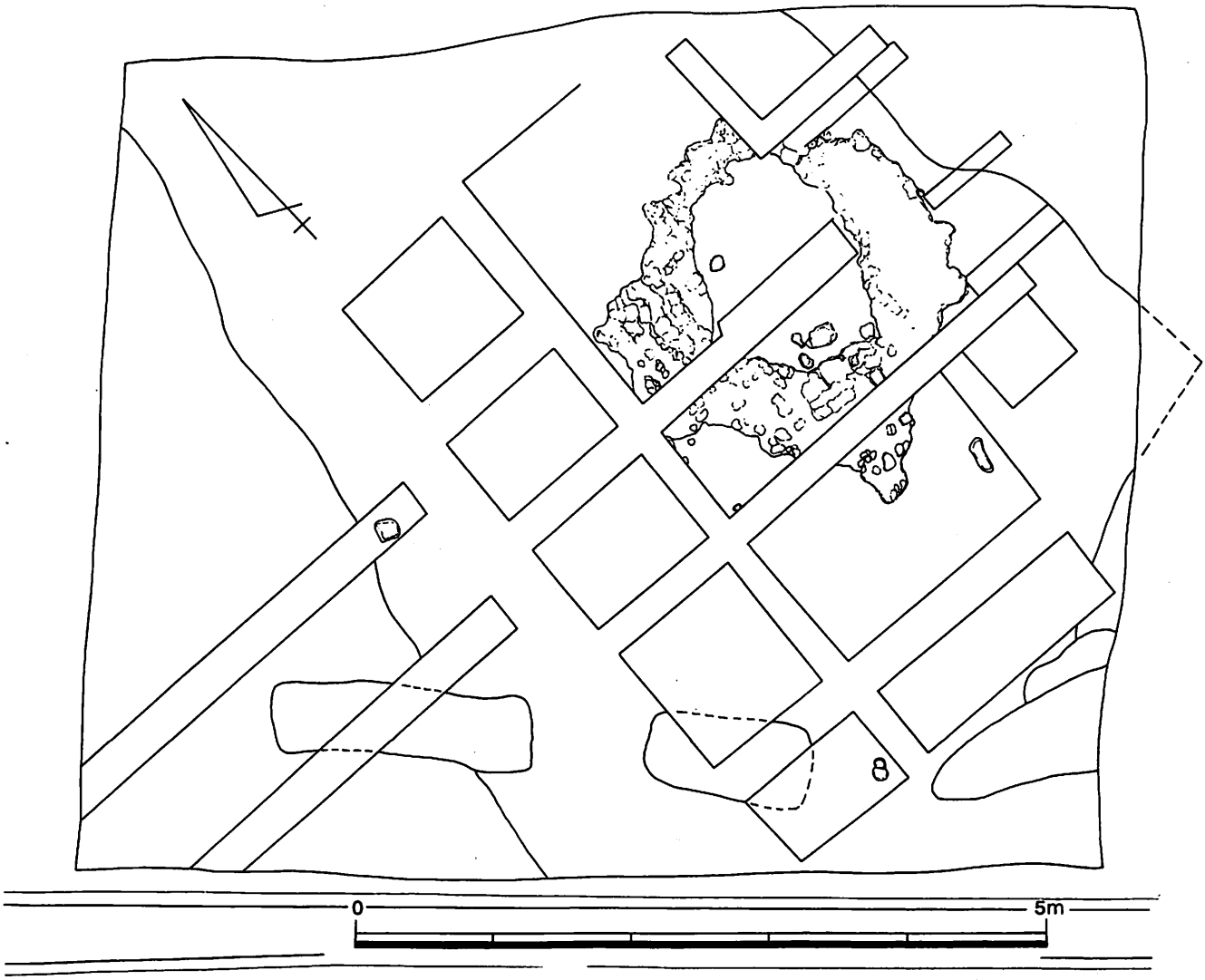


62次調査全体図



挿図19　第62次調査全体図・調査位置図





挿図 20　焼土塊遺構平面図

第６章　五角形住居と出土土器

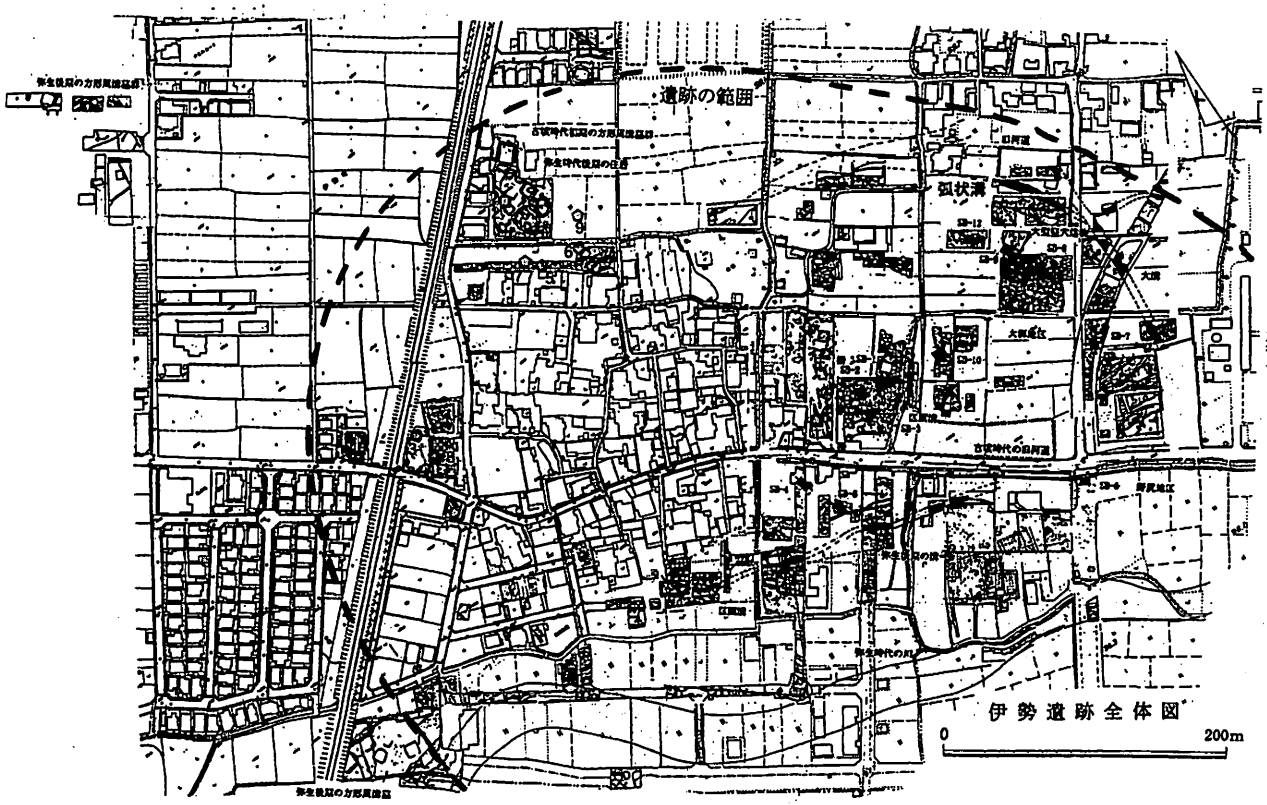
第１節　伊勢遺跡内の五角形住居

伊勢遺跡では現在までに９棟の五角形住居が検出されている。遺跡発見後、早い段階にあたる昭和56年の第２・３次調査、昭和57年の第４次調査で五角形住居が検出されており、特異な内容をもつ遺跡として注意された。その後、滋賀県下では伊勢遺跡例も含めて約20棟の五角形住居が報告されているが、１遺跡で８棟も発見されている例はなく、伊勢遺跡を特徴付ける要素と思われる。また、県下では野洲川流域に集中しており、弥生時代後期における湖南地域の特徴と見られる。

第２次調査では、中心部にあたる方形区画外側の柵の出入り口付近で五角形住居が検出されている。長径９ｍ、短径７ｍを測る大型の五角形住居である。複数の拡張・補修があったと思われ、周壁溝が数条並行している。中央に炉を有し、住居の南東辺中央に貯蔵穴をもつ点も典型的な特徴といえる。第４次調査では、短径６ｍ、長径８ｍを測る五角形住居が検出されている。周壁溝を有し、各コーナーの内側1.5ｍの地点に５つの主柱穴を配し、中央に炉・南東辺壁中央に貯蔵穴をもつ点も典型的な五角形住居の特徴である。この住居の床面より一括状態で出土した土器は、滋賀県南部地域の弥生時代後期中葉の指標となる良好な資料となっている。

第75次調査では３棟の五角形住居が検出されている。その内、ＳＨ－５は典型的な五角形住居で、長径８ｍ、短径約７ｍを測り、中央土坑、貯蔵穴、周壁溝を有し、コーナー内側に主柱穴を配している。75次調査で検出された五角形住居はコーナーが鋭角で、２次調査で検出された五角形住居に近い。第100次調査では長径８ｍ、短径７ｍの五角形住居が検出された。北コーナーがやや丸みを持ち、４次調査で検出された五角形住居に近い。やはり中央土坑、貯蔵穴、周壁溝を有し、床面より弥生時代後期中葉でも古相の弥生土器が出土している。４次調査地点に隣接する場所で検出されており、二棟の五角形住居が15ｍ程離れた位置に営まれていたことがわかった。

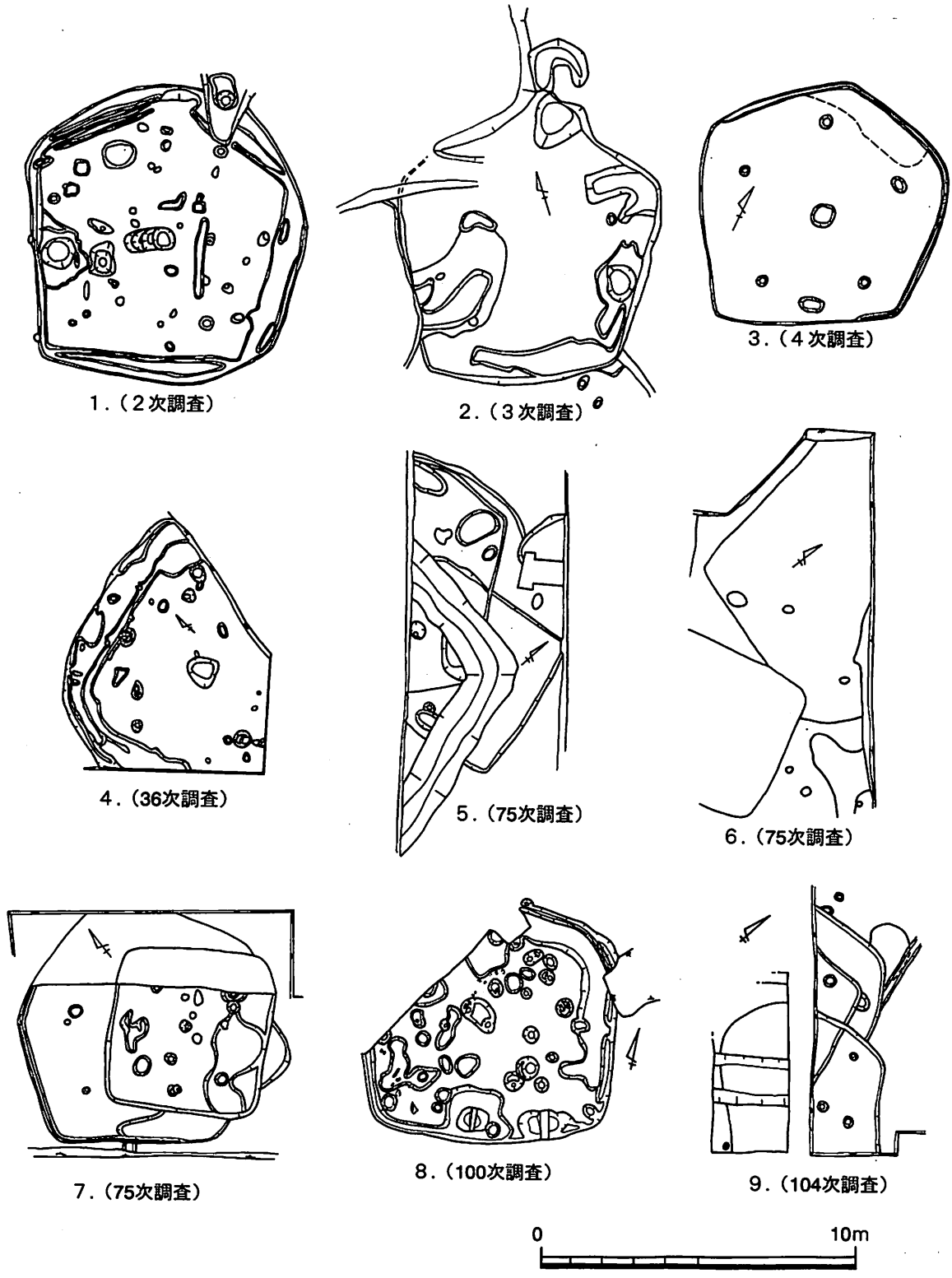
伊勢遺跡では西半部に竪穴住居を中心とする遺構が広がっているとみられるが、方形住居に混じって五角形住居が多く検出されている。五角形住居は比較的大型のものが多く、その周辺に中小の方形住居が伴っている。住居構造の特徴は、①周壁溝が殆どの住居に見られること。②中央に炉と思われる土坑を持つ。③各コーナーの内側に主柱穴を５つ配置すること。④南東部辺中央の壁際に長方形状の貯蔵穴が見られる。等の特徴があり、弥生時代後期中葉から後期末にかけて営まれている。



挿図21　伊勢遺跡内出土五角形住居位置図

弥生時代後期の五角形住居は、島根県・鳥取県、福井県、石川県など日本海沿岸地域に多くみられ、鉄の流通が活発化する時期に重なっている。また、竪穴住居南東辺中央に見られる貯蔵穴は、北陸の竪穴住居と共通する施設である。さらに、伊勢遺跡、下鉤遺跡、下長遺跡で検出されている布掘り建物も北陸地域で多く検出されている建築様式であり、弥生後期から古墳時代初頭における建築技術における日本海沿岸地域との交流の深さを示している。

伊勢遺跡75次発掘調査報告書所収　2003・3　守山市教育委員会



挿図22　伊勢遺跡内出土五角形住居

第2節　五角形住居出土土器

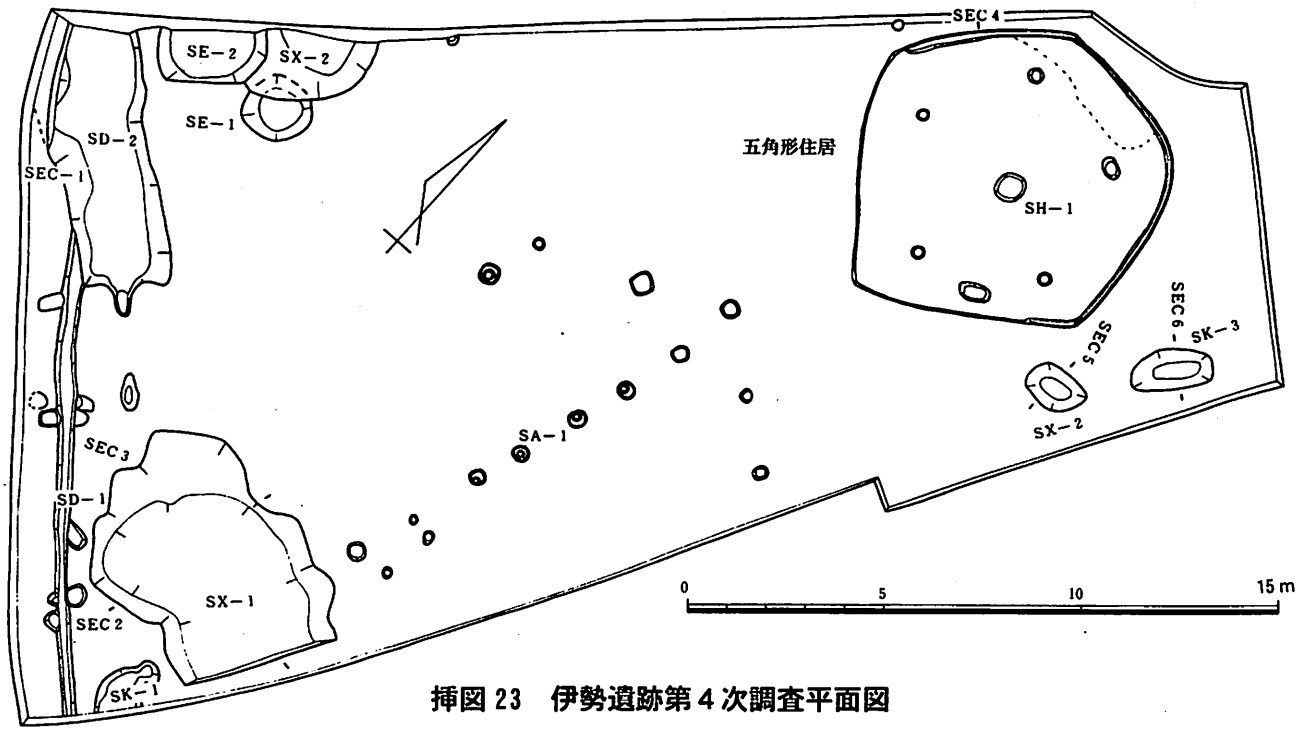
第4次調査で検出された五角形住居の床面からは、多数の弥生土器が出土している。これらの弥生土器は大型建物から出土した土器と同じ形態的特徴をもつことから、ほぼ同時期に存在したと思われる。大型建物や集落の変遷を考える上で指標となる土器群であることから、五角形住居出土土器群の特徴について概観しておく。

球形の体部に短く外反する口縁部が付く広口壺（8・14）が出土している。外面はヘラ磨き、あるいは刷毛で調整されているが、完全に無文化している。一方、弥生時代中期以来継続する受口状口縁壺（12・25）も見られる。短く立ち上がる頸部に受口状口縁が付くもので、口縁部は直立或いはやや内傾し立ち上がっており、後期でも古い様相を示している。体部・口縁部に櫛描文が施されており、伝統的な在地器種の特徴を残している。(20) は長頸壺と見られるが、下膨れの体部から緩やかに頸部へ移行する特異な土器で、頸部に櫛描文が施されている。頸部の立ち上がりの短い長頸壺が多く出土している。内外面ともに刷毛で調整されているが、(17) の肩部には波状の記号文が施されている。近江南部では弥生時代後期前半代の土器に記号文がしばしば施されているが、古い要素をのこしていると思われる。甕はその殆どが近江在地の受口状口縁甕である。上方あるいは外上方へ短く直立する口縁部を持ち、口縁部から体部下半にかけて櫛描文が施されている。(15) の体部下半部には櫛描列点文を施した貼付け突帯がみられるが、突帯文の初現例として注目される。小型の煮沸容器としての浅鉢（1・5・37）が増加していくのもこの時期の特徴である。受口状口縁を持つもので、在地器種の特徴を備えている。高杯は二段口縁を持つもので、短く外上方へ外反する。内外面ともに精製ヘラ研磨されており、近畿地方で広く見られる高杯と共通するものである。椀状の杯部をもつ小型の高坏（6・39・27）も散見される。内外面ともにヘラ研磨された高杯（6）の脚中部にはヘラ沈線文が施されている。小型の器台（7）は中空部が広く、後期前半の形態的特徴を残している。

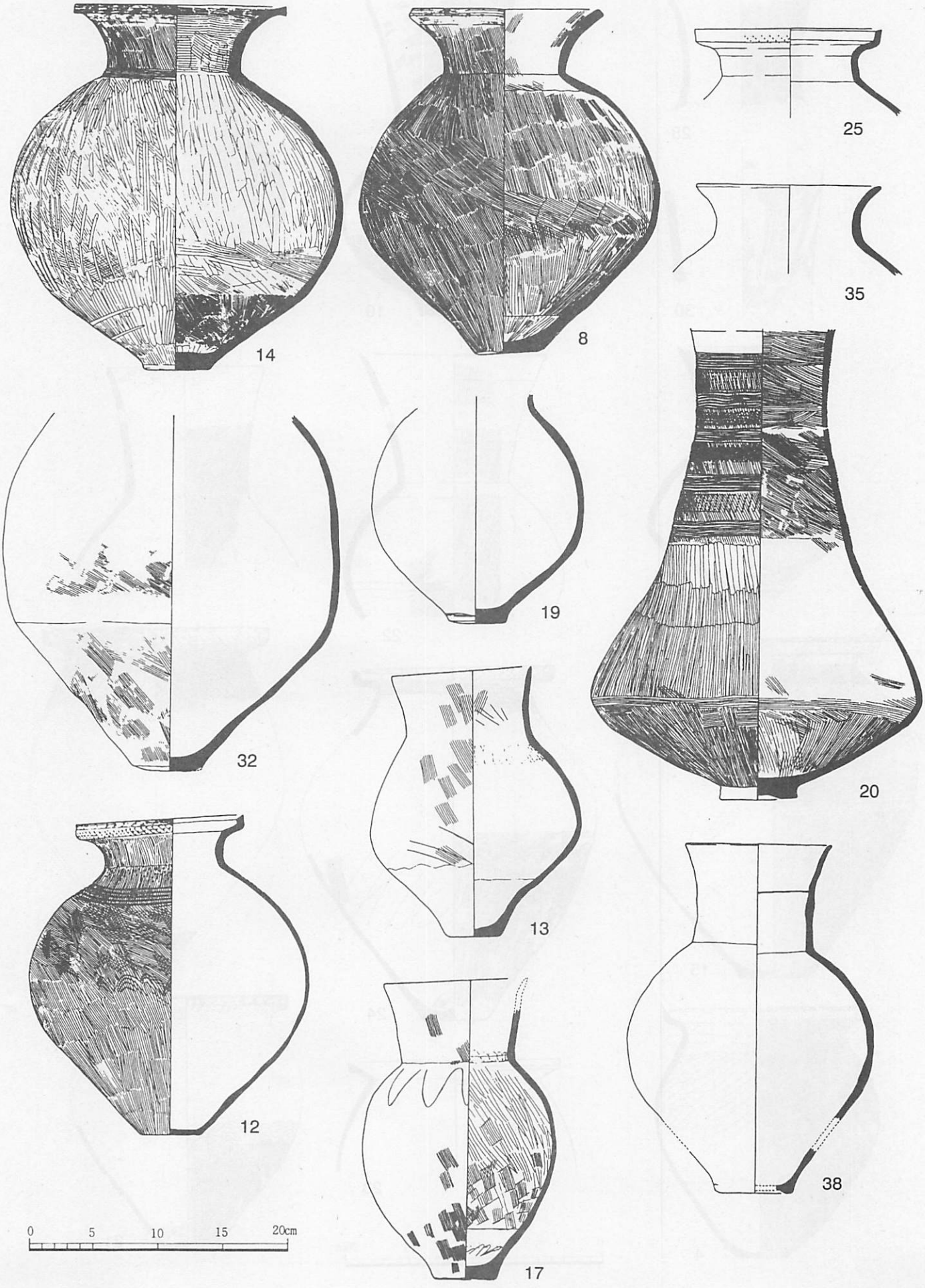
受口状口縁壺、煮沸容器の受口状口縁甕・浅鉢など近江在地の器種に、無文化した広口壺、長頸壺、高杯・器台など近畿地方に広く共有される器種が組成されているのが特徴である。形式的に弥生後期中葉でも古い様相を示している。伊勢遺跡の大型建物はこの時期であり、五角形住居出土土器群から、伊勢遺跡生成・発展期の土器様相を知ることができる。

なお、伊勢遺跡内から出土する受口状口縁甕や浅鉢などの在地器種を見ると、野洲川下流域に分布する典型的な近江在地の個体も見られるが、一方では口縁部の形状や文様、調整や処理の点で違和感を持つ個体、胎土の異なる土器も多数出土している。近江南部地域から離れた地域で製作された土器とみられ、野洲川流域以外の地域との活発な交流を推測させる。

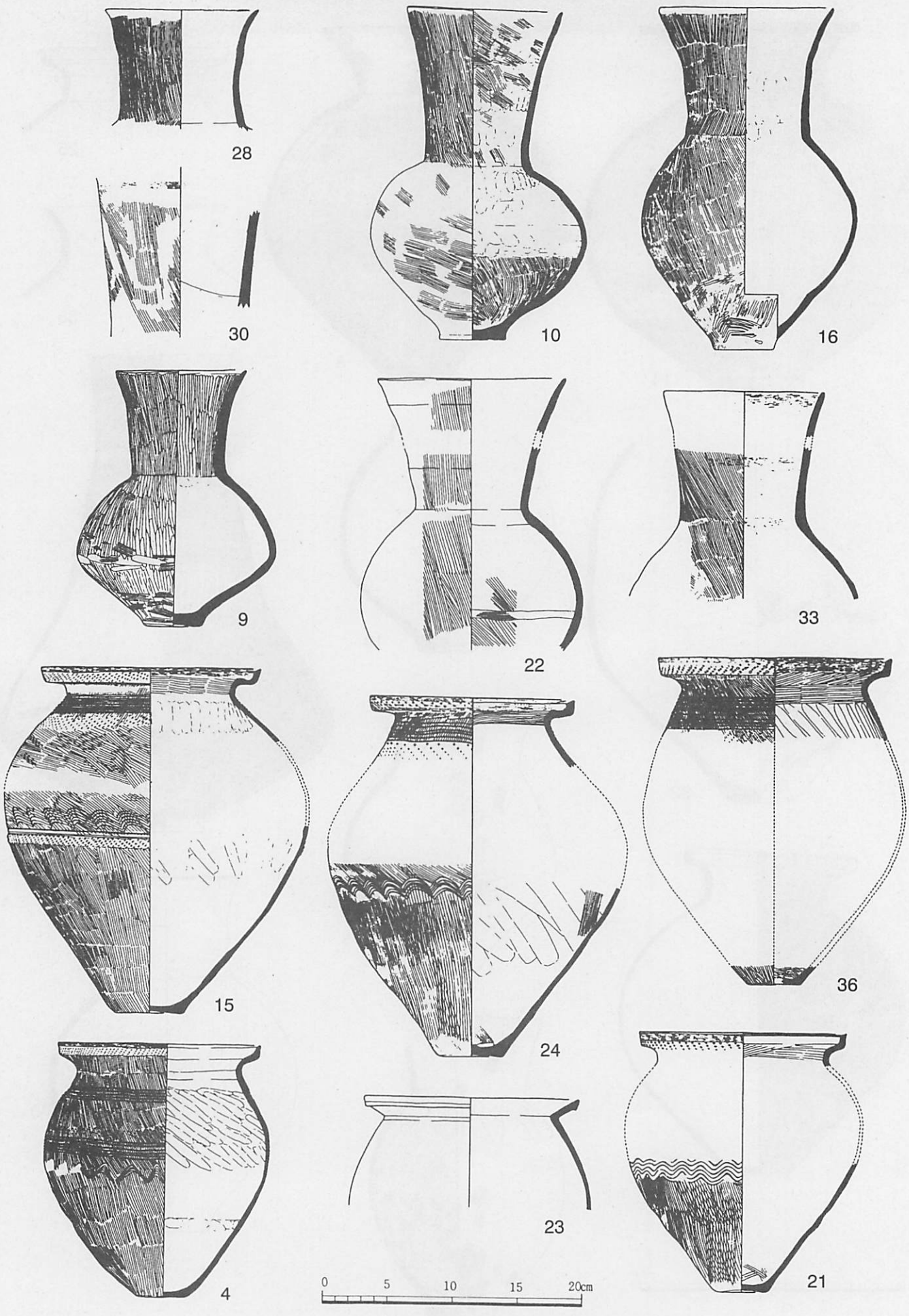
伊勢遺跡発掘調査報告書『守山市文化財調査報告書12冊』所収　守山市教育委員会 1983・3



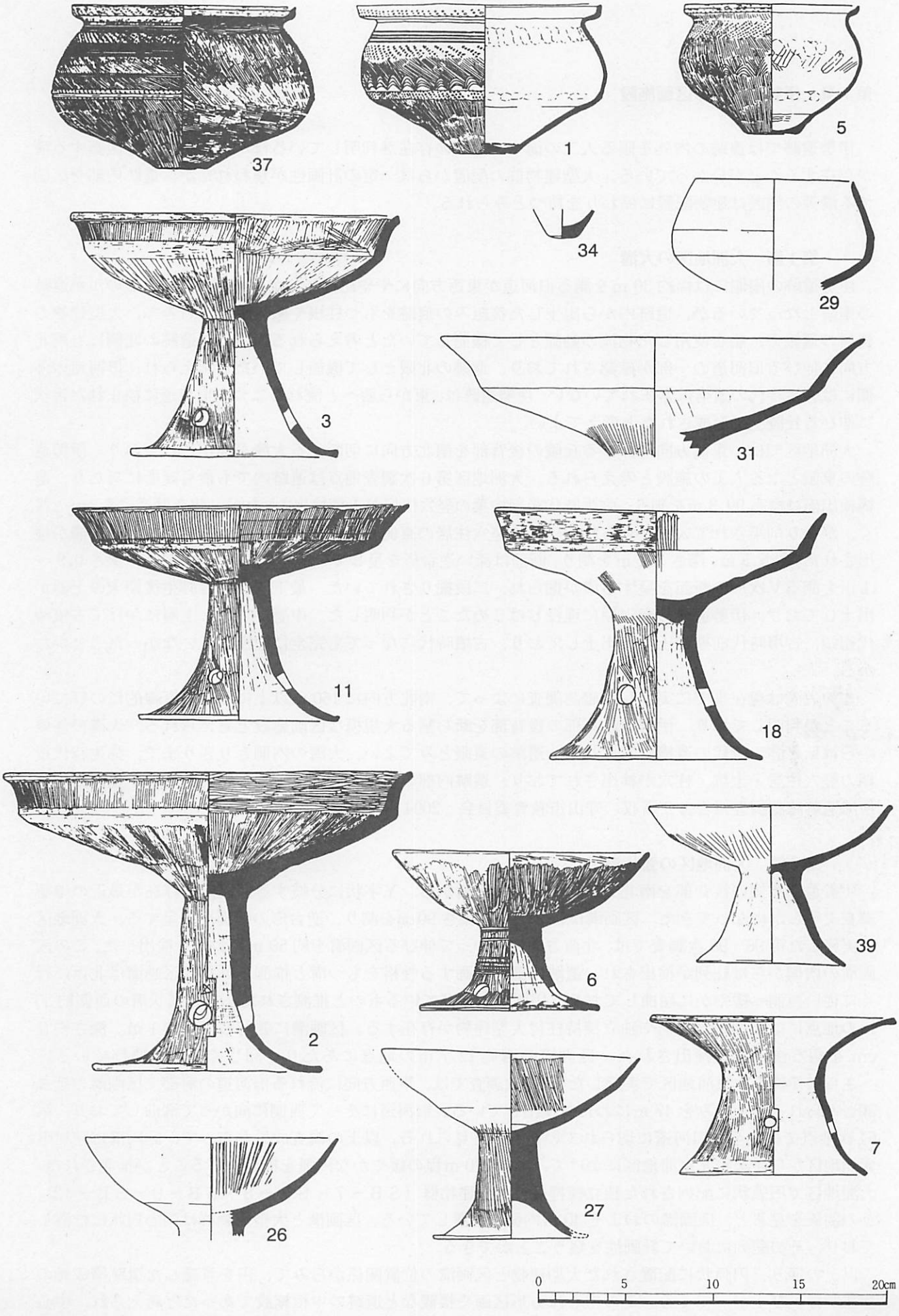
挿図23　伊勢遺跡第4次調査平面図



挿図 24　伊勢遺跡第 4 次調査検出五角形住居出土土器 1



挿図 25　伊勢遺跡第 4 次調査検出五角形住居出土土器 2



挿図 26　伊勢遺跡第 4 次調査検出五角形住居出土土器 3

第７章　伊勢遺跡内の区画施設

伊勢遺跡では遺跡の内外を限る人工の溝や旧河道の存在が判明しているほか、遺跡内部を区画する溝が存在することが分かっている。大型建物群の配置からは一定の計画性が窺われたが、遺跡内部を区画する溝等の施設は建物配置に係わりを持つとみられる。

第１節　大洲地区の大溝

伊勢遺跡の南側には幅約 30 ｍを測る旧河道が東西方向にやや蛇行しながら伸びている。この川が遺跡の南限となっているが、遺跡内から出土した筏組みの痕跡をもつ柱根や搬入土器からみて、大型建物の資材の運搬や、船を使用した物流の動脈として機能していたと考えられる。さらに遺跡の北側にも南北方向に伸びる旧河道の一部が確認されており、遺跡の北限として機能していたと考えられ、旧河道の外側には弥生時代の遺構は営まれていない。伊勢遺跡は、東から西へと流れる二つの旧河道に挟まれた舌状に伸びる丘陵上に形成されたと考えてよい。

大洲地区では、東西方向に伸びる丘陵の後背部を南北方向に切断する大溝が検出されており、伊勢遺跡の東限となる人工の施設と考えられる。大洲地区第６次調査地点は遺跡内でも最も高所にあたり、遺構検出面は標高 99.3 ｍを測る。弥生時代後期中葉の竪穴住居が１棟検出されたが、残存壁高は５ cm と浅く、かなり削平されていると見られる。この竪穴住居の東側６ｍの地点で、東西方向に伸びる大溝が検出された。幅 6.5 ｍ、深さ 2.1 ｍを測り、断面は深い逆台形を呈している。溝底には幅 1.1 ｍ、深さ 0.9 ～１ｍを測るＶ次形の断面を呈する溝が掘られ、二段掘りされていた。最下層からは弥生後期末の土器が出土しており、伊勢遺跡の衰退期に埋没しはじめたことが判明した。中層から中・上層にかけて古墳時代初頭、古墳時代前期の土器が出土しており、古墳時代になっても完全に埋没していなかったことがわかる。

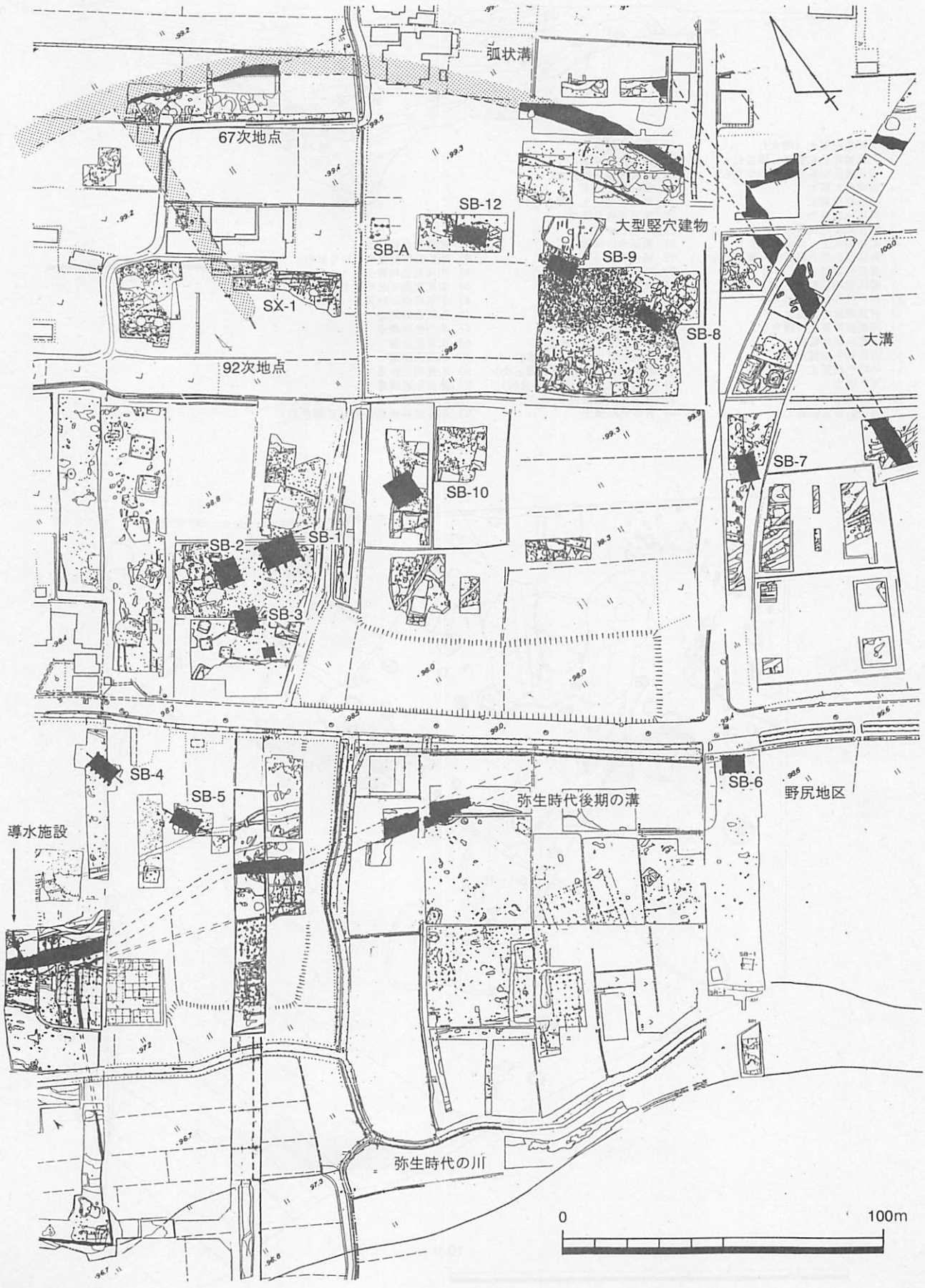
この大溝は現在までに実施した確認調査によって、南北方向に 160 ｍ以上にわたり直線的にのびていることが判明しており、伊勢遺跡東部の後背部を断ち割る大規模な区画施設と考えられる。大溝の外側からは殆ど弥生時代の遺構はみられず、遺跡の東限とみてよい。大溝の内側ぎりぎりまで、弥生時代後期の竪穴住居・土坑・柱穴が検出されており、遺跡内部の空間を有効に利用していたことが窺われる。
伊勢遺跡確認調査報告書Ⅱ所収　守山市教育委員会　2004・３

第２節　大洲地区の弧状溝

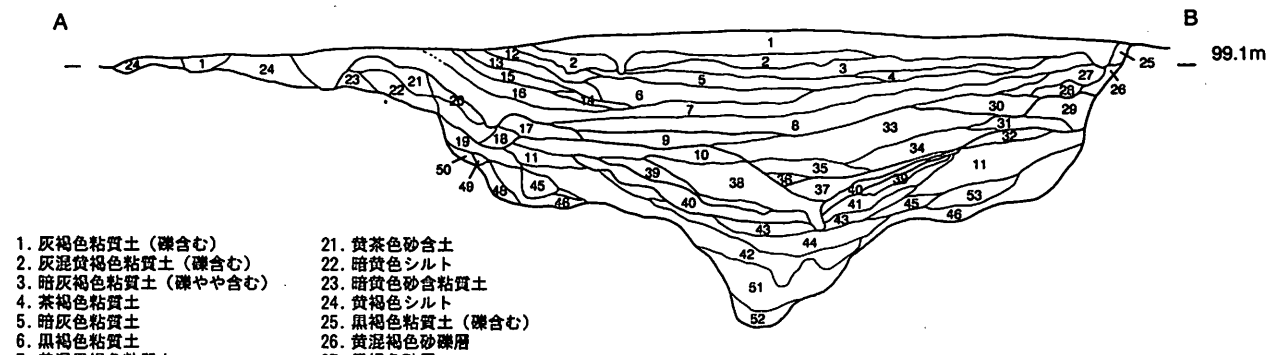
伊勢遺跡東側の後背部を南北方向に断ち割る大溝から、Ｙ字状に分岐する区画溝の存在が最近の確認調査で明らかになってきた。区画溝は幅 3.2 ｍ、深さ 90 ㎝を測り、逆台形の断面形を呈する。大洲地区で実施した第 96・98 次調査では、北西方向に向かって伸びる区画溝を約 50 ｍにわたり検出した。この区画溝の内側からは柱列が検出され、遺跡内部を区画する性格をもつ溝と推測された。区画溝は北西に行くに従い西側へ緩やかに屈曲しており、円弧状に伸びているものと推測された。この弧状溝の西側約 30 ｍの地点には大型竪穴建物や独立棟持柱付大型建物が存在する。区画溝に並行して幅約１ｍ、深さ約５ cm を測る浅い溝が検出された。区画溝の西側 12.7 ｍの地点にあたり、同じく弧状に伸びている。

さらに伊勢町北東浦地区で実施した第 67 次調査では、東西方向に流れる旧河道の肩部で区画溝の延長部とみられる落ち込みを 47 ｍにわたり検出している。旧河道にそって西側に向かって湾曲しており、第 64 次地点では完全に旧河道に切られているものと見られる。以上の調査成果からみて、区画溝は阿村町大洲地区から伊勢町北東浦地区にかけて、半径 170 ｍ程の緩やかな円弧を描き伸びることが推測された。大洲地区で円弧状に配列された独立棟持柱付大型建物群（ＳＢ－７・ＳＢ－８・ＳＢ－９・ＳＢ－ 12）との関係を見ると、区画溝のおよそ 40 ｍ内側に位置している。区画溝と大型建物群は同心円状に位置しており、その配列において計画性を窺うことができる。

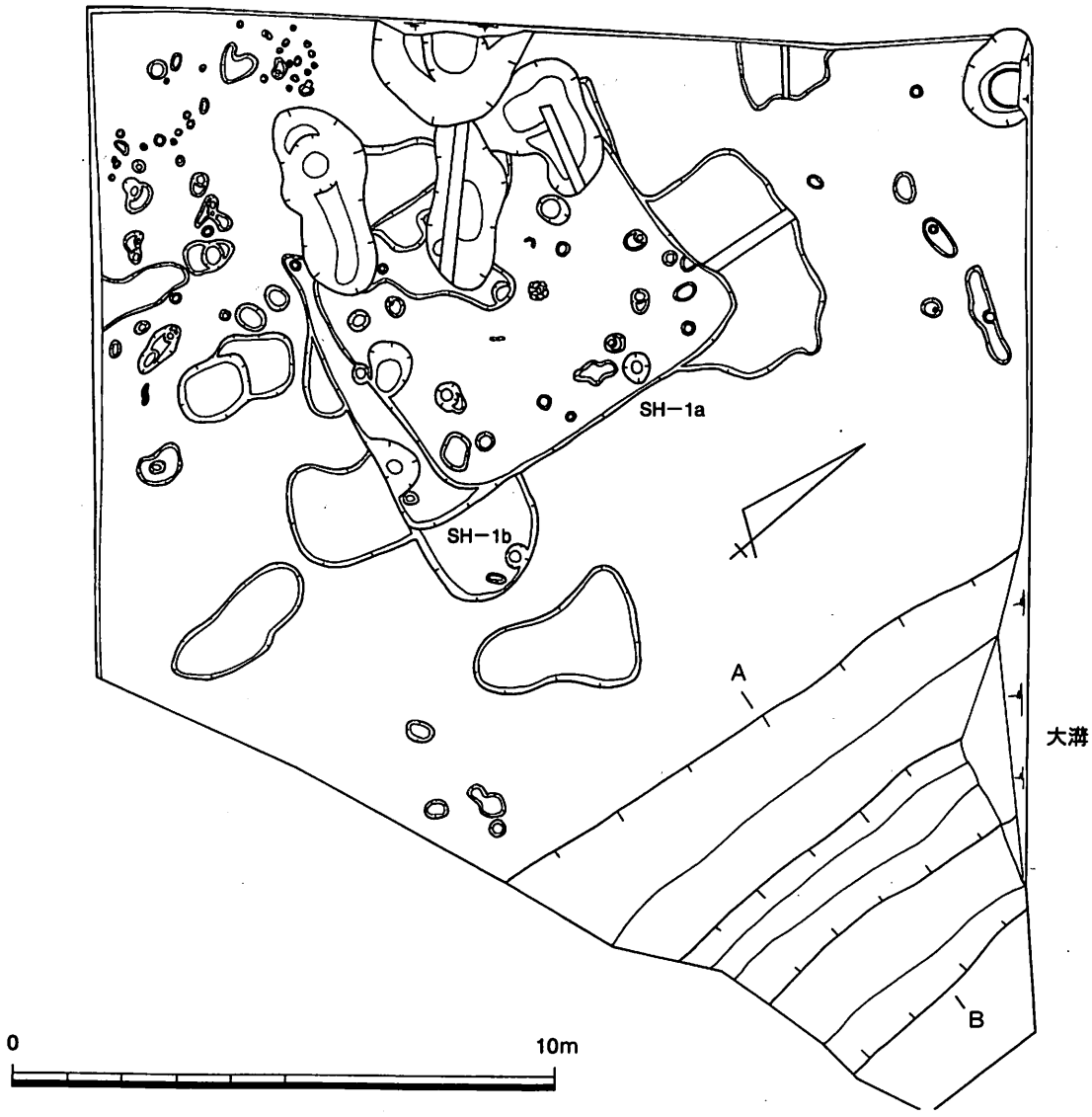
以上の通り、円弧状に配置された大型建物と区画溝の位置関係からみて、円を意識した遺跡構成軸の存在が浮かび上がってくる。その中心は方形区画や楼観など遺跡の中枢施設であったと考えられ、中心部の方形区画を中心に、円形の遺跡構成軸を組み合わせ伊勢遺跡が形成されていったと推測される。
伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ　守山市教育委員会　2007・３所収



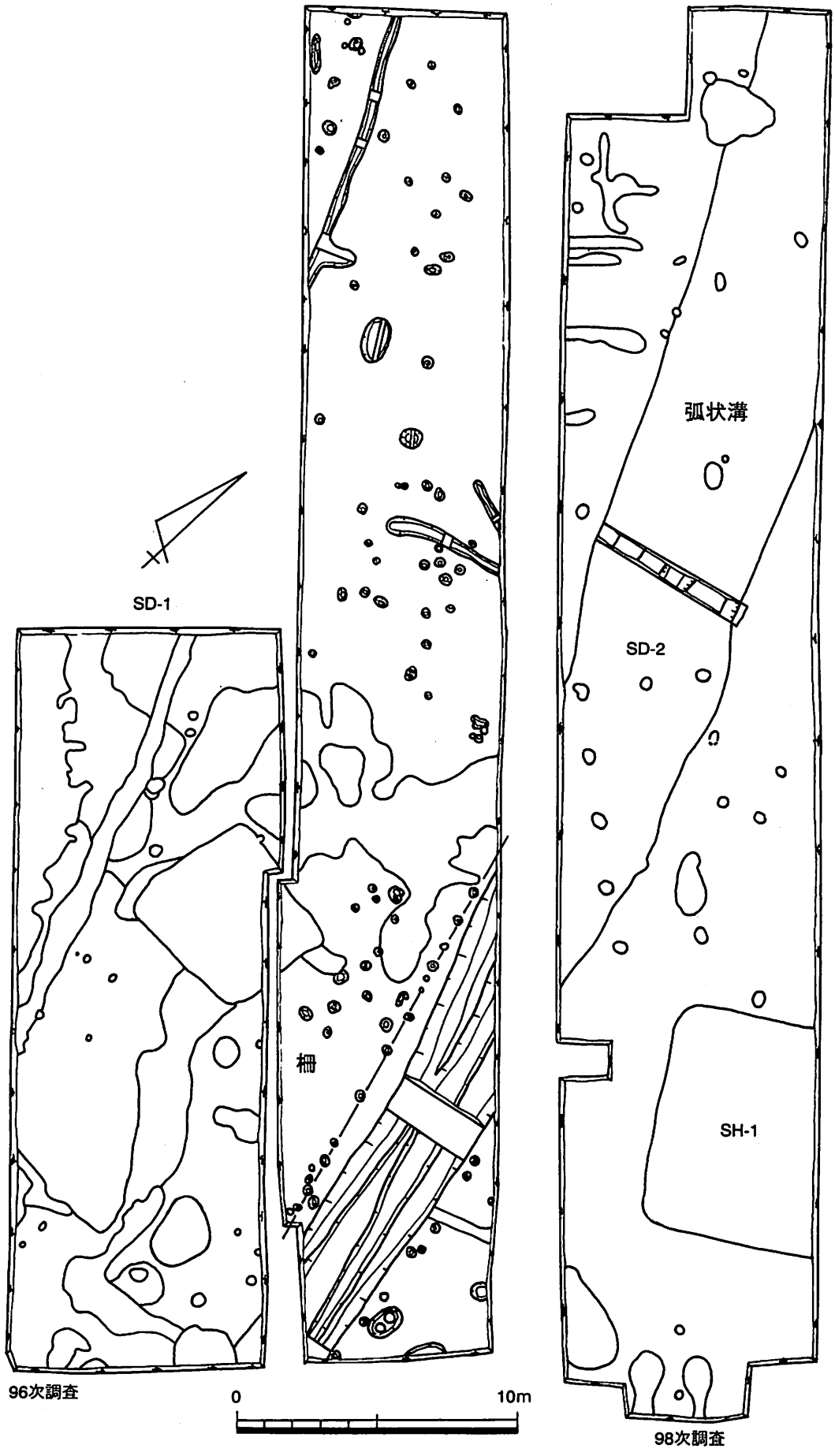
挿図 27　伊勢遺跡東半部遺構図



1. 灰褐色粘質土（礫含む）
2. 灰混黄褐色粘質土（礫含む）
3. 暗灰褐色粘質土（礫やや含む）
4. 茶褐色粘質土
5. 暗灰色粘質土
6. 黒褐色粘質土
7. 黄混黒褐色粘質土
8. 黒色粘質土（砂やや含む）
9. 青灰混色褐色粘質土（礫やや含む）
10. 青灰色粘質土
11. 青灰混黒色粘質土
12. 黒灰色砂含粘質土
13. 黄混黒灰色粘質土
14. 黒褐色粘質土（礫含む）
15. 灰褐色砂含粘質土
16. 暗黒褐色粘質土
17. 茶褐色粘質土
18. 黄色砂土
19. 青灰色粘質土
20. 黄褐色砂含粘質土
21. 黄茶色砂含土
22. 暗黄色シルト
23. 暗黄色砂含粘質土
24. 黄褐色シルト
25. 黒褐色粘質土（礫含む）
26. 黄混褐色砂礫層
27. 黒褐色砂層
28. 黒褐色砂礫層
29. 褐色礫層（5～6cm）
30. 茶褐色砂礫層
31. 黄褐色砂層
32. 黄混青灰色粘質土
33. 暗褐色砂層
34. 黒含褐色砂含粘質土
35. 黒色砂層（砂5mm含む）
36. 黒色粘質土（5mmの礫含む）
37. 黒色粘質土（5cm程の礫＋炭）
38. 灰黒色粘質土（礫やや含む）
39. 青灰混褐色粘質土
40. 青灰色粘質土
41. 暗青灰色粘質土
42. 暗灰褐色粘質土（やや砂含）
43. 明灰褐色粘質土
44. 青灰混黒褐色粘質土
45. 灰茶褐色砂粘質土
46. 暗灰色砂礫層
47. 名灰色砂礫層
48. 灰黄色砂層
49. 暗黄色砂層
50. 暗黄褐色砂層
51. 暗灰色砂礫層
52. 暗黒褐色粘質土（やや礫含む）
53. 暗灰黒褐色粘質土（砂礫含む）



挿図 28　大洲地区大溝検出状況・断面図



挿図 29　伊勢遺跡９６・９８次調査全体図

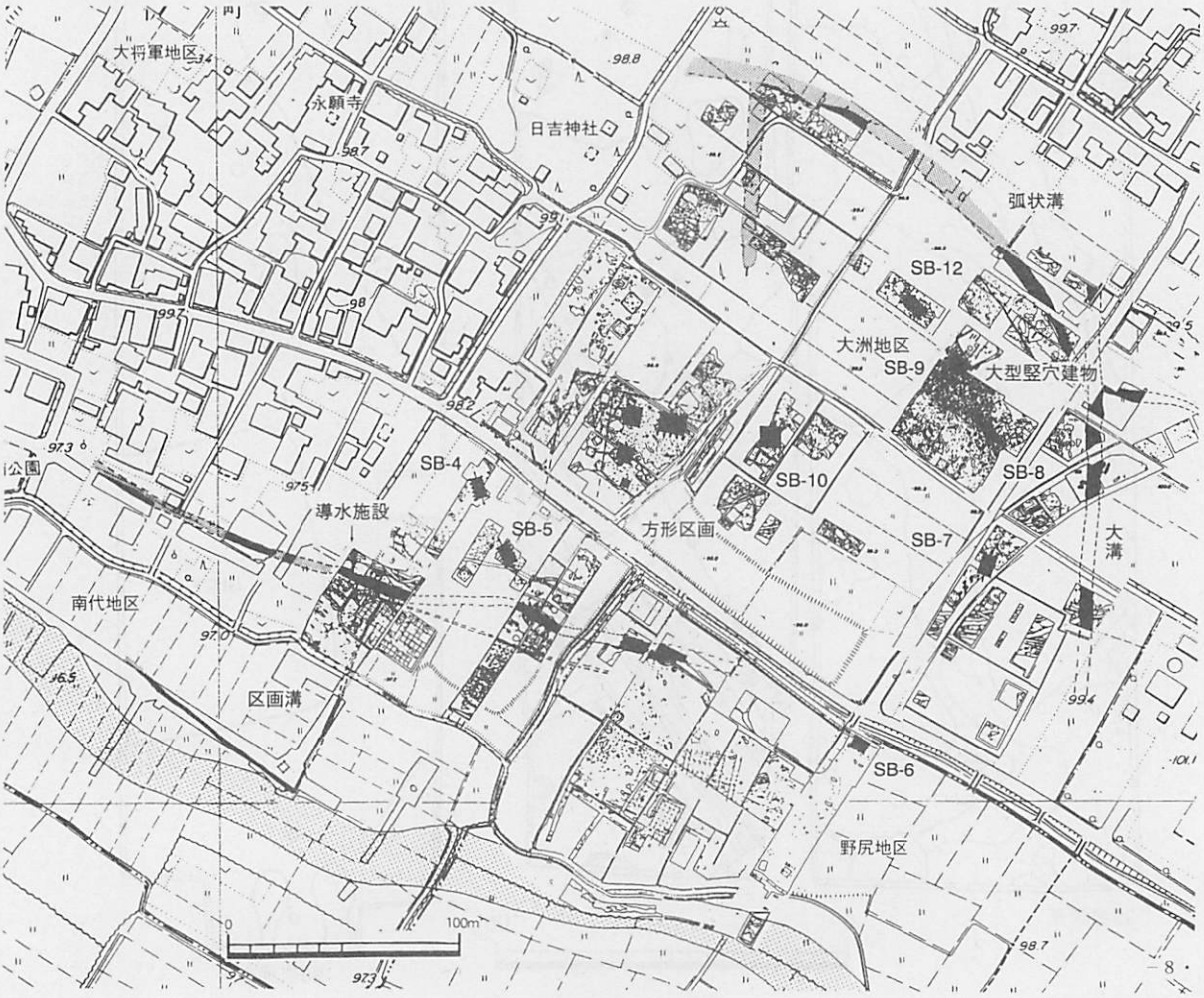
第３節　南代地区の区画溝と導水施設

南代地区では独立棟持柱付大型建物（ＳＢ－４）と西流する旧河道の間で、クランク状に伸びる区画溝が検出されている。区画溝は幅約１ｍ、深さ60㎝～80㎝を測り、深い逆台形の断面形を呈している。溝内からは弥生時代後期中葉～後葉の土器が出土しており、大型建物とほぼ同時期の遺構と考えられる。南代地区の区画溝は、伊勢遺跡中心部に存在する方形区画の南、約80ｍの地点をほぼ並行し75ｍ以上西へと伸び、約105°広角に屈曲し南西へ92ｍ直線的に伸びる。そして弥生時代の川（旧河道）の直前で80°鋭角に屈曲し85ｍ以上直線的に掘削されている。このクランク状の区画溝は、方形区画の前面ではその軸に並行するもので、南西に行くに従って地形に並行して掘削されている。遺跡内部を方形や矩形に区画する溝であり、弥生時代後期以前には見られない遺構である。

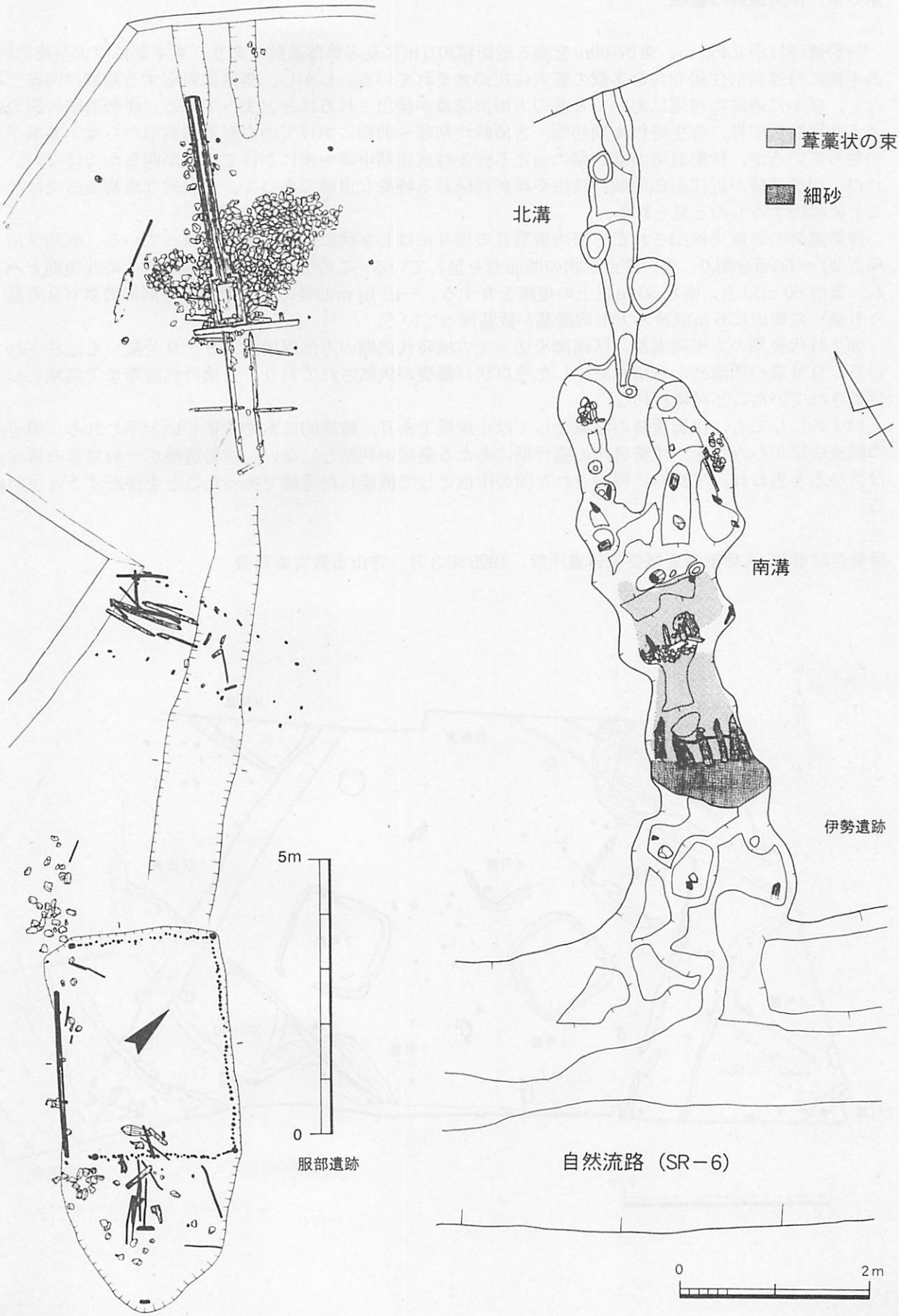
クランク状に伸びる区画溝に並行して幅３ｍ、深さ80㎝を測る溝（ＳＤ－１）が検出されている。方形区画の前面を東西方向に直線的に伸びる溝で、砂礫が埋土に多く堆積しており、水流が激しかったことが推測された。28次調査ではこの溝を取水源とする導水施設が検出されている。ＳＤ－１から取水した水は、矢板を打ち小礫を裏込めした土坑に溜められ、そこからオーバーフローした水は、連結する北側の土坑に溜まる仕組みになっている。これはＳＤ－１から取水した水を濾過し、浄水する施設とみられる。このような遺構は70ｍ西側で行った45次調査でも検出されており、穿孔された小型壺などが出土していることから祭祀に係わる施設とみられる。

このような導水施設は全国的にみても服部遺跡や纏向遺跡に先行する事例であり、伊勢遺跡において王が執り行う国の政治や祭祀に係わる施設として先駆的に導入された遺構として注目される。

守山市文化財調査報告書第63冊―伊勢遺跡第28次発掘調査報告書―1997年３月　守山市教育委員会
伊勢遺跡第28次発掘調査概要報告書所収　1998年３月　守山市教育委員会



挿図30　伊勢遺跡内部の区画溝



挿図 31　伊勢遺跡・服部遺跡の導水施設

第８章　伊勢遺跡の墓域

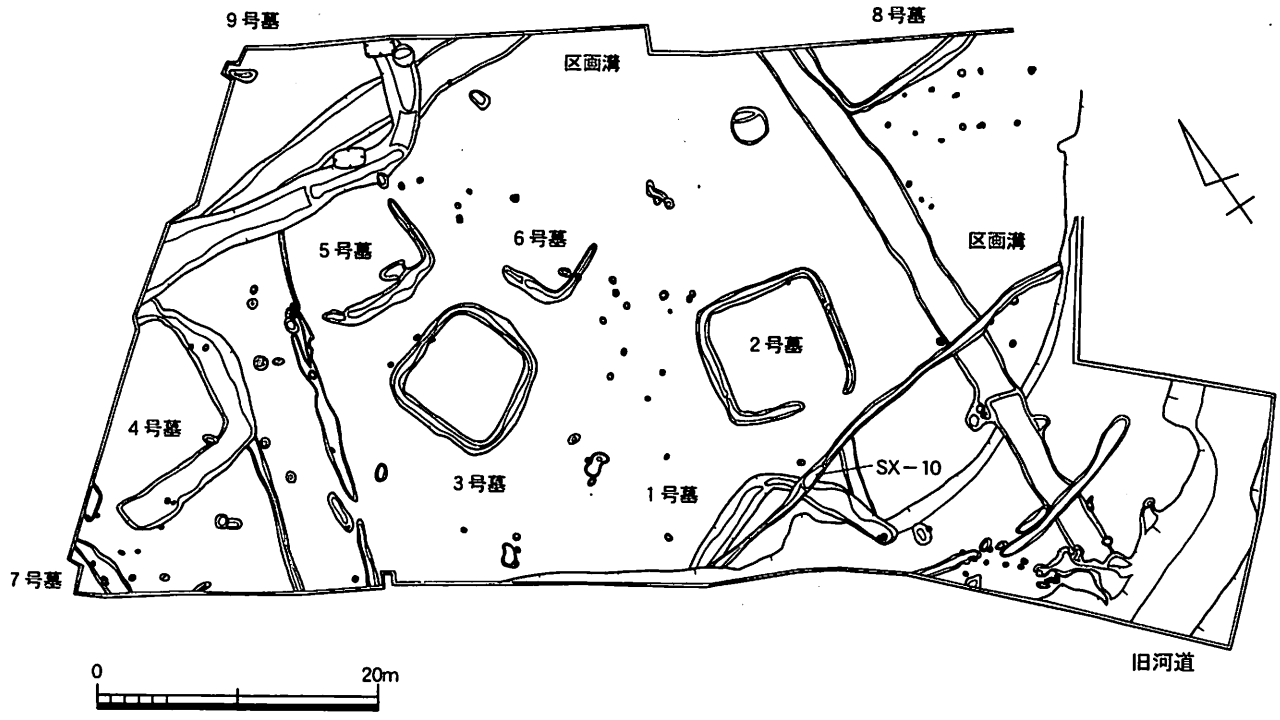
伊勢遺跡は南北450ｍ、東西700mを測る総面積30万㎡に及ぶ集落遺跡であり、東半部には大型建物群、西半部には五角形住居を含む多数の竪穴住居が営まれている。しかし、集落に対応する墓域は明確ではなく、僅かに遺跡の西端において８基の方形周溝墓が検出されるにとどまっている。伊勢遺跡の周辺部でも弥生時代中期、弥生時代後期初頭、古墳時代初頭～前期にかけての方形周溝墓群からなる墓域が見つかっているが、伊勢遺跡の盛行期にあたる弥生時代後期中葉～末にかけて墓域が明らかではない。これは、伊勢遺跡が近江南部地域の政治や祭祀に係わる特殊な遺跡であって、一般的な農耕集落ではないことに起因するものと見られる。

伊勢遺跡の西端で検出された方形周溝墓群の周りにはＬ字状に巡る区画溝が伴っている。幅約３ｍ、深さ20～60cmを測り、浅い逆台形状の断面形を呈している。この方形区画状の溝は弥生時代後期とみられ、東西60ｍ以上、南北50ｍ以上の規模を有する。一辺10ｍ前後のやや大型の方形周溝墓（２号墓・４号墓）の周辺に６ｍ前後の方形周溝墓が数基伴っている。

弥生時代後期の方形周溝墓、区画溝を切って古墳時代前期の方形周溝墓（８・９号墓）も造営されている。９号墓の周溝底からは丸底化した受口状口縁甕が供献されており、古墳時代前期まで墓域として認識されていたことが窺われる。

いずれにしても、伊勢遺跡の墓域としては小規模であり、時期的にもやや新しいと思われる。周辺部の調査成果からみても、伊勢遺跡の盛行期にあたる墓域が判然としない。伊勢遺跡が一般集落の構成とは異なると思われ、二次的に再編された国の中枢として機能した遺跡であったことを傍証すると思われる。

伊勢遺跡第28次発掘調査概要報告書所収　1998年３月　守山市教育委員会



挿図32　伊勢遺跡方形周溝墓群平面図

第９章　伊勢遺跡の歴史的位置

伊勢遺跡は弥生時代後期中葉から後期末にかけて発達する大規模な集落遺跡である。その規模は南北450ｍ、東西700ｍ、総面積30万㎡に及び、国内の弥生時代後期の集落遺跡としては最大規模と言える。遺跡中心部には、二重の柵の内側に大型建物が整然とＬ字型に配列した方形区画と呼ぶ特殊な空間が存在する。86㎡の床面積を測る大型建物ＳＢ－１を中心に、３棟の棟持柱をもつ建物が西側に配列されている。南面する前庭を囲むように建物が配置されており、後の豪族居館や都城中心部の構成に繋がるものと考えられ、政治を執り行う中枢施設と目される。それに隣接して総柱式で、一辺９ｍ、床面積81㎡を測る正方形の大型建物ＳＢ－10が検出されているが、佐賀県吉野ヶ里遺跡の北内郭で発見されているような楼閣のような施設と見られる。方形区画内部の建物と伴に、政治執行に係わる重要な施設と考えられる。巨大な集落遺跡の中心部に、柵で方形に区画された中に大型建物を整然と配置していることがわかる遺跡であり、全国的にみても殆ど類例を見ない。

さらに方形区画や楼観を中心にして、半径110ｍほどの円周上に独立棟持柱付大型建物が６棟発見されている。この円周上には屋内に棟持柱を持つ大型建物ＳＢ－６（栗東市野尻地区）や、屋内棟持柱付建物の可能性のあるＳＢ－Ａ（大洲地区）などが発見されており、今後さらに発見される可能性がある。南代地区で検出された独立棟持柱付大型建物ＳＢ－４の柱穴からは、炭化米が出土しており、造営時あるいは造営後、何らかの祭りが行われたものとみられる。また、大洲地区の独立棟持柱付大型建物ＳＢ－８の近くでは、建物廃絶後に破砕鏡とともに勾玉や管玉などが埋納されていた。棟持柱をもつ建物は、銅鐸や弥生土器にもしばしば描かれており、祭祀に係わりをもつ建物と推測される。これらの独立棟持柱付建物は、弥生土器の編年からみて三小期ほどの時期差を持っており、伊勢遺跡の存続期間のなかで何度も造営されたと見られる。建物群の外側には円弧状に伸びる区画溝と建物群は同心円状に対応しており、円周上に大型建物が配置されていたと見られる。このような大型建物の配列は国内でも類例を見ないもので、伊勢遺跡の特異さを物語っている。

大洲地区では円周上に配置された大型建物の外側から、一辺13.5ｍ、床面積185㎡を測る大型竪穴建物が検出されている。竪穴屋内に棟持柱を持ち、特異な上屋構造の大型建物であったと考えられる。さらに、壁際に焼成された壁材が置かれ、床面は30㎝に及ぶ貼床を施した後、精良な粘土を張り上面から焼成を加えて焼床を形成している。このような建築技術は類例がなく、しいて類例を挙げれば中国や朝鮮半島の竪穴住居の床や壁に用いられた「紅焼土」と呼ばれる建築技術に類似する。弥生時代後期に並行する原三国時代後期の朝鮮半島大也黒遺跡例には、壁や床を意図的に焼くものがあり、伊勢遺跡の大型竪穴建物例は東アジアの建築技術の系譜上に位置する可能性がある①（大貫静夫 2001.3）。いずれにしても、大型竪穴建物は一般的な住居ではなく、家屋文鏡にみる首長の居所、あるいは饗応の祭りを行う「大屋」のような特殊な施設とみられる。

南代地区では区画溝ＳＤ－１より取水する導水施設が発見されているが、服部遺跡や纒向遺跡で発見されている浄水施設とみられる。古墳時代には王の祭祀として居館や古墳の形象埴輪に取り込まれているが、伊勢遺跡ではクニの政治や祭祀に係わる重要な施設として先駆的に導入されていたと考えられる。方形区画の建物や楼観・祭殿で政治や祭祀を執り行うにあたり、浄水施設は重要な施設であったとみられるが、纒向遺跡例のように初期ヤマト政権の祭祀として受け継がれ、古墳時代中期には古墳上で行われる首長の祭祀として形式化すると考えられる。伊勢遺跡の導水施設は、王が執り行う政治・祭祀に係わる主要な施設とみられ、古墳時代につながる祭祀施設として重要な位置を占めている。

以上の通り、伊勢遺跡は弥生時代のクニの中枢を知る上で貴重な内容を有している。伊勢遺跡は弥生時代後期中葉から後期末にかけて発達するが、それは年輪年代学やＣ14暦年較正年代等の進展により紀元１世紀末から２世紀末にかけてと考えられる。後漢書によれば、紀元１世紀中ごろの日本列島には百余国のクニがあったと記され、紀元57年には後漢より北九州の奴国王に金印が送られている。北九州以東の地域集団は、鉄等の入手をめぐり強い危機感を抱いたとみられ、近畿の弥生後期社会は集落や土器文化からみて大きく動揺している様子が窺える。伊勢遺跡は、このような東アジアの政治情勢を背景に紀元１世紀末頃、出現するとみられる。伊勢遺跡が発達を遂げる弥生時代後期中葉から後期末の時代は、近畿と北部九州を結ぶ瀬戸内ルートの物流が一時的に停滞するという指摘があり②（福永伸也　2001・10）、替わって日本海沿岸ルートの物流が活性化している。

この時期、近江ばかりではなく近畿や山陰・北陸、東海・関東地方で石器が消滅し、鉄器が急速に流通している。弥生時代後期における列島規模での鉄器化の進行は、日本海ルートでの物流が基軸となっていたと推測される。高島市熊野本遺跡など鉄器が近江各地の遺跡で出土しており、近畿・東海地域への物流の中継地点として近江が重要な役割を担っていたと考えられる。伊勢遺跡の生成・発展の背景として日本海ルートによる物流の活性化が想定されるが、丹後地方の高坏形土器が栗東市下鉤遺跡や高島市針江北遺跡など近江各地で出土しており、日本海沿岸地域から人や物が移動していた事を示している。伊勢遺跡に集中する五角形住居は、山陰や北陸地域との深い結びつきを示していると考えられるが、湖南地域から山城・河内地方にも点々と分布しており、近江を介して近畿各地へ人・物・情報を伝達する中継基地として機能していたと見られる。また、下鉤遺跡や下長遺跡で発見されている布掘り建物や、伊勢遺跡や湖南地域で散見される周溝をもつ竪穴住居の存在は、北陸地域との建築技術の交流を示すものである。

伊勢遺跡が発達する弥生時代後期、近江型土器の分布動向を観察すると、日本海沿岸地域からの一方的な文化受容だけではなく、積極的な近江文化の動態が浮かび上がってくる。愛知県一宮市の八王子遺跡では遺跡の一角で検出された土坑からまとまって受口状口縁甕を中心とする近江型土器が出土した。胎土分析の結果、近江湖南地方から持ち運ばれた事が判明したが、山中式に代表される東海地方の後期社会の開始と近江との深い関わりが提起された③(赤塚次郎 2002)。さらに、近江型土器は東海から東京湾沿岸の南関東地域へ持ち運ばれている。さらに、中部高地から群馬・埼玉など北関東にも及んでいる。一方、福井・石川・新潟など北陸地域へも近江型土器が波及しており、日本海岸地域との交流が一方的なものではなかったことが窺われる。以上の通り、汎東日本地域と近江の係わりは深く、近江が物流のうえで中継基地として機能していた事が看取される。近江型土器は東日本ばかりではなく、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて山城地域にも深く影響を与えているほか、大和・河内・摂津など近畿各地に持ち運ばれている。さらに山陰・中部瀬戸内、北九州の今川遺跡でも出土しており、広範囲に分布していることが知られている。伊勢遺跡が特殊に発達する時期は、近江型土器の分布が示す通り近江からの文化波及が強化しており、東西日本を結ぶ大きな役割を担っていたことが想定される。

舶載鏡などの分布からみて、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて、再び北部九州と近畿地方を結ぶ瀬戸内ルートが活性化し始めると、東西日本の結節点となる軸線は河内・大和へ変移すると見られる。中・南河内を中心とする庄内甕は全国に波及するようになり、三輪山山麓の纒向遺跡では前方後円墳の造営とともに、東海地方を中心に全国各地より土器が持ち運ばれている。この時期は、尾張・吉備・北陸・山陰・丹後など、土器文化の地域色が明確化しており、「國」とも呼ぶべき二次的に再編成された地域社会が各地に成立していたことが想定される。魏志倭人伝によれば、二世紀末から三世紀初頭の倭国には邪馬台国の連合下にある三十余りの国があると記されているが、各地に成立した「國」とその上に成り立つヤマトを中心とする政治体制に重なり合う。この時期には伊勢遺跡は衰退化しており、替わって交易拠点の性格をもつ下長遺跡が発達を遂げている。

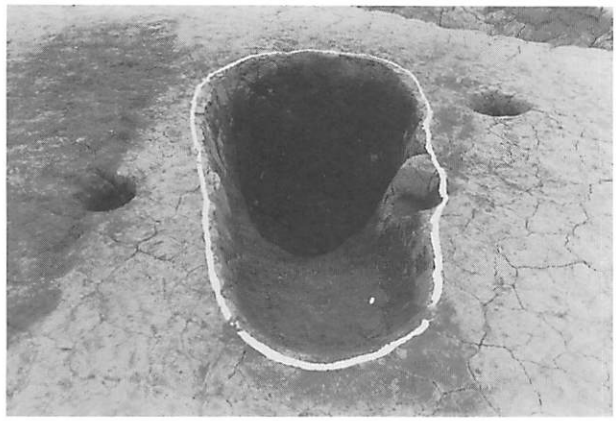
伊勢遺跡はヤマト政権の成立に先立ち、いち早く近江南部地域において二次的再編と統合を遂げた「國」の中枢と考えられる。後漢から冊封を受けた北部九州より以東の集団にとって、倭人社会を代表する政体の形成は危急の課題であったとみられるが、近江は日本海沿岸地域と近畿、東海を結ぶ中継地として、鉄等の金属器の流通と分配に深く係わっていたことが推測される。野洲市大岩山における近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の集中埋納は、弥生時代後期から後期末にかけて、近江が東西日本の結節点としての役割を担っていたことを示唆している。伊勢遺跡は、近江南部地域の「國」の中核としての機能ばかりでなく、東西日本の地域集団を結ぶ政体のさきがけとしての側面も有していたのではなかろうか。伊勢遺跡における他に類例を見ない大型建物群の構成は、東西日本の交流・交易を通して、強力な権威を有する王の存在を推測させる。

巨大古墳に象徴される初期ヤマト政権は、突如出現するかのように立ち現れるが、実際には特殊具体的な歴史過程があったと思われる。伊勢遺跡は、近江南部に形成された國の政治・祭祀の具体像を呈示する貴重な遺跡であると伴に、ヤマト政権形成の前史を考える上でも重要な位置を占めている。

①大貫静夫編「韓国の竪穴住居とその集落」国際日本文化研修センター千田研究室刊 2001・3
②福永伸也「邪馬台国から大和政権へ」大阪大学出版会　2001・10
③赤塚次郎「濃尾平野にかける弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集　愛知県教育サービスセンター　2002

調査地全景（西から）

ＳＢ－１　全景（南西から）



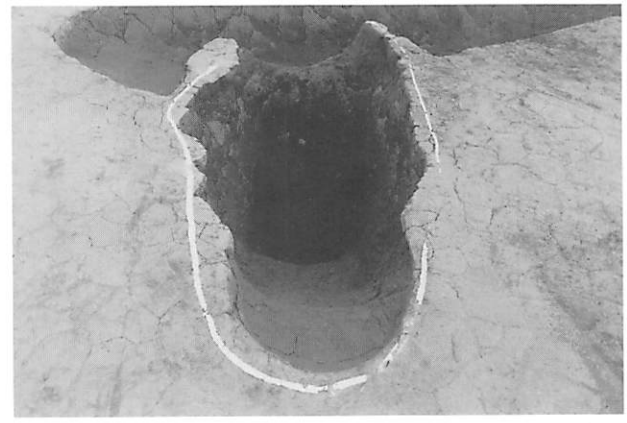
SB－1　P－1

SB－1　P－1

SB－1　P－2

SB－1　P－3

SB－1　P－4

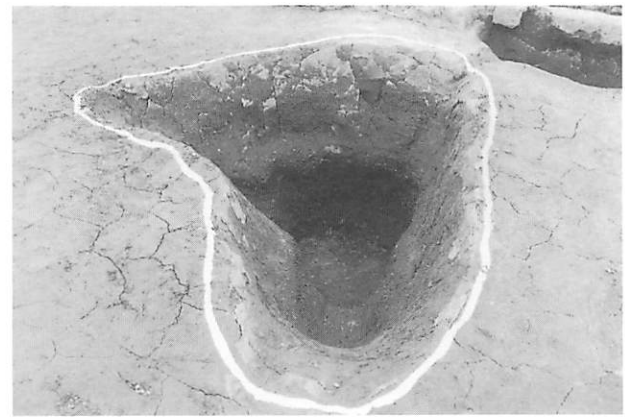


SB－1　P－5

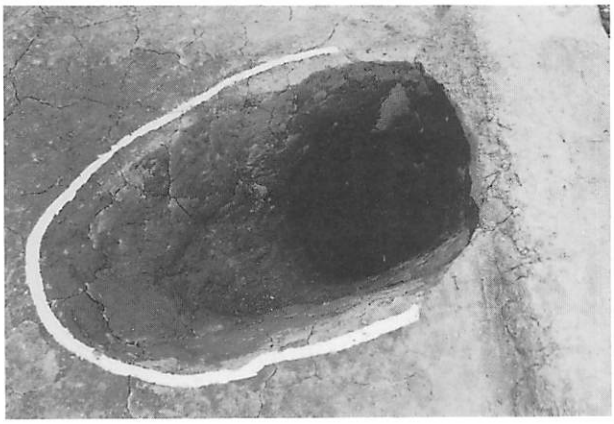
SB－1　P－6

SB－1　P－6

SB－1　P－7



SB－1　P－7

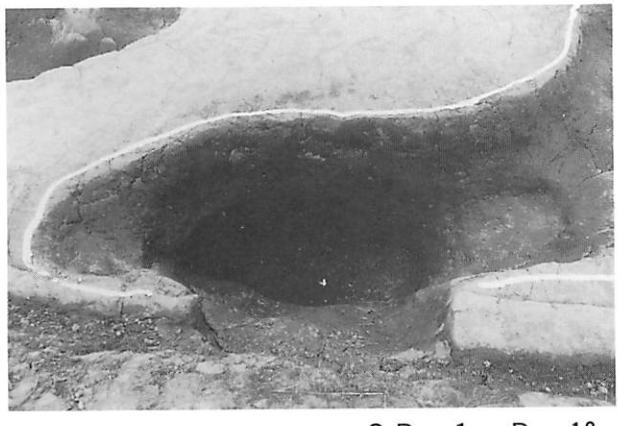


SB－1　P－8

SB－1　P－9

SB－1　P－10

SB－1　P－11



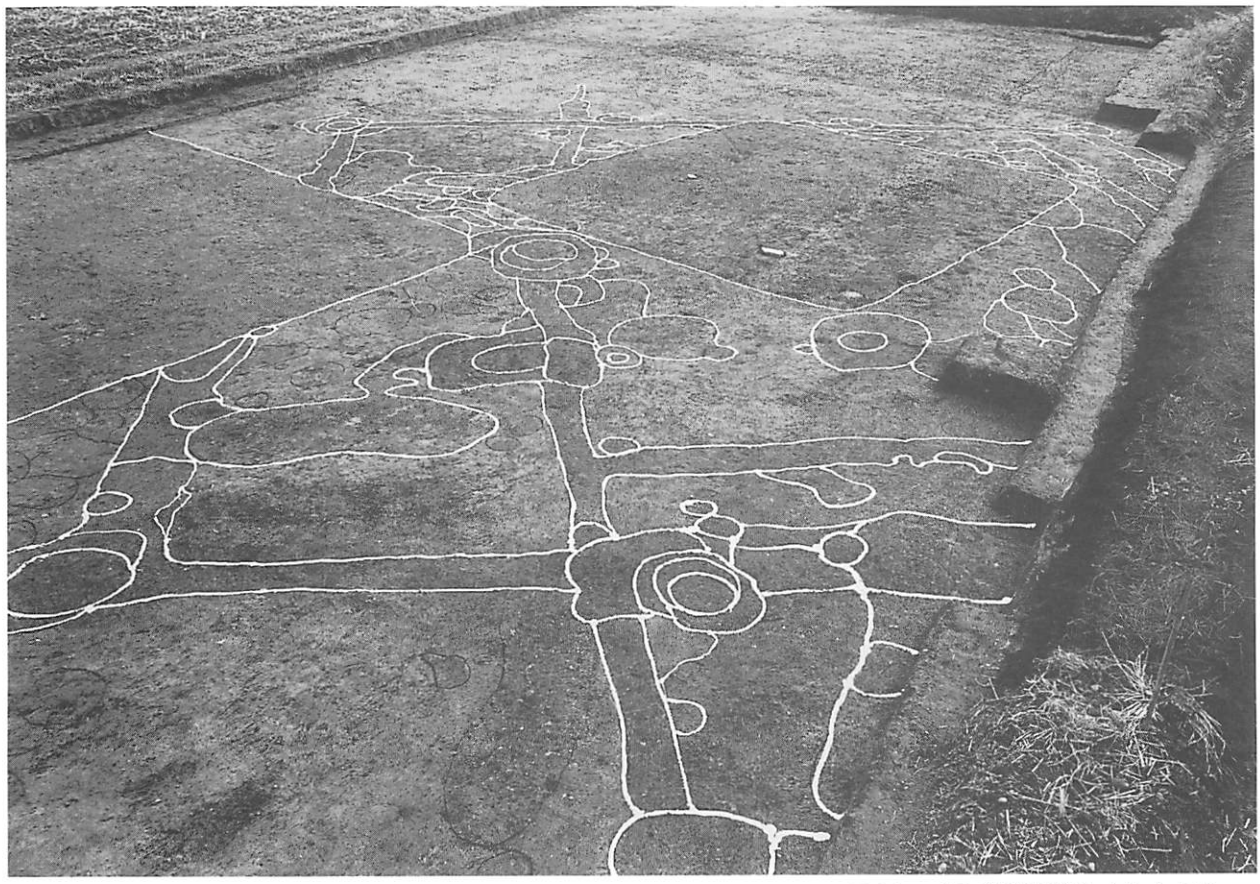
SB－1　P－10

SB－1　P－11

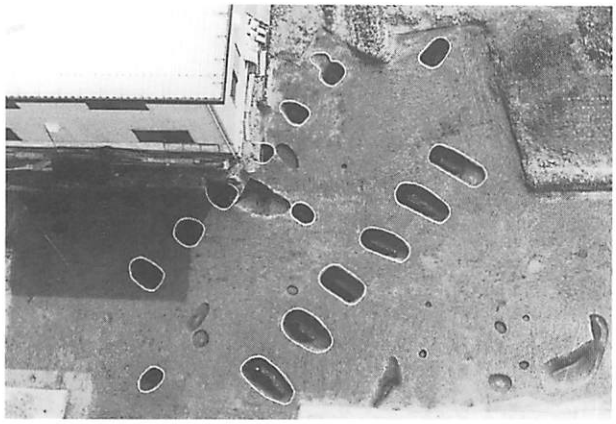
56 次調査区全景（西から）

56 次調査区全景（南西から）

52・53次調査区全景（東から）



ＳＢ－10検出状況（北から）



独立棟持柱付大型建物（ＳＢ－１）

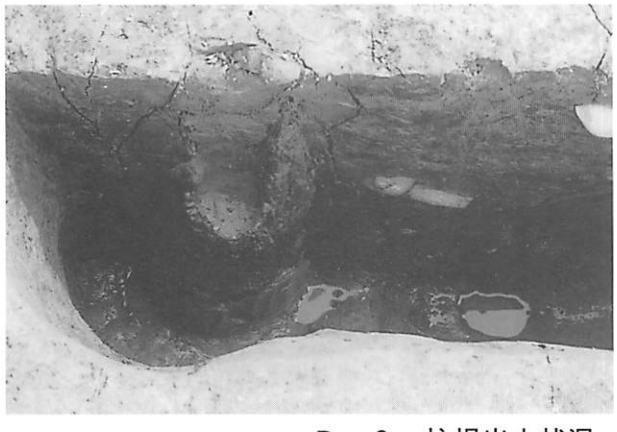
Ｐ－１　柱根出土状況

Ｐ－２　柱根出土状況

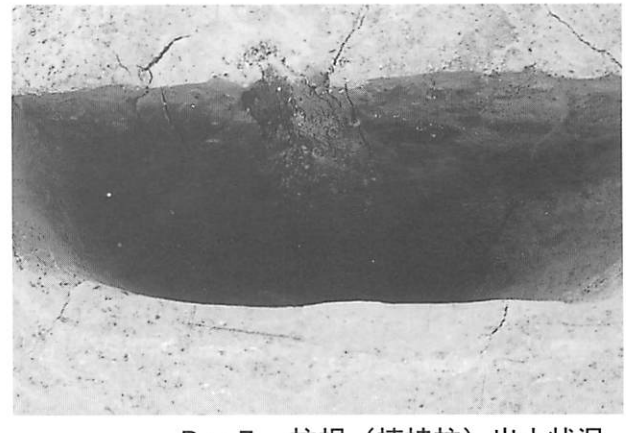
Ｐ－３　柱根出土状況

Ｐ－４　柱根出土状況

Ｐ－５　柱根出土状況

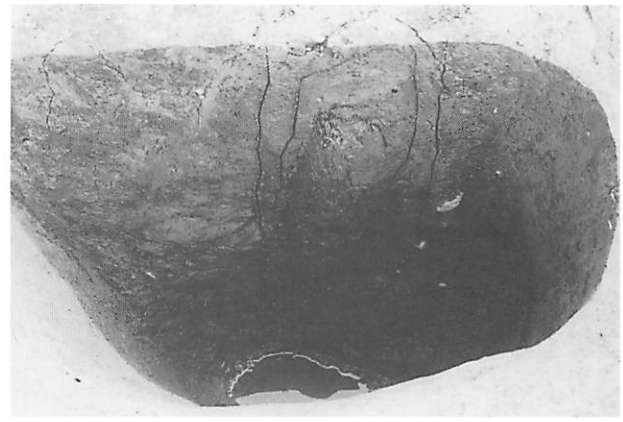


Ｐ－６　柱根出土状況



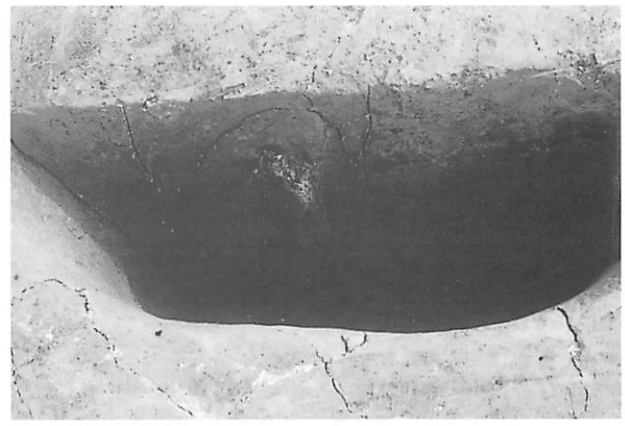
Ｐ－７　柱根（棟持柱）出土状況

P－8　柱根出土状況



P－9　柱根出土状況

P－10　柱根出土状況



P－11　柱根出土状況

P－12　柱根出土状況

P－13　柱根出土状況

P－14　柱根出土状況

P－15　柱根（棟持柱）出土状況

P－1　柱根（棟持柱）

P－2　柱根

P－3　柱根

P－4　柱根（棟持柱）

P－5　柱根

P－6　柱根

P－7　柱根（棟持柱）

P－8　柱根

P－9　柱根

P－10　柱根

P－11　柱根

P－12　柱根

P－13　柱根

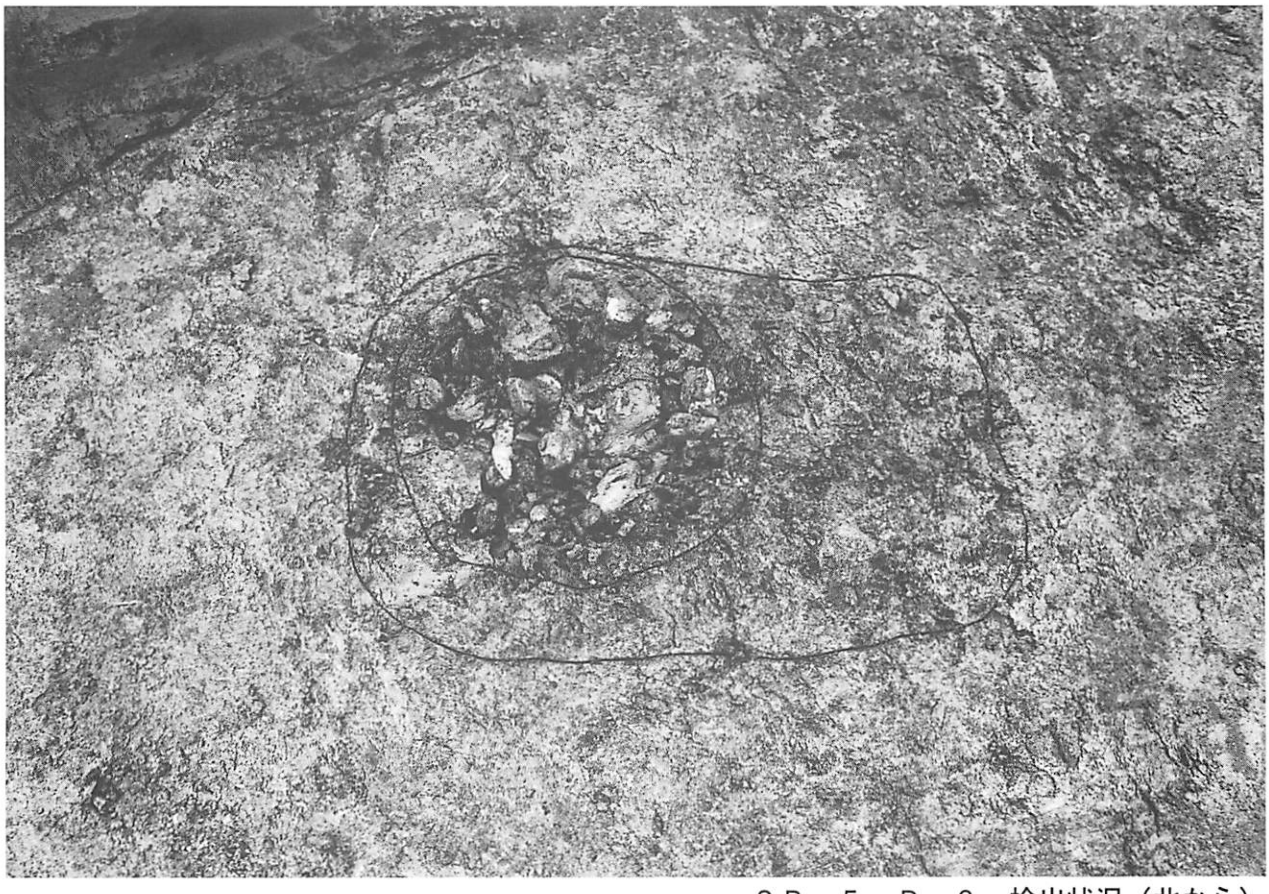
P－14　柱根

P－15　柱根

ＳＢ－１　出土柱根法量表　　Ｌ：残存長、Ｄ：最大径

柱穴番号	法　量(cm)	備　　考	柱穴番号	法　量(cm)	備　　考
P－1	L 73.4、D 31.0		P－9	L 44.1、D 24.5	
P－2	L 49.2、D 28.4		P－10	L 68.0、D 27.5	
P－3	L 55.0、D 31.5		P－11	L 47.0、D 20.0	建物中央の柱
P－4	L 56.4、D 29.5		P－12	L 53.0、D 29.3	
P－5	L 53.2、D 25.5		P－13	L 61.7、D 26.5	
P－6	L 52.5、D 27.0		P－14	L 44.5、D 27.5	
P－7	L 84.8、D 30.6	棟持柱、底面に切断痕	P－15	L 59.0、D 27.0	棟持柱
P－8	L 53.5、D 28.0				

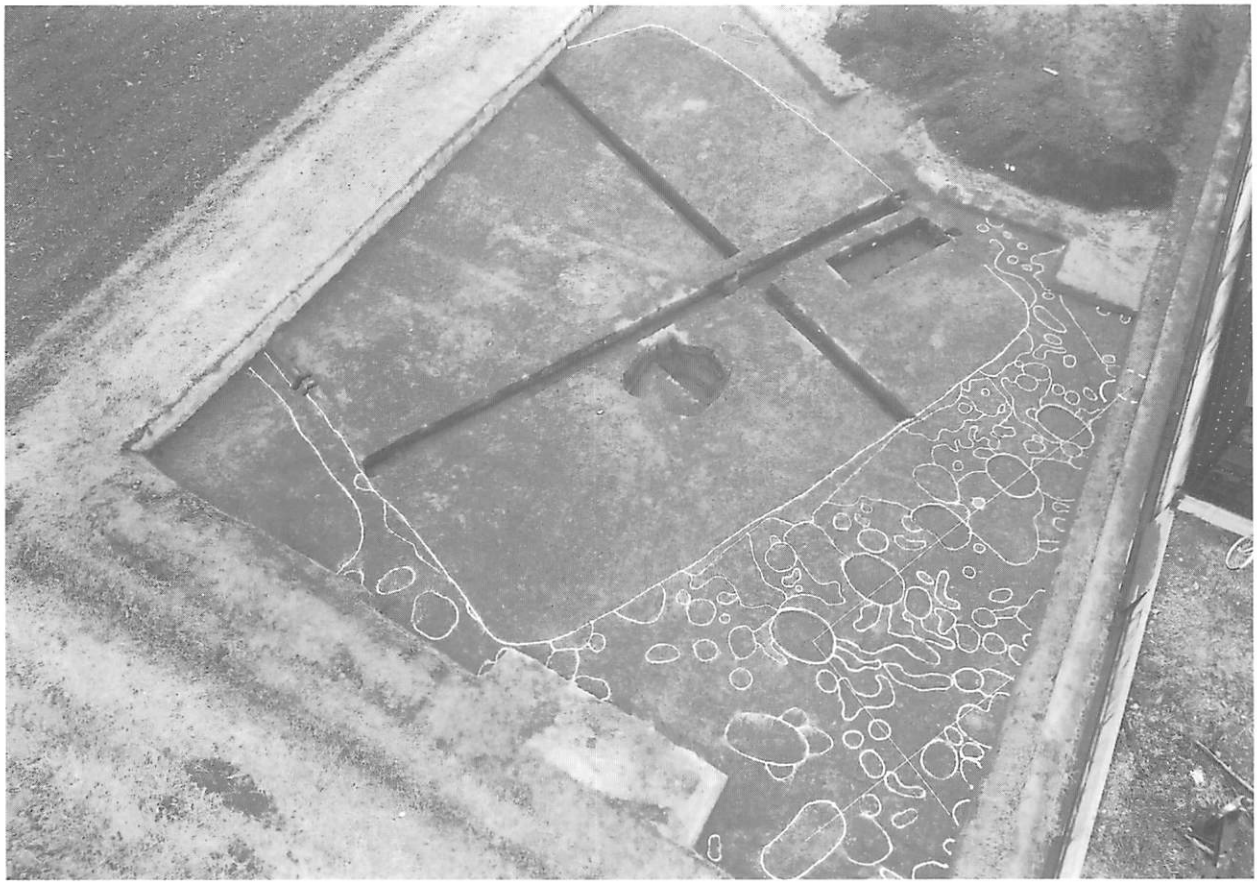
ＳＢ－５　全景（南東から）



ＳＢ－５　Ｐ－２　検出状況（北から）

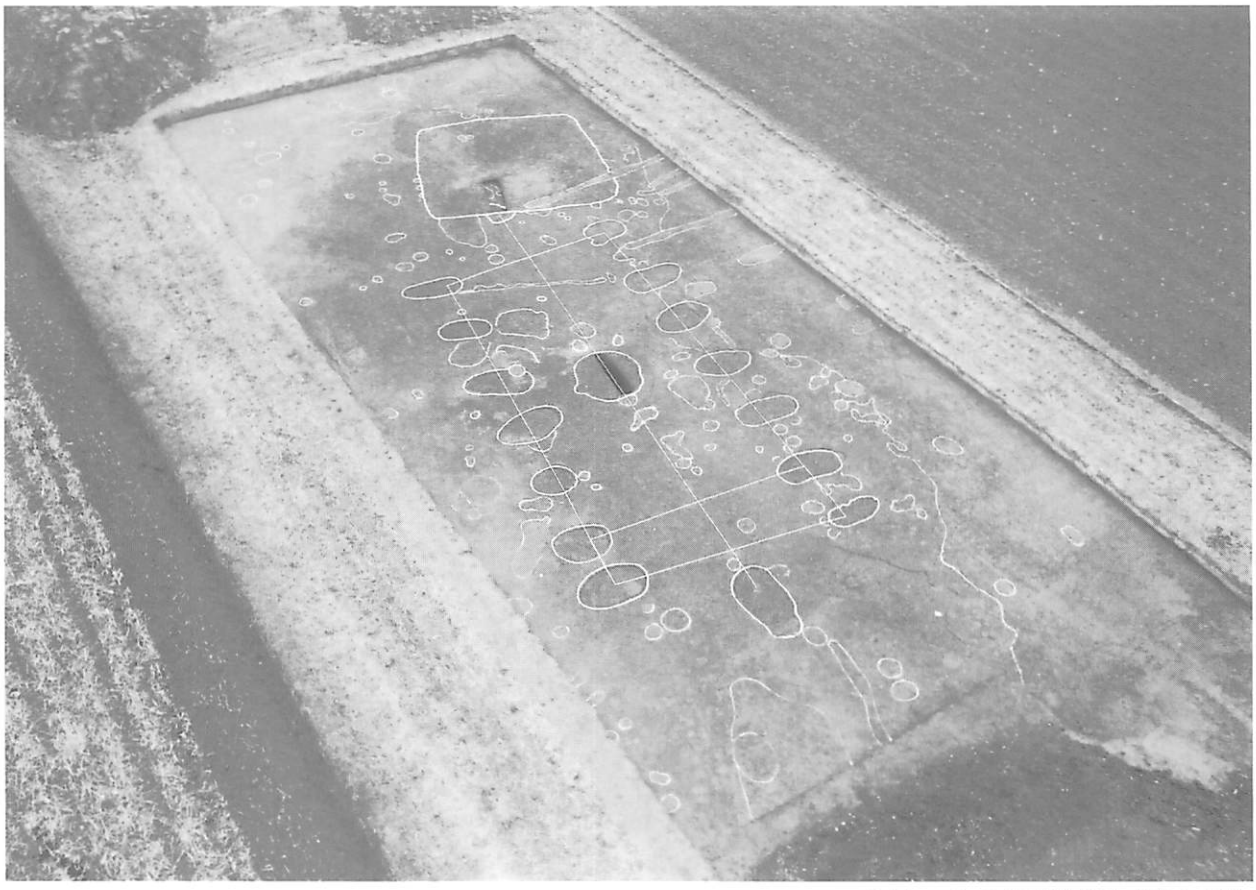
大型竪穴建物検出状況（南西から）

大型竪穴建物検出状況（南西から）



Ｔ－１　調査地全景（西から）

焼壁材出土状況（北から）

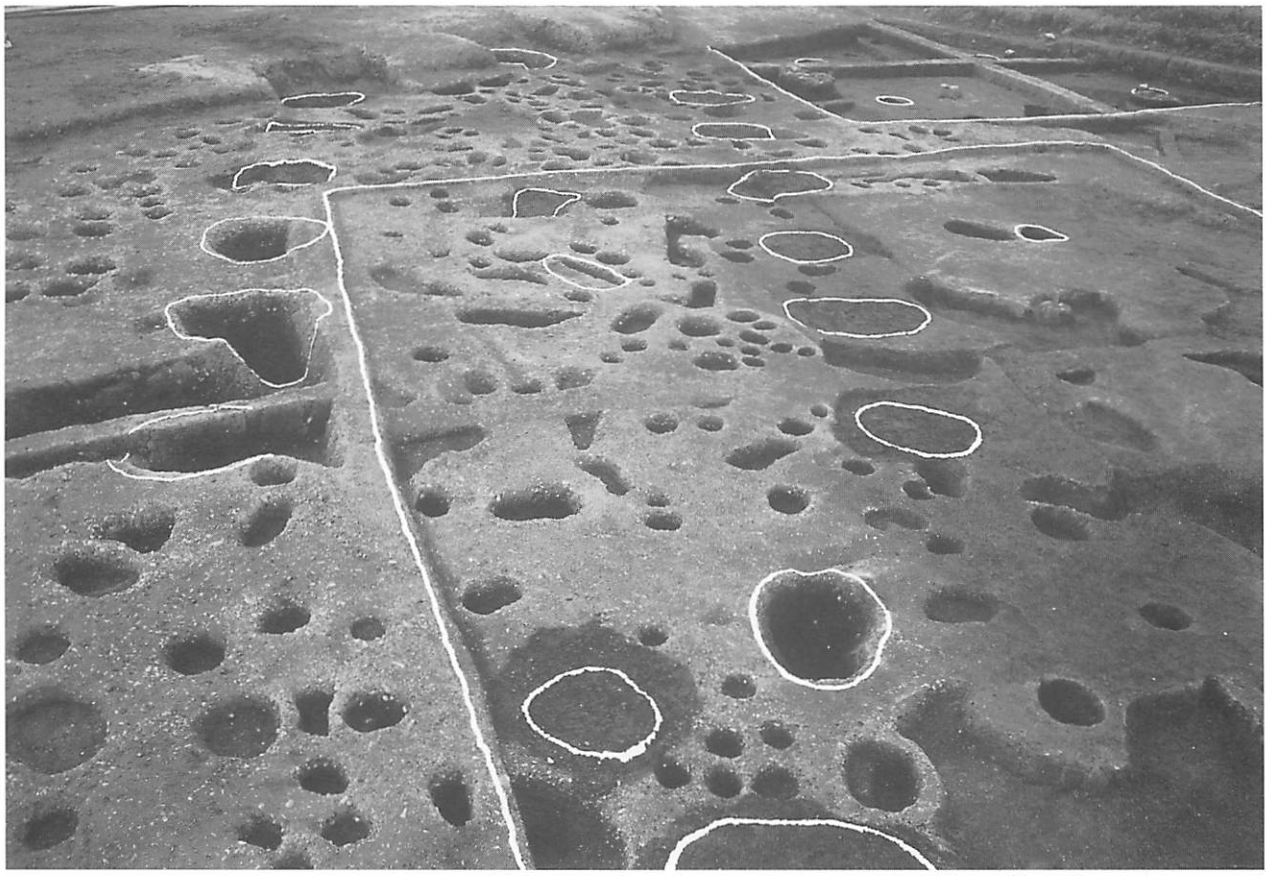


ＳＢ－１２検出状況（東から）

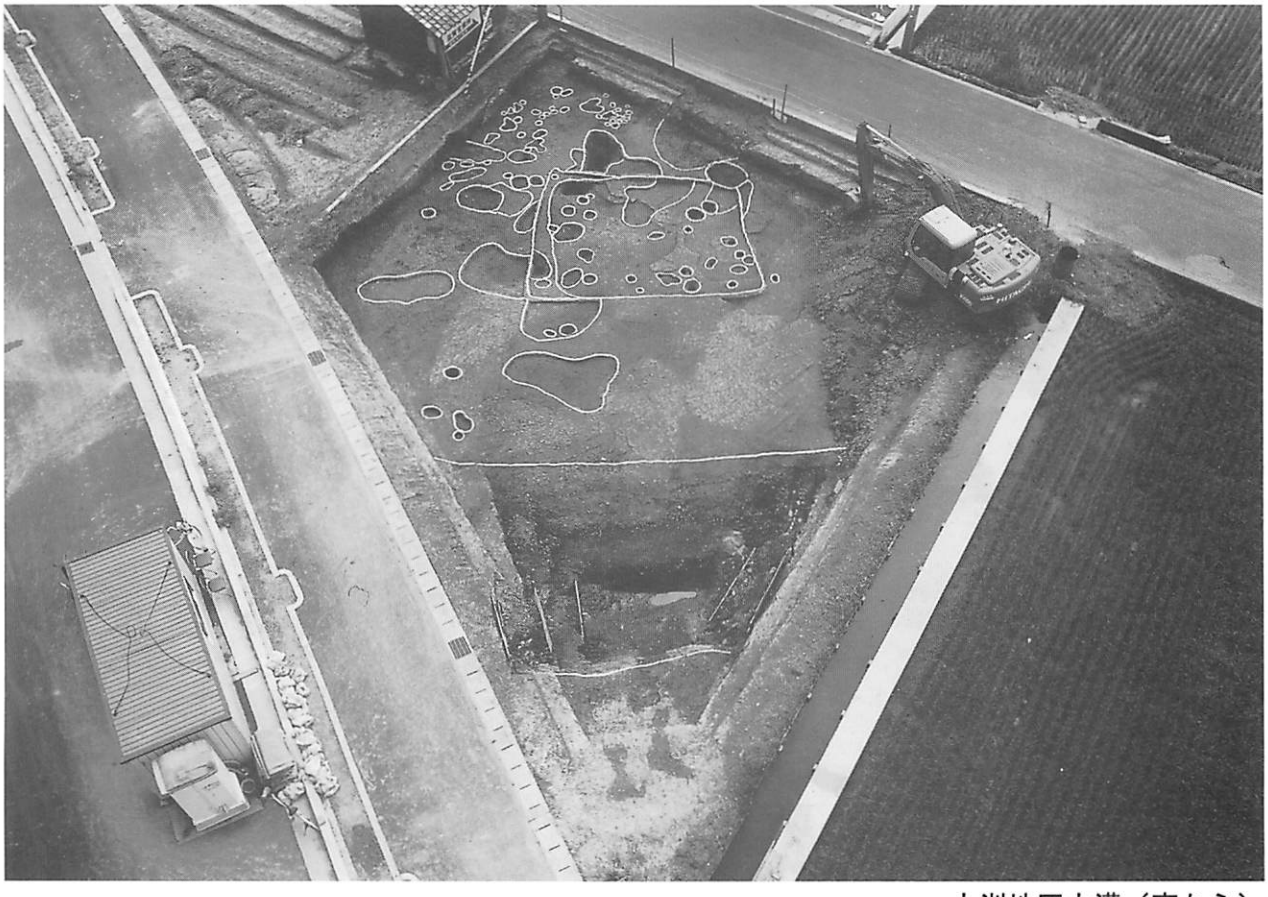
ＳＨ－３検出状況（北西から）

第67次調査ＳＸ－１　調査風景（西から）

ＳＸ－１　全景



ＳＢ－８　検出状況（北から）



大洲地区大溝（東から）

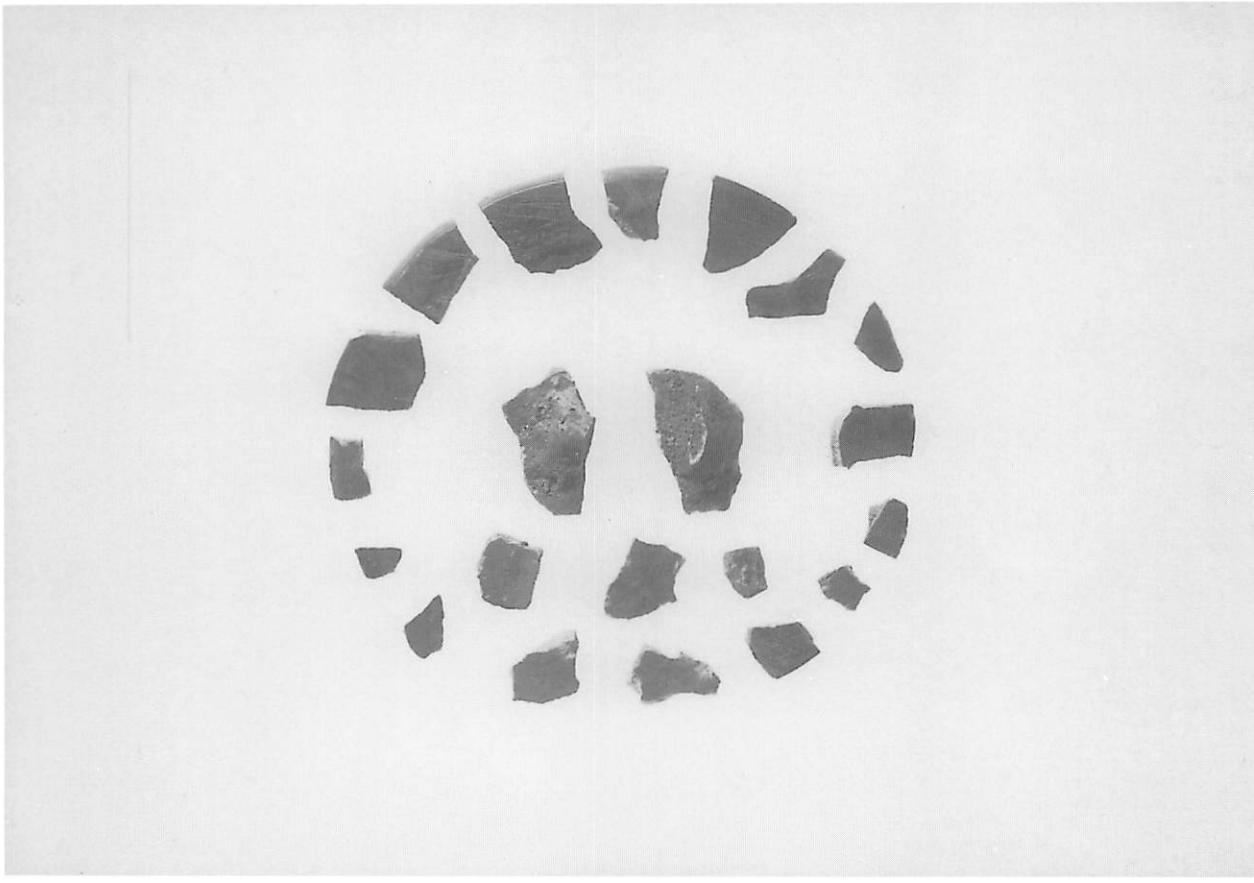
遺構検出状況（西から）

区画溝掘削状況（東から）

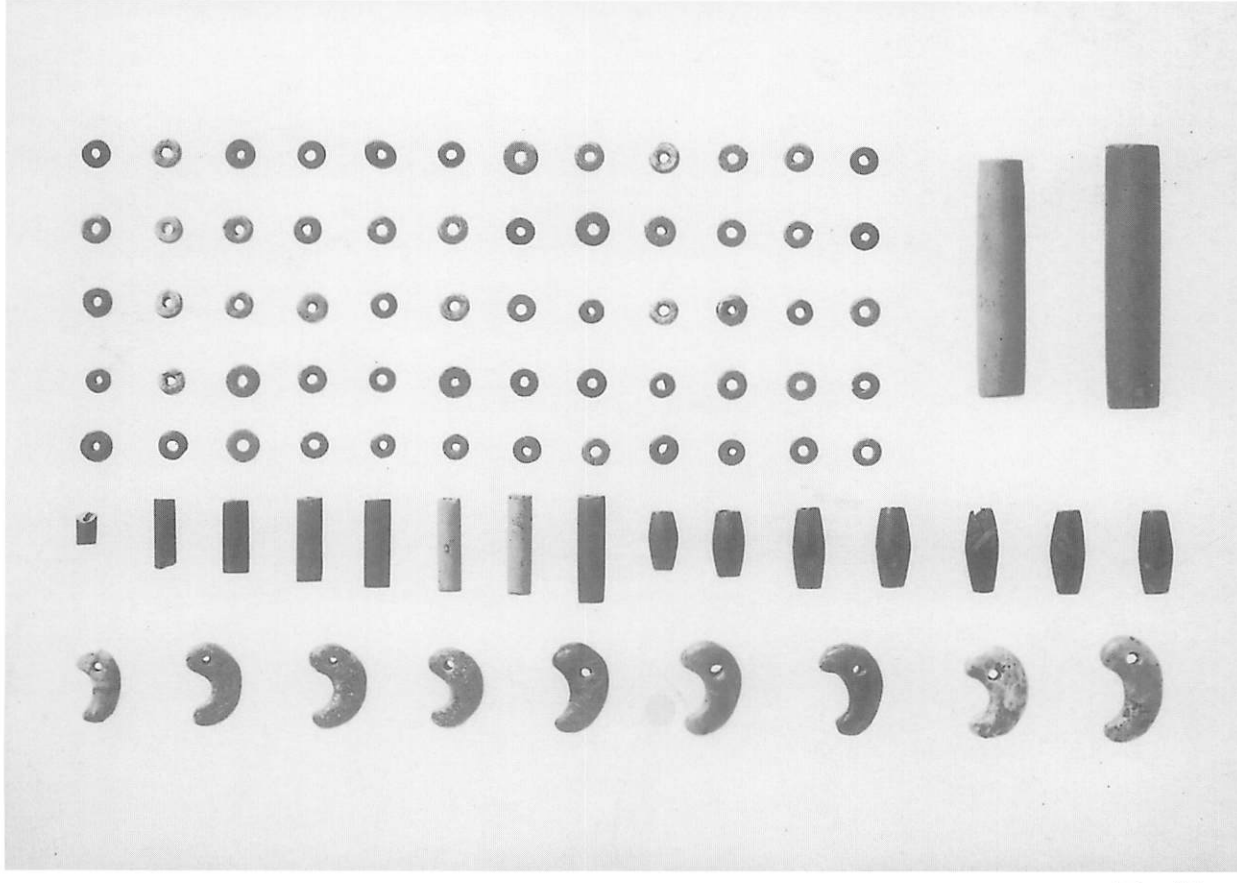
第2次調査五角形住居（東から）

第4次調査（南東から）

図版18　伊勢遺跡大洲地区出土遺物



破砕鏡



玉　類

報告書抄録

ふりがな	いせいせきかくにんちょうさほうこくしょⅦ
書名	伊勢遺跡確認調査報告Ⅶ
副書名	伊勢遺跡確認調査概要
シリーズ名	守山市文化財調査報告書
編集者名	伴野幸一
編集機関	守山市教育委員会
所在地	〒524-0021　滋賀県守山市吉身二丁目5番22号　TEL　077－582－1156
発行年月日	西暦　2009年3月25日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°　′ 〃	°　′ 〃		㎡	
伊勢遺跡	守山市伊勢町	207	045	35 2 26	135 59 1	平成10年1月～平成20年9月		確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊勢遺跡	集落	弥生時代後期	土壙・柱穴・溝 竪穴住居・大型建物	弥生土器	

伊勢遺跡確認調査報告書Ⅶ

伊勢遺跡確認調査概要

守山市文化財調査報告書

発　行　日　平成21年(2009)3月

編集・発行　守山市教育委員会

滋賀県守山市吉身二丁目5番22号

印　　刷　有限会社　土肥印刷